大事なあなた

トウリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大事なあなた

【Ｎコード】
Ｎ８１２３Ｗ

【作者名】
トウリン

【あらすじ】
弱冠十歳にして大企業を背負うことになった新藤一輝は、その重さを受け止めかねていた。そんな中、一人の少女に出会い……。

本文は二部構成です。
第一部「迷子の仔犬の育て方」は、少年が少女への想いを自覚するまで。
第二部「眠り姫の起こし方」は、それから４年後、少女が少年への想いを受け入れるまで、を書きました。

第一部は少年の成長物語、という感じですが、第二部はただのベタ甘話かもしれません……。
以降は、サイドストーリーになります。
のべぷろ！（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｏｖｅｐｒｏ．ｊｐ）に投稿した作品です。

プロローグ

しとしとと、絹糸のような雨が降っている。
黒色のスーツの内側にも、徐々に冷たい水が染み込み始めていた。手のひらの中に握り締めた漆黒のネクタイも、ぐっしょりと濡れそぼっている。
彼の周りには常に誰かがいたが、自分の視界に入るなと重々言い含めてある今は、気配すら感じられない。恐らく、この公園の木々の間にでも潜んでいるのだろう。
たった独り、彼はその細い肩に圧し掛かる重圧を受け止める。
身に余るその荷物を、放り出せるものならそうしてしまいたい。
――だが、それが不可能なことだというのは解りきっていた。他に代わりなどいないのだから。
初秋の夕暮れ時は、濡れた身体から次第に体温を奪っていく。
不意に。
顔に感じていた雫が途切れた。
目を上げると、セーラー服が視界に入る。更に上へ進むと、傘を差しかけて心配そうに見下ろす少女の目と出合った。
「大丈夫？」
年の頃は十二、三歳ほどか。
落ち着いた声音だが、容姿は幼い。黒目がちで大きな目はやや目尻が下がり気味で、鼻も唇も小作りだ。背丈は、多く見積もって、彼より手のひら一枚分高い程度だろう。
「大丈夫？」
少女が、もう一度訊いてくる。そうしながら、鞄の中をかき回して、そこからタオルを取り出した。
「これ、今日使ってないから……」
タオルを渡されるのかと思ったら、彼女が差し出したのは傘だった。彼が殆ど反射のようにそれを受け取ると、タオルを広げて頭に

被せてくる。
「もうすぐ暗くなるよ？　お家に帰らなくていいの？」
柔らかな声と髪を拭く絶妙な力加減が心地良く、彼の肩からは自然と力が抜けていた。
「四年生ぐらい？　うちの弟も同じくらいだよ。わたしだったら、弟が暗くなっても帰ってこなかったら、心配になるけどな」
――だから、帰ったら？
暗にそう言いたいのだろう。
彼はタオルの陰でふっと笑みを漏らした。
全く知らない者にとっては、自分はただの子どもだ。
何となく、そのことが嬉しい。
「……厄介な役割を押し付けられたので、何だか逃げ出したくなっていたんです」
無性に話を聞いて欲しくなって、曖昧な表現を口にする。本当は、そんな簡単なものではなかったけれど。
「厄介な役割？　学級委員でも押し付けられたの？」
学級委員――あまりにも可愛らしい「役割」に、彼は苦笑する。
彼ぐらいの年齢で「役割」と言えば、きっとその程度なのだろう。
だが、彼は学校というものに通わされたことはなく、ようやく言葉を話せるようになった年頃から、通常の勉学はおろか、経済学や帝王学などを叩き込まれていた。
「まあ、似たようなものです。僕には荷が重くて」
「大丈夫だよ。だって、みんなから推薦されたんでしょ？」
――推薦……僕は『選ばれた』のだろうか。ただ、そう決まっているからではないのか？
答えられずに押し黙っている彼に、少女は首を傾げた。彼は自嘲気味に答える。
「他に、適当な者がいないから……」
「じゃあ、君しかいないってことじゃない。大丈夫。できるよ」
タオルの上から、頭をポンポンと叩かれる。

――安易なことを、と思ったが、何故か不快ではなかった。
自分でも嫌というほど解っている――他にあの強大な権力を受け取るものがいないことは。
ただ、励ましでも重圧でもなく、自分を信頼して背中を押してくれる言葉が、欲しかっただけなのだ。
赤の他人で、見当違いで、軽い言葉であったけれど。
それでも、それに救われた。
「ありがとう」
そこにどれほどの想いが込められていたか、少女は知らない。
彼女はニッコリ笑うと、身を引いた。その笑顔が、彼の心の奥にずしりと沈みこむ。
「じゃあね。早く帰るんだよ？」
タオルも傘も彼に渡したまま、少女は彼が止める間も与えず走り出す。

一瞬の出会い。

弱冠十歳にして数万の社員を抱える大企業の総帥が誕生したのは、この時だった。

一

新藤商事は金融、エネルギー、金属、機械を柱に事業を展開しており、連結子会社まで入れた従業員数は三万を越える大企業である。

二年ほど前に、企業のトップを標的とした連続殺人が世間を賑わせた。犠牲者の数は三人――この新藤商事の総帥一雄＜かずお＞もその一人であった。当時、引退していた一雄の父一智＜かずとも＞が総帥の座に戻ると公表され、突然の訃報にも関わらず、この大企業は荒波を無事に乗り切った。そして、それ以降も常に安定した収益を上げ続けている。

その新藤商事の本社ビル最上階に設けられた総帥執務室の中で。

一人の少年が、苛立たしげに手にしていた書類を机の上に投げ出した。

「橘！　何でこんな事になったんだ？」

その声は澄んだボーイソプラノであったが、口調は険しい。

少年は先代総帥一雄の一人息子、新藤一輝＜しんどうかずき＞である。

現在、彼は十二歳。

その年にそぐわない筈の三つ揃えのスーツは、しかし、これ以上はないというほどに、ピタリと彼に似合っていた。身長は百五十センチそこそこと年齢相当なのだが、真っ直ぐに伸ばした背筋のためか、あるいはその身から滲み出る威厳のためか、実際よりも大きく見える。漆黒の髪と同じ色の瞳は目尻が鋭く、十年いや五年後には怜悧な容貌で女性を魅了するようになるだろう。

対外的には祖父が総帥を勤めていることになっているが、実際に経営を指揮しているのは、この少年だった。正当な跡継ぎが彼しかいなかったとは言え、まだ十歳の子どもがトップに立つなど、公表すれば株価大暴落の憂き目に遭いかねないため、祖父を外部への看板に仕立てたのだ。

もちろん、経営について、祖父のサポートを必要とするときもある。だが、スキップに継ぐスキップで経営学、経済学その他五つの博士号を取得している一輝は、ほぼ完全に、この大企業を独力で取り仕切っていた。この事実を知っているのは、新藤商事の上層部の中でも、ほんの一握りである。

そして、今、一輝からの叱責を受けている橘＜たちばな＞は事実を知っている人間のうちの一人である。彼は一輝が幼い頃からつけられている護衛兼秘書であった。細身の身体と柔和な表情をしているが、護衛の腕も秘書としての能力もずば抜けており、一輝にとっては唯一かつ絶対の右腕だ。

その右腕に対して、今、一輝は鋭い眼差しを向けていた。

その視線を受けて、橘は申し訳なさそうに首をすくめる。

「申し訳ありません。まさか、このご時勢に他人の連帯保証人を引き受ける者がいるとは思わず……」

「言い訳はいい。それで、このニコニコ金融という明らかに胡散臭い名前の金貸しは、どういうところなんだ？」

「まあ、悪徳サラ金以外の何モノでもありません。トイチの利子で、利息制限法は完全無視ですね」

「『彼女』の家の経済状況で返済は可能か？」

「う～ん。まあ、厳しいことは厳しいでしょうけれども、可能でしょう。弁護士に相談して利息を整理してもらえば……」

「そこに考えが至るかどうか、だな」

「ええ。ご父君はかなり実直なお人柄のようですから、恐らく、全額返済なさろうとするでしょうね」

一輝は手元にあるファイルに目を落す。この二年間における、『彼女』についての報告書だ。写真には、いつのものにも楽しそうな笑顔がある。

「大石金型製作所はうちと取引があるな」

「ええ、まあ。子会社の下請けですが。精密機器の部品としては、定評があります。あそこ以外を新たに探すとなると、結構手間でし

ょうね」
橘の言葉に、一輝は思案する。
「……では、製品を評価しているから契約を切りたくない、とでも言って、借金を肩代わりしてこい。僕の私財を使ったらいい」
「了解しました――一輝様は行かれないので？」
一輝の様子を伺うような橘の眼差しに、彼は冷ややかな一瞥を返す。
「何故？　末端の些事に顔を出す大企業の総帥はいないだろう」
「……はい。では、行ってまいります」
それ以上の差し出口を控えた橘が一礼して執務室を出て行くと、一輝の肩から力が抜ける。何枚もある大石金型製作所の娘の写真を、そっと指先で撫でた。
出会ったのは、たった一度。
その『たった一度』で向けられた笑顔は、今でも鮮明に心の中に残っている。
あの時彼女に出会わなければ、もしかしたら、自分は今ここにいないかもしれない。
幾つかの言葉と、温かい手。
彼女から受け取ったのは、その二つ。
それだけでこんなに想いを注ぐのは、単なる刷り込みに過ぎないかもしれない。
だとしても、この二年間の一輝を支えてきたのはその出会いであり、それ以降も追い続けてきた彼女の笑顔だった。
その笑顔を、彼自身に向けてくれたらどんなにか嬉しいことだろう。
時々、そんなことを夢想する。
だが、一輝が属する殺伐とした世界に、彼女を引きずり込む気はなかった。二人の生きる場所はあまりに違いすぎ、彼女の笑顔は、きっとここでは変わってしまうだろう。
それは一輝にとって、容認し難いことだった。

彼女がこのまま笑っていてくれるなら、自分は満たされる。
彼はそう信じていた――その時までは。

＊

「ええ！　差し押さえ！？」
弥生＜やよい＞は父である大石達郎＜おおいし　たつお＞の口から出たその言葉に絶句する。
この不景気に、大石金型製作所のような町工場は、確かに厳しい状況にあった。だが、製品の質の良さを買われて、一定の仕事は入っていた筈である。
「何でそんなことになったの？」
大石家は父達郎と一人娘である高校一年生の弥生、小学校六年生の弟睦月＜むつき＞と四歳の弟葉月＜はづき＞の四人暮らしである。母は一番下の葉月を産む時に出血が止まらず、亡くなった。それ以来一家の主婦として不動の地位を占めている弥生は、家族の中で最も強い。身長一四九・七センチで容姿も大抵二歳は若く見られる弥生だったが、上の弟の睦月に言わせると、怒った時の迫力はゴジラ以上なのだそうだ。
弥生は、目の前で土下座している父を仁王立ちで見下ろす。
「それが、だな……ほら、伊藤さんのところ、知っているだろう？」
「伊藤さん？」
「あ、ああ……」
父と弥生が共通で知っている伊藤さんと言えば、三軒向こうでゴム製品の下請けをしている、あの伊藤さんだろうか。そこそこ付き合いはあるが、別に親しいわけではないので気にしていなかったが、そういえば、ここ数日シャッターが下りたままだ。
首を傾げる弥生の前で、達郎が続ける。
「伊藤さんのところがどうも思わしくなくってな、どうしても支払いに足りないから、金を借りるってことになったんだ……」

どうも達郎の歯切れが悪い。
弥生は何だか嫌な予感がしてきた。その先を聞きたくはないが、聞かなくてはならない。
「それで……？」
「それで、だな……金を借りるに当たって、連帯保証人になって欲しい、と……。ほら、苦しい時はお互い様、だろう……？」
「もしかして――」
「すまん！」
達郎が畳を抉る勢いで額を擦り付ける。
「……くら……？」
「え？」
「いくら、なの？」
「う……サインをした時は、五百万とあった」
サインをした時は、ということは、今は違うと言うことだ。
「で、今は、いくらなの？」
「……」
「お父さん！」
達郎は口にするのが恐ろしかったのか、額を畳に押し付けたまま、右手を上げる。そして、人差し指が伸ばされた。
「百万……？」
達郎の額が畳をこする。
「まさか……」
「実は、そのまさか、なんだ……」
「いっせんまん……？」
顔を上げた父親が、コクリと頷いた。
「ウソ……」
弥生の膝から力が抜け、その場にへなへなと崩れ落ちる。
父の人が良いところは長所だと思っている。だが、これは話が別だった。
「ここのところ伊藤さん家のシャッター閉まってるのって――？」

「夜逃げだ」
くらりと、本気で眩暈がした。大石家は決して貧乏ではない。だが、一千万という大金を払うだけの余裕はなかった。
「弥生……？」
両手を畳につき、がっくりと頭を下げた愛娘に、達郎は恐る恐る声を掛ける。
「わたし……働くわ」
「え？」
「学校辞めて働くわ！　大丈夫、何よ、たかが一千万ぐらい。そんなの目じゃないわ！」
ガバリと顔を上げて、両拳を握り締めて弥生が宣言する。だが、意気軒昂な娘を、達郎は申し訳なさそうな目で見上げた。
「だが、な……弥生。俺も考えたくはない――考えたくはないんだが、五百万が三ヶ月で一千万になるようなところが、そんな悠長に待ってくれる筈が……」
「……何ですって……？」
「だから、五百万が三ヶ月で一千万に――」
「そんなの、無茶苦茶怪しいじゃない！　絶対、真っ当なところじゃない――」
思わず弥生が叫んだタイミングを見計らったかのように、ガラガラと工場の引き戸が開けられる音が響いた。そして、その後にだみ声が続く。
「大石さあん、大石さん。お金いただきに参りましたよお」
謙譲語だが微かに巻き舌なその声は、どう頑張っても銀行員のものとは思えなかった。やがて男が二人、工場の奥にある一家の居宅へと姿を現す――見た目も予想を裏切らなかった。チビガリと大男――一応は、二人ともスーツである。だが、めくられた袖から覗く肌には、なにやら素敵な模様が見え隠れする。髪型は七三分けではなく、チビの方は昔懐かしいパンチパーマ、大男の方はスキンヘッドだ。アクセサリの多さも、銀行員として有り得ない。

「いらっしゃいましたねぇ。大石さん、借りたものは返しましょうよ」
　ニヤニヤと薄笑いを浮かべながら、やせて小柄な方が上がり框に腰を下ろす。もう一方の大柄で、見るからに『脅すためにいる』という風体の男は、土間に腕を組んで立っていた。
「すみません、できるだけ早く……」
「おやおや、先に延ばせば延ばすほど、増えてしまいますよぉ？」
「でも、借金のことを聞いたのは、今日なので――」
「この工場を売っ払ったらどうですか？」
「え、ええ」
　押しに弱い達郎では、下手をすると、今この場で権利譲渡の書類にサインでもさせられそうだ。
　奥で聞いていた弥生は居ても立ってもいられず、つい顔を出してしまう。
「ちょっと、すみません。この借金なんですけど、利子が高すぎると思うんです！」
　鼻息は荒くとも、見た目が中学生の弥生には迫力の欠片もない。
　小男は弥生に目を向けるとニヤニヤ笑いを深くした。
「おやぁ？　こんないい子がいるんじゃないですか。ウチが持っている店なら、年齢無制限で働けますよ。最近は色々な趣味の客がいますからねぇ。中学生でもよく稼げますって」
　中学生という単語にピクリと反応しそうになるが、そこは堪えた。
「法律で金利の上限って、決められているんでしょう？　三ヶ月で倍になるなんて、計算がおかしいわ」
「あぁん？　お嬢ちゃん、ウチのやり方に文句があるってぇの？」
「文句じゃなくて、正しくないって言っているんです！」
　鼻面がくっつきそうなほどに顔を寄せられて、弥生は顎を引く。だが、足は一歩も引かなかった。いくら男が小さくても、同じ場所に立つと、頭半分ほど弥生の背の方が低く、男が被さるようにねめつけてくる。しかし、猫の睨み合いなら見下ろすほうが勝ちだが、

気合でなら弥生は負けていない。
けりがつきそうもない睨み合いに割って入ったのは、渋い男性の声だった。
「ちょっと、失礼」
一同がほぼ同時に振り返る。
新たな参入者は、年のころ三十歳ほどで、一分の隙もなくスーツを着こなした男性だった。注目を集めた男性は、人差指で銀縁眼鏡を押し上げる。その奥で、切れ長の目が柔和に微笑みの形を作っている。
「ニコニコ金融の方もご同席とは好都合な。大石さんが肩代わりした借金に関しては、正しい利息を計算し直した上で、新藤商事がお支払いします。こちらの製作所に廃業されると、我が社が困りますので」
「あぁん。急に出てきて何言ってやがんだぁ、オラ！」
品の欠片もない恫喝にも、男性は全く怯む様子がなかった。肩を軽くすくめていなす。
「申し遅れましたが、私、こういう者でございます」
自然な動作で名刺を取り出すと、小男と達郎に差し出した。
そこには「新藤商事株式会社　総務部　　橘　勇＜いさみ＞」と印字されている。
「ご意見がおありの様子ですね。それでは、後ほどうちの弁護団を行かせますので、そちらと話を詰めてください。私としましては、貴方がたの働き口がなくなるよりは良いかと思いましたが……」
そう言うと、橘という男は笑みを作る。優しげな表情だというのに、小男は一歩退いた。彼は、そこに暗に秘められた「文句があるなら潰すぞ」という脅しに気付かないほど愚かではなかったらしい。
「そ、れは、ちょっと……上のモンと話してからでないと……。おい、行くぞ」
急に勢いも言葉のキレもなくなった小男は、巨漢に顎をしゃくるとそそくさと出て行った。結局一言も発しなかった相方も、巨体に

似合わずあたふたと小男の後を追っていく。
彼らの姿を見送って、残された三人は再び顔を合わせた。
「それで、あんた、いったい……」
怒涛の展開についていけない達郎が、口ごもる。それは当然だろう。突然一千万円の借金を押し付けられたかと思えば、ろくに心構えをする間もなくやくざにしか見えない男たちに脅され、挙句に遥か雲の上の存在がその借金を肩代わりしてくれると申し出たのだ。
「驚かれていますね。いえ、私たちも普段から末端に目を配っておりまして、場合によってはこのように本社の方で対応させていただいているのです。大石さんの場合はご自身の借り入れではなかったことと、何より、こちらが倒産してしまうと他の部品製作所を探すほうが余程手間とコストがかかると考えられたので、このような次第になったわけです」
立て板に水を流すような橘の滑らかな語りに、元々口の達者な方ではない達郎は、全く口を挟めない。既にキャパシティを越えていた達郎は、考えることを放棄した。
「そりゃ、大変なことですな。俺らとしては助かります」
橘の台詞をそのまま受け入れ、深々と頭を下げる。
「先の先まで気を配るのは当然のことですから。では、後のことはこちらで処理をしますので、大石さんは普段と同じように操業してください」
そう言うと、橘は一礼して去って行く。
それまでポカンと成り行きを見守っていた弥生は、ハタと気付いて彼の後を追った。いくらなんでも、話がうますぎる。
「あの、ちょっと、橘、さん」
黒塗りのベンツに乗り込もうとしている彼を、後ろから呼び止める。振り返った橘は、「何か？」と問うように首をかしげた。
「えぇっと……、今回は、ありがとうございます。でも、あれって本当のことなんですか？新藤商事みたいな大企業がこんな小さな町工場を気にかけているなんて……」

「信じられない、と？」
口ごもった弥生の後を、橘が笑顔で引き継ぐ。面白がるような響きを含んだ彼の言葉に、弥生はためらいながらも頷いた。
「まあ、普通はそうでしょうね。今時、名刺なんてパソコンで簡単に作れますしねぇ。いいでしょう、よろしければ私の主人のもとにお連れします。この車に乗るのが不安でしたら、新藤商事の本社でお待ちしておりますし」
弥生は、橘の『主人』という言い方に違和感を覚える――普通、こういう場合には『上司』とか言うのではないのだろうか。
迷う弥生を、橘は答えを急がせることなく、無言で待っていた。
――名刺をもらったことは、あまり当てにならない。では、車はどうだろう？
使った車のことがわかれば、その持ち主を見つけることも可能なはずだ。
「ちょっと待っててもらえますか」
弥生はそう言い残すと、踵を返して居宅に戻る。そして電話脇に置いてあるメモ帳を取ると、橘のもとに引き返した。
「ああ、ナンバープレートですか。なるほど」
車の前方に回ってなにやら書き付けている弥生に、橘が面白そうに呟く。
もしも家に帰れないような事態になった場合に、達郎が彼女を探すためのツールの一つとして、そしてまた、いつかは身元が知れるぞという橘への牽制として、有用だろう。おっとりとした中学生のような外観によらず、結構しっかりしているらしい、と彼は評価する。
橘に観察されているとは知らず、弥生はナンバープレートを丁寧に書き写した。そこに『七時までに帰らなかったら警察に連絡して』と付け加え、電話の脇に置く。彼女が帰らなければ友達のところに電話をかけるだろうから、一番適切なタイミングで見られる筈だ。
今は午後の二時――五時間もあったら必要なことはわかるだろう。

そうしておいて、父には「ちょっと出かけてくる」とだけ伝え、携帯電話と財布を持って、橘のところに戻る。
大きな黒塗りの車に一瞬怯んだけれど、弥生は深呼吸を一つして後部座席に乗り込んだ。続いて、橘が人一人分のスペースをあけて隣に座る。
「そんなに緊張なさらなくても、捕って食いやしません」
広い後部座席の隅っこで見るからに身体を強張らせている弥生に、橘は苦笑しながらそう言った。
車が走り出してしばらくしてから、橘が口火を切る。
「実は、お父様にお話したことは、事実とは若干異なるんです」
その言葉にさっと弥生が蒼褪めると、彼は宥めるように微笑みかけた。
「私が新藤商事の者だということは偽りではありません。ただ、今回の救済措置に関しては、本社そのものの方針ではないのです」
「じゃあ、誰が？」
「私の主人、ですよ――新藤商事現総帥、新藤一智氏の孫にして唯一の後継者である、新藤一輝様です」
「総帥の、孫――？」
「はい。一輝様が個人的に、末端の様子に気を配っているのです。あの方は現在十二歳なのですが、すでに総帥の後継者として経営の実務に携わっておられていまして――ええ、あくまでも、後学のためですが」
「十二歳で、働いているの……？」
「あくまでも、一輝様の勉強のために、ですよ。一輝様はすでに大学まで卒業されているので、後は実地で学んでいく方がよいと、一智様が命じられたのです。二年前にお父上が亡くなり、新藤商事の跡継ぎとして、一刻も早く実務能力を身につけなければならなくなりましたから」
十二歳と言えば、本来なら上の弟の睦月と同学年だろう。睦月はサッカーに夢中で、予習復習はおろか、宿題さえ、弥生が口を酸っ

ぱくして尻を叩きまくっても終わらせないくらいだ。それはそれで困りものだが、十二歳で学校にも行かずに働かされているのもどうかと思う。子どもは『よく遊び、よく学べ』が一番だというのが、弥生のポリシーだった。

眉間に皺を刻んでいる彼女を横目で見ながら、橘が更に続ける。

「一輝様のお母様は、一輝様をお産みになった時に亡くなられました。三歳までは乳母がお育てしたのですが、それ以降は専門の家庭教師による英才教育を受けてこられまして、同年代の方と接したことが殆どありません。たまにそのような機会があっても、まるで子どもの世話をする大人のようで……」

そこで橘は深い溜息を吐く。心底から一輝のことを思っているに違いない橘の様子に、弥生の心も痛んだ。弟と似た境遇の少年を、何とかしてあげたい気持ちになる。

「少し年上の子どもを紹介したほうがいいんじゃないですか？」

何気ない自分の言葉に、橘の目がキラリと光ったことに、弥生は気づいていなかった。

「年上……でも、私には残念ながら伝手がなく……」

悩む橘の様子に、弥生の口から、ポロリと言葉が零れてしまう。

「わたし――わたしが、お相手してみましょうか？」

この時、すでに、弥生は何故この車に乗ったのかということを頭の奥へと追いやっていた。話を聞いただけで一輝への同情心でいっぱいになり、橘のことを怪しんでいたこともすっかり忘れ去っている。本来、弥生は人が好く、同級生からもよく頼られる性質なのだ。

そもそも、早いうちに母親を亡くし、弟二人と、下手をすると彼らよりも手のかかる父親の面倒をみてきた彼女だ。そんな境遇の少年の話を聞かされたら、放ってはおけない。

世話好きの血が騒ぐ。

「わたし、弟たちの面倒をみてきましたし、子どもの相手なら慣れてますから……」

「それは、お願いできるなら、是非。一輝様は人見知りをする方な

ので、まずは恩返しに身の回りの世話などを、ということにしたらいいと思います」
橘が体ごと弥生に向き直り、真摯な眼差しを注ぐ。彼女はそれを受け、力強く頷いた。
「力になれるかどうか判りませんけど、がんばります！」

――事の真偽を確かめに行くという話が、いつの間にか完全にすりかえられてしまっていたことに、弥生は全く気づいていなかった。

二

執務室のドアを叩くノックに、一輝は書類から顔も上げずに入室を促した。この部屋に入ってくるのは、橘しかおらず、時間的にもそろそろ帰ってきても良い頃間だった。

消音カーペットが敷かれているために足音はしないが、入ってきた人物がデスクの傍まで来たことは気配でわかる。

そこで初めて一輝は顔を上げ、視界に入ったものに動きが止まった。

ギリッと歯軋りし、呻くような声で張本人だろうと思われる者の名を呼ぶ。

「……橘」

子どもらしからぬ地を這う声に、橘は背後に立つ少女に何かを囁いた。彼女はやや不安そうな眼差しを橘と一輝に向けてから、部屋を出て行く。

二人きりになるのを待って、一輝が立ち上がった。

「何で、あの人がこんなところに来ているんだ！？」

普段、滅多に感情を荒げることのない一輝が噛み付くように問うているにも関わらず、橘は普段どおりの飄々とした顔をしている。

「彼女ご自身が、こちらに来られるとおっしゃったもので。何でも、援助の恩返しをしたいとか」

「だからと言って、何故、ここに連れて来るんだ！」

滅多に見ることがない激昂した一輝の表情に、橘は口元が緩まないように力を入れながら、「真に遺憾ながら」という表情を作って答える。

「いえ、私も気になさらないようにと申し上げたのですが、どうしても、と弥生様が。あまり強くお断りしたら、あの方を傷つけてしまうのではないかと……」

「なら、感謝の言葉を受け入れたらすぐに帰るんだな？」

一輝は溜息をついて、再び書類に目を落す。だが、その内容は全く頭には入ってきていない。とりあえず表面だけは平静を装っていたが、続く橘の言葉に、思考も動きも完全に停止した。
「それが……弥生様が、しばらく一輝様のお世話をなさりたい、ということで……」
「……何？」
それだけの返事をするのに、少なくとも五秒は間が空いた。そして、その後が続かない。
一輝の思考能力が回復する余裕を与えず、橘が畳み掛けていく。
「いえ、私は、お気になさらないようにと重ねてお伝えしたのですが……。弥生様はたいへん義理堅い方のようで、金銭を返すことは難しいので、せめて、一輝様のために何かをしたい、と。これを聞き入れられるまでは帰れない、と仰っています」
ベンツでの会話を知らない一輝には、事の真偽は判らない。通常であれば、弥生自身にも話を聞いて確認を取った筈だ。だが、動揺と――それ以外の何かのために、彼は本来の慎重さを欠いていた。
「――わかった」
ポロリと、そう答えてしまう。
――自分が態度を間違えなければ、彼女もすぐに諦めるに違いない。
一輝は、そう自分に言い聞かせた。
とにかく、すげなくすればいい。他人の前で仮面を被ることは、いつもしていることなのだから、と。
戸惑う主人から言質を取り、橘は内心で両手の拳を握る。彼が一輝に仕え始めてから十年近くになるが、これほど心が動いているところは見たことがない。父親である一雄を突然不条理な事件で失った時も、一輝は冷静だった。何か悩んでいたようではあったが、表には出さず、いつの間にか彼自身の中で解決してしまっていた――今では、何が主人を救ったのか知っているが。
年若い一輝の完璧なまでの指導者ぶりを、橘は誇らしく思う。し

かし、同時に、何か大事なものを犠牲にさせているような気がしてならないのだ。今回、一輝が唯一個人的な関心を寄せている少女に接触することができて、これはチャンスだと感じた。一輝の中の何かを動かすことができるのならば、と思ったのだ。

主人の短い同意の言葉が覆される前に、橘は動く。考える時間を与えてしまっては、『より適切な答え』を出されてしまうかもしれない。

「では、彼女に入っていただきますね」

返事は聞かずに踵を返し、扉の外で待っている弥生を呼びに行く。生の彼女を見せてしまえば、より動揺を誘えるに違いない。

残された一輝は、今すぐに逃げ出したい気持ちと、実際に彼女に会えることを待ち望んでいる気持ちとに挟まれていた。相反するものに挟まれ、頭が全く働かない。

身の振り方を決める間も無く、橘に促され、彼女が、入ってくる。あの時よりも少しは背が伸びているような気もするが、やはり小柄だった。一輝と同じくらいかもしれない。

黒目がちで大きな瞳に、低めの鼻と小さな唇。

可愛らしいけれども、平凡な顔立ち。それが――ニコッと笑う。

一輝には、一瞬、部屋の明るさが増したように感じられた。

写真の中で、ではなく、自分を見て、自分に対して向けられた笑みに、彼は言葉を失う。胸の中に何かが押し寄せてきて、いっぱいになると同時に締め付けられるような苦しさを感じた。

「こんにちは、はじめまして。大石弥生です」

その声は、何かつまずくことがある度に、一輝が心の中で思い出していたものと同じだった。落ち着いた響きの、柔らかな声――彼に「大丈夫」と言ってくれた、あの声。

一輝は、恐らく生まれて初めて、「言葉を失う」という心境を味わった。

むっつりと黙り込む一輝は、一見、不機嫌そのものだ。

普段の一輝を知るものが目にすれば、こんな表情もするのか、と

驚いたことだろう。橘の前以外では常に柔和な微笑を絶やさず、穏やかで利発な新藤商事の後継者として周囲には認識されているのだ。

そんな彼の前で数瞬口ごもった後、弥生が意を決したように口を開いた。

「あの、今回はうちの借金を援助してくれて、ありがとう。工場を売らなくちゃいけないところだったの。そうしたら、一家四人で路頭に迷うところだったわ。わたし、たいしたことはできないけれど、おやつを作ったりとか、そういうのは得意なの。ちょっと一休みしたいときとか、お手伝いさせてもらえるかなぁ？」

軽く首をかしげて不安そうに見つめてくる眼差しに、一輝は否やとは言えない。

わずかな逡巡はあった――だが、それはわずかだった。

「……わかりました。夕方の五時に三十分間だけ休憩をとっています。その時に給仕をお願いしましょう」

一輝の頷きと共に、再び笑顔がパッと花開く。

「ありがとう！　早速、明日からね。一輝君は何が好き？　甘いの？　辛いの？」

初めて自分の名前を呼ばれ、一輝は何ともいえない満足感に満たされる。それは祖父や橘に呼ばれたときには感じたことのないものだった。

「僕は……」

彼女の問いに答えようとして、好きなものも嫌いなものも思い当たらないことに気付く。

「――特に何も」

つまらない答えだと、思った。彼女に失望されるのではないかと、不安になる。

だが、弥生は目を丸くして感心したような声を上げた。

「へえ、偉いねぇ。好き嫌いがないんだぁ。うちの弟も一輝君と同じくらいの年なんだけど、『野菜はいや、肉だけ出せ』とか言うんだよ」

一輝はからかわれているのかと思ったが、どうも彼女は本気で褒めているらしい。
今まで祖父に褒められたことと言えば、九歳の時に経営学の論文がアクセプトされた時と十一歳の時に閉鎖するしかないと思われた営業所で大きな収益を上げさせた時くらいだ。
まさか、偏食がないことくらいでこれほど褒められるとは思ってもみなかった。
どう反応していいか判らず押し黙ったままの一輝にも、弥生は特に気にすることなく続ける。
「じゃあ、明日から色々なおやつを作ってくるからね」
そしてまた、笑顔を向けられる。
あれほど望んでいたものを惜しげもなく与えられて、一輝は戸惑うばかりだった。笑顔も、言葉も返せない。
「では、お送りしましょう」
そう言って、橘が彼女にさり気なく退室を促すのも、飽和状態の頭でぼんやりと受け止めた。
何も反応を示せずにいる一輝に「バイバイ」と手を振ると、弥生は橘の後について軽やかに部屋を出て行く。
扉が閉まると同時に、残された一輝は、糸が切れた操り人形のように、どさりと椅子に身体を投げ出した。
大切にしたかったからこそ、決して会う気はなかった筈なのに、いったい何処で狂ってしまったのか。
そして、計算外の結果となったというのに、何故、自分はこんなにも充足感を覚えているのか。
疑問符ばかりが頭に浮かぶ。
しかし、自問し、それらの答えが見つかったとしても何の解決にもならないことは、一輝自身にもよく判っていた。

＊

帰りのベンツの中で、弥生は隣に座る橘の様子が気になって仕方がなかった。
どう見ても喜んでいる。
けれど、何がそんなに嬉しいのか、弥生にはさっぱり見当がつかない。
うますぎる話が詐欺や危険な裏があるものではなく、本当に本社からの援助であったことに安堵した彼女は、橘に対して気安くなっていた。ついに我慢できずに、尋ねてしまう。
「橘さん……何だか嬉しそうですね」
「お判りになりますか？」
ふふ、と小さく笑いながら橘が答える。
「ええ、まあ」
「うちのぼっちゃ……あ、いえ、一輝様はですね、実に鉄壁のような方なんです。お母様は一輝様が生まれて間もなく亡くなられて……お父様はお忙しい方でしたからね。三歳までは乳母がお世話したことはお話しましたよね。それからは家庭教師たちに囲まれて過ごされて。大人びたと言いましょうか、子どもらしくないと言いましょうか……私も長年一輝様のお世話をさせていただいておりますが、お怒りになったり動揺されたり、というところを見た事がありませんでした」
それが今日は……と、橘はもう一度思い出したように笑みを漏らして続ける。
「まあ、大きな声を出されたり、取り乱して言葉を失われたりと、色々な一輝様を見させていただいて……この橘、これ以上嬉しいことは、ついぞありませんでした」
「でも、それって、一輝君にとっては、あんまり嬉しいことじゃないような……？」
「いいえぇ。確かに、大口を開けて笑うところなぞ見せていただければ更に嬉しいものではありますが、ね。取り敢えずは、いつもと違うところが見られただけでいいのです。弥生さん、これからも色

々な一輝様を見させてくださいね」
騒がしい弟たちにいつも手子摺らされている弥生からしたら、『怒ったところを見られて嬉しい』と言われてもピンと来ない。けれども、『普通』の子どもの状況ではないことは充分に理解できた――確かに、『好物は？』と訊かれて答えられない子どもというのは少数派だろう。
「わたしは、せいぜいおやつを差し入れするくらいですけど……頑張ってお世話させていただきます」
「よろしくお願いします」
そう言って、遥かに年下の子どもに深々と頭を下げる橘は、半端な実の親よりも余程『親』らしいと、弥生は思った。
もうじき家に着く。
新藤商事の本社から家まで、道が空いていれば車で三十分間ほどの距離だ。弥生には家族の世話をするという役目はあるが、一輝のもとに通うのも、やってやれないことはない。父や弟たちには不自由な思いもさせてしまうかもしれないが、弥生は一輝から『来るな』と言われるまでは、続けるつもりだった。
借金を払ってもらったという恩義は確かにあるが、それ以外に、一輝自身のことが気になるから、という気持ちもあった。やんちゃな弟二人を持つ身としては、怒ったことが喜ばれるような男の子の境遇は納得がいかない。ましてや、弟の一人と同じ年頃なんて。
もっと色々な表情を見せて欲しいと思う橘の気持ちには、弥生も頷けた。
達郎には本当のことを話しておくとして、睦月たちにはバイトを始めることにした、とでも伝えておけばいいだろう。
「では、明日からは学校の方へ迎えに参ります」
大石家に到着し、弥生がベンツを降りる時に橘がそう言った。
「わかりました。校門の前で待ってます」
車が最初の角を曲がるまで見送ってから腕時計を見ると、夕方の六時になる少し前だった。

これなら、弥生の不在を誰も気にしていないだろう。そう思って、気軽に家の中に入っていく。
「ただいま」
いつもどおりに玄関の引き戸を開けると、バタバタと騒がしい足音が響いてくる。
「姉ちゃん！」
「どうしたの、睦月？」
「『どうしたの？』じゃねぇよ！　何だよ、これ」
そう言うと、睦月は弥生が電話の脇に置いていったメモを突き出した。
「あ、ごめんごめん。驚かせちゃったね。もういいんだ、それ。何でもなかったの」
「訳わかんねぇよ」
「ごめんね」
もう一度謝りながら、弥生は少し背伸びをして睦月の頭を撫でてやる。この弟は小学校六年生ですでに百六十センチを超えていた。父親は百八十センチ以上あり、体格もがっしりしている――睦月の身体は、今はまだひょろりとしているが、おそらく、父親と同じようなものになるのだろう。容姿も、ふんわりと可愛らしかった母親ではなく、ごつい父親に似ている。
時々、姉弟ではなく兄妹に間違えられることもあるのだが、弥生にとっては可愛い弟で、心配させるのは忍びなかった。とにかく『ごめん』で押し切る。
笑顔で『ごめん』を連発する弥生に、睦月が溜息をついた。母親代わりを自任しているこの姉は、何か問題が起きても弟二人にはそれを見せず、平気な顔で『大丈夫』と言うのだ。
そろそろ自分を頼ってくれてもいいのに、と睦月は思うのだが、悔しいことに、彼女はなかなかそうしてくれない。
「さあ、すぐにご飯の用意をするからね。今日は麻婆豆腐だよ。睦月のは辛口だよね」

何事もなかったかのように、弥生は睦月の横をすり抜けていく。
――もっと大きくなったら、頼りにしてくれるのだろうか。
だが、弥生にとったら、きっと、いつまでたっても自分は守るべき弟なのだろう。
睦月から見ても、父親の達郎は職人としては尊敬しているのだが、それ以外のことについては正直言って頼りにできない。
小さなその背中を見送って、彼はもう一度溜息をついた。

三

一輝は、目の前に置かれた『おやつ』をじっと見つめた。
かぼちゃのプリンである。
「何故、これを……？」
弥生が毎日作ってくる『おやつ』は、その選択が謎だ。
手作りできる菓子にこれほどの種類があったのか、と感心するほどに様々なものを持ってくるのだが、一回だけしか出てこないものもあれば、何度も繰り返し出てくるものもある――その一つがこのかぼちゃプリンだ。
そして、何故判るのかが解らないのだが、繰り返し出てくるものは全て、一輝が特に美味しいと思ったものばかりなのである。弥生が出してくれるものに対しては、いつも同じ調子で「美味しい」と返しているつもりだ。その中で一輝が好んでいるものかどうかをどうやって区別しているのだろうか。
一輝の疑問に対して、弥生はケロリと答える。
「だって、一輝君、それ好きでしょう？」
だから、何故、そう思ったかを知りたいというのに。
渋い顔をする一輝に、弥生がニッコリと笑う。
「あはは。面白い顔してる。あのね、一輝君がどれを好きかなんて、顔を見てたら判るんだよ」
「顔？」
「うん」
今まで、仕事で他人に表情を読み取らせたことなどない。そんなことを許していたら、勝てる商談も勝てなくなる。
――なのに、何故、弥生にはそれが可能なのだろう？
「もう、ほら、難しいことは考えないでよ。今はおやつの時間なんだから。甘いものを食べると、頭がリラックスするんだよ？」
促され、一輝はスプーンを口に運ぶ。やはり、美味しい。

表情を動かさないように意識して、黙々と食べる。
その様子を、弥生はニコニコしながら見守っていた。
気まずいのに、どこかくすぐったい。
弥生がこの執務室に通うようになって、一ヶ月が過ぎた。彼女は、ただ菓子と茶を用意し、むっつりと黙ったままの一輝に対してたあいない話をし、三十分で帰っていく。
――良くも悪くもそれだけだ。
菓子が不味かったり、一輝に対して踏み込んでこようとしたりするようであれば、それを理由に『来るな』と言えた筈だった。だが、菓子は素朴ながらも美味く、弥生のお喋りは正直言って、心地良い。
結果として、切る理由が見つけられずに一ヶ月が経ってしまった状態だ。
いつかは、『もう来なくていい』と言わなければならない。けれども、それは、今でなくてもいい筈だ――もう少し、先でも。
黙々とプリンを口に運ぶ一輝を、弥生が首を傾げて見つめる。そして、ふと思いついたように、彼女はぱっと顔を輝かせた。
「そうだ、一輝君って、この間誕生日だったんでしょう？」
「え、ああ、はい」
『この間』と言っていいものかどうかは判らないが、十二歳になって、一月程度が過ぎたくらいだ。唐突な話題転換に、一輝は身構え損ねる。いつもであれば、会話の主導権を握るのは一輝であり、常に相手の言葉を予測して返事をしていく。想定外の話題になることは殆どない。だが、弥生の話はしばしば予測不能である。
「じゃあさ、今度お祝いしよう。『はじめまして』のお祝いも兼ねて。何か欲しいものあるかな？」
なったばかりとは言え、すでに誕生日は一ヶ月も前のことだ。こんなに遅れて誕生日など、聞いたことがない。無難なものを適当に答えれば良かったのだが、咄嗟のことで、何も思い浮かばなかった。
「僕は……大抵の物は手に入れていますから……」
――だから、欲しい物など何もない。

そう言ったつもりだった。
だが、弥生は、一輝が今まで目にしたことのないような色を浮かべた眼差しを、彼に向けた。
それは何を含んだものなのだろう。
近いものを知っているような気がしたが、結局一輝には判らない。
その色は一瞬で消え、弥生はいつもの笑みを浮かべる。
「でもさ、一輝君。君は、ほとんどの十二歳の男の子が持っているようなものは、何ももらえてない気がするな」
「え？」
どういうことなのだろうか。
莫大な富も、優れた教育も、多くの者からの敬意も、手にしている。これ以上に何を望めと言うのか。
本気で考え込む一輝の頭を、背伸びした弥生が撫でる。
「いいよ。ゆっくり考えて」
彼女に触れられるのは、嬉しい。だが、この撫でられ方は不本意だった。
こんなふうに、矛盾した考えが同時に彼を襲うようになったのも、弥生と出会ってからだ。以前はあんなに全てが明瞭だったのに。
心持ち渋い顔をした一輝をどう受け取ったのか、弥生は小さく笑って席を立つ。
「じゃあ、わたし帰るからね。また明日」
丁度帰宅の時間になって、橘が車の用意ができていることを伝えにくる。いつもと同じように、弥生はバイバイ、と手を振って帰っていく。
彼女がいなくなると、唐突にシンとした静寂が執務室に落ちる。それが当たり前の状態の筈なのに、妙に物足りない感じがするのは何故なのだろう。まるで、彼女と一緒に、一輝の中の何かも持っていかれてしまったようだ。
一輝は頭を一つ振って、書類に目を向ける。仕事のことであれば理解できないことなどなく、安心していられた。殆どの場合、一輝

の予測どおりの結果になり、多少の狂いも容易に修正が可能だ。
やがて、ほぼいつもどおりの時間で橘が戻ってくる。
「ただいま戻りました」
「ああ。……？　何だか楽しそうだな、橘」
「ええ。弥生様がですね、今度の日曜日に公園へ行かないか、とおっしゃってくださいまして。紅葉が綺麗らしいのですよ」
「――お前と、か？」
「いいえ、一輝様と」
「……」
ねめつける一輝を全く意に介さず、橘が嬉々として続ける。
「弥生様が、一輝様は休むことがないのかと訊いてこられたので、月に一度、最終の日曜日にお休みされ、ご自宅で読書などをされますよとお伝えしたのです。そうしたら、少しは外に出ないとダメだ、と仰られまして」
「橘！」
「おや、ご都合が？　ご予定は何もなかったので、是非、と答えてしまったのですが……。たいそう張り切っておられたので、お断りの連絡を入れたら、残念がられるでしょうねぇ。私の口からは、何とも……」
機先を制してそう言われ、一輝は『今すぐ断れ』の言葉を飲み込まざるを得なくなる。
忠実だった筈のこの男は、いったい、自分をどうしたいのか。
一輝はどんどん泥沼に沈み込んでいく気分だった。
押し黙る一輝に、橘が苦笑する。
「坊ちゃま……」
「その呼び方は止めろ」
「一輝様。たまには欲しいものを欲しいと口に出さないと、生きていかれませんよ？」
どういう意味なのか。
およそ考えうる限り、全ての物を手にしている自分に、この上欲

しい物などある筈がない。
怪訝な顔をする一輝に、橘はどこか悲しそうな笑みを浮かべた。
「ご自分が何を欲しがっているのか、いずれ、ちゃんと解る時が来ますよ」
それだけ言うと、橘は今晩の予定を読み上げ始めた。

＊

日曜日。
空は見事な秋の快晴だった――どこまでも青く、高く、澄み渡っている。
十月下旬の風は少し冷たいが、陽射しがあるため、気温としてはちょうど良いくらいだ。
大石家から歩いて十分のところにある公園は、そこそこ広く、なかなか綺麗な紅葉が味わえる穴場になっている。
その公園の入り口に、弥生、一輝、橘、そして大石家の睦月、葉月は立っていた。
「中央の広場が気持ちいいんだよ。行こっか」
そう言うと、弥生は一輝と葉月の手を取り、歩き出す。繋がれている一輝と弥生の手に、弁当やらバスケットやらを抱えた睦月の目が注がれていることに気付いたのは橘だけである。
小さな池に渡された橋を越え、更に進んでいくと、八分ほど赤く色づいている紅葉に囲まれた芝生の広場に到着した。ちょうど昼時であることもあって、幾つかの家族がすでに弁当を広げて楽しんでいる。
「睦月、一輝君と一緒にシート広げてよ。葉月はちょっと離れて離れて」
「ああ、わかった。――ほら、この角持って、両手を広げろよ」
一輝は言われるがままに二つの角を左右の手に持ち、腕を一杯に伸ばした。バサリと広がったシートを地面に下ろし、皺をきれいに

伸ばす。
「細かい奴だな」
ぼそりと呟いた睦月の声を拾った橘が、すかさずフォローを入れる。
「一輝様は何事も丁寧になされる方なんです」
「あっそ」
どうも弥生の弟睦月は、一輝に対して良い感情を抱いていないようだと橘は感じ取る。借金の形に彼女が一輝の世話をしに通っていることを知っているのか、それとも単に姉を取られて拗ねているのか――弥生が借金の経緯を弟に伝える可能性は低いため、恐らく後者なのだろう。普通の、わがままが許される十二歳であれば、こんなものなのかもしれないと、橘は思う。一輝の三歳の誕生日で初めて顔を合わせてから今まで、彼が自分のために要求したことは、弥生についての定期的な報告だけだ。
疎遠だったとはいえ実の父親を失ったあの日、橘も含めて、誰もが一輝を新藤商事の後継者として扱った――まだ十歳だった彼を。葬儀の後、しばらく独りにして欲しいと言った一輝を遠巻きに見ていた橘には、傘を差しかけてきた弥生との間でどんな会話があったのかは知らない。だが、彼女との出会いで、一輝の表情が和らいだことは紛れもない事実だった。
彼女の傘にあった名前から身元を割り出し、一ヶ月に一回の様子を報告するようになったが、一輝は、それ以上は求めない。こんなふうに、何も望まない――望めないようにしてしまったのは、周囲の大人の所為ではないだろうか。橘は、一輝に、もっと貪欲になって欲しかった。そして、そのきっかけに、弥生がなってくれれば良いと願う。このまま、ただ新藤商事を栄えさせていくためだけに生きていくようには、なって欲しくなかった。
「橘さん、座りませんか？」
物思いにふけっていた彼を、弥生の軽やかな声が引き戻す。
見ると、皆シートの上に座っていた。弥生の両隣には睦月と葉月、

一輝は睦月の隣に座っている。真ん中には様々な料理が広げられていた。突っ立っているのは橘だけである。
「ああ、はい」
橘が一輝の隣に腰を下ろすのを待って、弥生が両手を合わせた。
「じゃあ、皆さん、いただきましょう」
「いただきます」「いただきます」
睦月と葉月は大きな声で唱和する。だが、普段独りで食事をする一輝は出遅れた。
四歳の葉月が、きょとんと一輝を見上げる。彼は弥生によく似た、可愛らしい顔をしている。
「いただきますしないの？」
「……いただきます」
あまり大きな声ではなかったが、葉月は満足したようにニッコリする。一輝はその屈託のない笑顔に、ぎこちなく笑みを返した。
一輝の声を待っていたかのように、睦月が、そして葉月が料理に手を伸ばし始める。その勢いは凄まじく、まるでイナゴのようだ。
「ほら、一輝君も、早くしないと無くなっちゃうよ。うちの子達は凄いんだから」
こんなふうに大皿から料理を自分で取ったことのない一輝は、睦月たちの無秩序な食べ方を前に、呆気に取られるばかりである。
渡された皿を手に料理を見つめている一輝に、橘がそっと声をかける。
「一輝様、お取りしましょうか？」
「……いや、いい」
橘が手を伸ばしてきたときの睦月のどことなくバカにしたような目付きが癪に障り、一輝は自ら手を伸ばす。サンドウィッチとサラダ、唐揚げを取った。
「美味しい」
唐揚げを一口食べて、思わず呟く。冷めているのに柔らかく、脂もしつこくない。

それを聞きつけ、睦月が自慢そうに返す。
「当たり前。お前、いつも姉ちゃんの菓子を食ってるだろう」
「そう、ですね」
だが、普段の菓子も美味しいが、この料理がまた更に美味しく感じられたのだ。
「どんどん食べてね。いっぱいあるんだから」
葉月の世話を焼きながら、弥生がニコニコと嬉しそうに促す。その笑顔を眩しそうに見つめて、一輝は頷いた。
「はい」
そんな一輝の様子を、睦月が食べ物を口いっぱいに頬張りながら横目で見やる。それは何か言いたそうな眼差しだったが、今は食事が優先とばかりに次から次へと何かしらを口に運んでいく。
一輝は、一つ一つゆっくりと味わいながら食べていく。冷たくなった食事など、今まで口にしたことが無かったが、これまでに食べたどんなコース料理よりも美味しく感じられる。
「あ、これ、デザートね」
ある程度食事が進んだ頃合で、弥生がもう一つ残っていたバスケットを開ける。
――あ……。
中身を目にし、一輝は何故か無性に嬉しくなる――そこには何種類かの菓子が詰められていたが、どれも、一輝が気に入っているものばかりだった。その菓子の種類の分だけ、弥生に表情を読まれていたことになるのだが、悔しさは全くない。むしろ、喜びだけがあった。
やがて料理の器も底が見え始め、皆の手も止まり始める。
一休みすると、弥生と葉月は落ちている紅葉の葉を拾いに行った。今日の夕食の秋刀魚の飾りにするつもりらしい。
残された男三人は、少し離れたところで歓声上げている葉月と弥生を、何するでもなく眺めていた。特に一輝は、本人は気づいていないようだが、弥生の一挙手一投足を逃すことなく見守っている。

視線を姉と弟に向けたまま、睦月が一輝に声をかける。
「なあ、お前、大きな会社の跡取りなんだろ？」
「はい」
「それってさぁ、やりたくてやんの？」
「……え？」
「だからさ、お前って俺と同じ学年なんだろ？　もっと違うことやりたくないのか？」
――違うこと。
そう問われて、一輝は言葉に詰まる。彼にとって、『違う道』など存在していないのだから。
「俺はさ、サッカー選手になるんだよ。まあ、引退したら、親父の工場を継いでもいいけどな。機械いじるの結構好きだし。お前は、何で社長やりたいの？　金が儲かるから？　偉いから？」
それにも、答えられない。
するべくしてすることに、理由などない。
返事が無いことに、怪訝な顔をしながら睦月が一輝のほうへ顔を向ける。
「何だよ。自分でわかんねぇの？」
呆れたような声で言われ、何故か胸がずきりと痛んだ。
そんな一輝の心中を知ってか知らずか、睦月はまた弥生たちのほうへ視線を戻し、笑いを含んだ声で言う。
「まあ、いいか。クジラになりたいとか言ってる葉月よりかはいいよな」
特に他意はなく言い、睦月は手を振ってくる弥生と葉月に手を振り返す。
「ガキって変なこと言うだろ。俺もあのくらいの時はウルトラマンになりたいとか言ってたらしいぜ。姉ちゃんがそういうの覚えてるから、立場弱いったらないよな」
言葉は嫌がりながら、睦月の表情は嬉しそうだ。
たあいのない子ども同士の話だったが、一輝は返事ができなかっ

た自分に愕然としていた。新藤商事を継ぐということは自分の生活の殆ど全てを占めており、その理由など自明の理であると思っていた――それが、ただの雑談で一瞬にして覆されたのだ。最高学府卒業の証まで受け取っている筈の自分が、とても愚かな存在に思われる。

言葉を失った一輝を、橘は静かに見守るだけだ。

やがて葉月の手を引いた弥生が戻ってきたが、一輝の様子を見た途端、キッと睦月を睨んだ。

「睦月！」

「な、何だよ？」

「一輝君に何したの！？」

「何もしてねぇよ」

「ウソ。だって、一輝君が落ち込んでるじゃない」

「ええ？　さっきと変わらねぇじゃんか」

「全然違うよ。いいから、わたしがいない間に何してたか教えなさい」

詰め寄られて、睦月は弥生と睦月が紅葉を拾いに行っていた間の会話をたどたどしくそらんじる。

全てを聞き終えると、弥生は深々と溜息をついた。

「まったく、もう……睦月はホントに単純なんだから……。好きや嫌いだけじゃ言えないこともいっぱいあるんだよ。一輝君も、睦月みたいに単細胞になる必要なんてないんだから、落ち込まなくたっていいのよ？　なんでそれをするかなんて、これから探していくものでしょう？」

手を伸ばして、一輝の黒髪をワシャワシャと掻き回す。

「まだ十二歳なのに、今からそんなに悟っちゃってたら、大人になったら仙人だよ。大丈夫、大丈夫。ちゃんとそのうち見つかるから」

あはは、と笑う声に、一輝の中の焦りは薄らいでいく。けれど、自分が何を目的にあの大企業を引き継いでいくのか、それはやはり判らないままだ。ただ漠然と、何万もの人々の生活を負うことにな

ってもいいものなのだろうか。
考え込む一輝に、弥生はもう触れずにおく。睦月の蒔いた不安の種は回収してあげなくてはならないだろうけれど、残る悩みは一輝自身のものだ。
――考えても考えても出口が見つからなかったら、言ってくれるといいんだけどな。
弥生は心の中でそう声を掛ける。だが、一輝がそうしないだろうという事も、何となく判っていた。
大きなものを背負わねばならない彼を安らがせてくれるようなものがいればいいのに。
それは弟の睦月や葉月を想うようなものではあるが、考え込む一輝を見守りながら、弥生は強くそう願った。

四

この日、橘は二十畳ほどもある和室にいた。
大石家とのお食事会から、一週間が経った日曜日のことである。
彼の目の前では、六十絡みの初老の男が脇息にもたれて目を閉じていた。男は新藤一智――一輝の祖父である。
橘は、ここ数日の一輝の様子を報告していた。
「――ということでして、その公園での一件以来、一輝様は少々考え込みがちです。お仕事は普段と変わりなくこなしていただいているのですが……」
「あいつは……十二になったんだったけかな。知識ばかり詰め込んで、中身を育てる暇がなかったってことか」
苦笑した一智はしばし瞑目し、考え込む。彼は、以前から、一輝の中のある種の『未熟さ』には気付いていた。確かに、知能や知識は大人を遥かに凌駕するが、あの孫の中には、何か『強さ』が足りなかった。新藤商事は、ただ跡継ぎだから、というだけで背負えるほどちゃちな荷物ではない。どんな理由であれ、何らかの強いモチベーションが必要だ。
「丁度いい。あいつに休暇をやるから、ちっと社会勉強させて来い」
「社会勉強、ですか？」
「ああ、二、三ヶ月ばかり、その娘んところにでも預けてこい。何なら、そこの小学校に編入させてもいいぞ。あいつは、『学校』ってもんに通ったことがないだろう」
一輝への英才教育は一雄の方針だったのだが、そもそも、一智はそれに反対だったのだ。少し遅れはしたが、これは一輝にとってもいい機会の筈だ。
「その家には貸しがあるんだろ？　否とは言うまい」
「はい……」
大石家は歓迎してくれるだろうが、橘には、小学校に通う一輝の

姿がどうにも想像できない。そして、それは一智も同じだったらしく、ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべる。
「あいつはどんな顔してジャリに混じるんだろうな。まめに報告しろよ？　それと、一度その娘に会ってみたいものだな。もしかしたら、将来、孫の嫁になるかもしれないんだろ？」
――このヒト、絶対に楽しんでいるよな……。
その呟きは、心の中だけのものとしておいた。この一智から、どうやって真面目一辺倒で非常に固かった先代一雄ができ上がったのだろうか。豪放磊落な一智と顔をあわせる度に、橘は不思議でたまらなくなる。
「では、早速弥生さんに相談してみます」
そう締めくくり、橘は邸を後にした。

＊

「もう一度、言ってみろ」
本日の執務が終わり、さあ帰ろうか、ということになったところである。
本社最上階の執務室の中で、一輝は我が耳を疑った。
あるいは、橘が放った言葉を、脳が受け入れることを拒否したのかもしれない。
「ですから、おじい様のご指示で、数ヶ月の休暇を取り、大石家にしばらく滞在するように、と……。その校区の小学校への編入も手配済みです」
間違いない。
一度目に聞いた台詞と同じだ。
「……何故、そんなことになった？」
以前から、あの祖父は変な遊び心がある人だとは思っていた。だが、今回のこれは、いったいどういうことなのか。
「一雄様が亡くなってから一輝様は全くお休みを取られておりませ

んし、お友達ができたのなら、いい機会だろう、と……」
橘は、一智の言葉を、かなり意訳して一輝に伝える。
「いったい、何を考えていらっしゃるんだ、あの方は……」
頭を抱える一輝が少々気の毒にはなったが、橘は淡々と先を続ける。
「弥生様の方からは、快く了承を頂いております。本日からでも構わない、と仰っていただけて」
橘は、話を通した時の彼女の様子を思い出した。ニコニコと、二つ返事で引き受けてくれたのである。
恐らく、裏も表も下心もなく、弥生は本心から快諾してくれたのだろう。
これほどの富を目の前にしながら、あの少女は全く態度を変えない。大抵の女性であれば、次第に目の色が変わってくるものだ。しかし、弥生は、初めてここに訪れた時と変わらず、弟の睦月たちに接するような態度のまま変わらない――橘としては、『弟たちと同じ』という部分に関しては、是非とも変わって欲しいものだと願っているのだが。
「一輝様の身の回りの物も用意できておりますので、今日、このまま大石様のお宅に伺う、ということでよろしいですね」
一輝の理性が回復する前に、橘は話を進めていく。考える余裕を与えずに、一気に畳み掛けてしまう作戦だ。きっと、大石家に到着し、弥生の笑顔に迎えられてしまえば、そこから『帰る』などとは言い出せない筈である。
「では、車を用意させますので」
一輝が頷いたかどうかも確認せず、車の手配をすると同時に主人を急き立て、執務室を後にする。
――ハッと一輝が我に返った時、ベンツはすでに大石製作所の前に停まっていた。
何故、弥生が絡んだことに関しては思考がうまく働かないのか。
いつもならば、コンピューターのように正確な答えを弾き出せる

のに。
「橘、やっぱり――」
『引き返せ』と一輝は命令を出しかけたが、窓ガラスが叩かれる音に、思わずそちらを向いてしまった。
弥生の満面の笑みが視界に飛び込んでくる。
「いらっしゃい！　待ってたよ」
嬉しそうにそう言われ、『やっぱりやめる』と言えるものがいるであろうか――少なくとも、一輝には言えなかった。橘の読みどおりである。
ベンツの後部ドアが開かれると、弥生の小さく柔らかな手が一輝のそれを包み込み、引っ張り出される。彼女の力などたかが知れているが、されるがままに車から降りた。
「一輝君のお部屋は睦月と一緒でいいかな？　畳だからお布団なんだけど、普段はベッドなんだよね……。眠れるかなぁ。今日のご飯はね、鯵の開きだよ。さっき準備できたところ。干物とか、そういうの食べたことある？　お家だと洋食ばっかりなんだってね。わたしが作れるのはオムライスとかだけど、それって洋食に入るかな」
あれよあれよという間に家の中へ連れ込まれ、気付いた時には、一輝は夕食の準備が整った居間に座っていた。
「いらっしゃい」「よお」「こんばんは」
達郎、睦月、葉月がそれぞれに声を掛けてくる。
「……今晩は」
一輝が小さく頭を下げると、弥生が待っていましたとばかりに手を一つ叩いた。
食卓の上に並んでいるのは、ご飯、味噌汁、鯵の開きに野菜炒め――今まで、一輝が見たことのないメニューばかりである。
「はい、じゃあ、いただきますしよう」
「いただきます！」
弥生の音頭で、中年の達郎から四歳の葉月までの声がきれいにハモる。

『いただきます』という言葉の存在は知っていても、これまで生きてきて使ったのは先週が初めてだった一輝は、そこに乗り遅れた。ちゃっかり一緒に食卓についた橘に促され、口の中でモゴモゴと『いただきます』のようなものを呟く。

一輝が言い終えると同時に、睦月がご飯茶碗――というよりは小振りな丼――をガシッと掴み、凄まじい勢いで掻き込み始めた。見る見るうちにその中身は消えていく。「お代わり！」と弥生に向けて空になった丼を突き出すまで、三分とかかっていなかったに違いない。

「ちょっと、睦月。もっと良く噛んで食べなさいって、言ってるでしょ？　ほら、一輝君も呆気に取られてないで、食べて食べて。いっぱい食べないと大きくならないんだから」

睦月のお代わりをよそい、葉月の世話をし、一輝に食べるように促す。その合間に自分も食事をする弥生は、まさに母親そのものだった。

「一輝様、手が止まっています。冷めてしまいますよ」

「あ、ああ」

橘に声を掛けられ、一輝は弥生から視線を引き剥がす。

――一度彼女に目を向けてしまうと、なかなか離せなくなるのは、何故なのだろう。

その答えは、全く思い浮かばない。

常に疑問には解答を求めてきたが、何故かその問いはそれ以上考えたくなかった。

一輝は食事に意識を向け、一口一口丁寧に運ぶ。これまで口にしたことのないメニューは温かく、シンプルだがとても美味しい。背骨のついた魚も初めて相手にするものだが、苦労しながら骨を取り除き、ようやく口にすることができた身は、どんな高級魚よりも食を進ませた。

黙々と食事に集中する一輝の横で、睦月が胸を張る。

「俺、来週の日曜日の試合、スタメンになったから」

「へえ、すごい。頑張ったね」
睦月が所属する少年サッカーのチームは強豪で、メンバーも選りすぐりだ。その中でのスターティング・メンバーというと、相当なものである。
「お弁当何がいい？　唐揚げ？」
「たっぷりな。あと、ハチミツレモン！」
弥生の視線が睦月に向きっ放しになると、今度は葉月が彼女の袖を引く。
「ねえ、ぼく、今日、幼稚園でみかちゃんに『だいすき』って言われた！　そしたら、あゆみちゃんとみかちゃんがけんかしちゃって、ぼくがイイコイイコしたんだよ」
父親似の睦月に対して、葉月は弥生と同様、母親似だ。女の子のように可愛らしい顔をしており、十年後にはさぞかし甘いマスクになっているだろうと期待させる。今でも、幼稚園では女の子から引っ張り凧で、しばしば葉月を巡って女の戦いが繰り広げられるらしい。
「そっかぁ。葉月はモテモテだね。でも、ホントに大好きな子は一人だけなんだからね？」
「ぼく、おねえちゃんがいちばんだいすきだよ？」
「うーん、まあ、いいか。わたしも葉月が大好き」
そう言いながら、弥生が葉月の髪をクシャクシャと撫でる。
――これが日常の会話なのだろうか。
一輝は仕事での会食以外に、食事中に会話というものをしたことも聞いたこともない。これが一般的なものなのかそうでないのか、判断するための基準を持っていなかったが、おそらく、一般的ではないのではないのだろうかと思う。
初日から戸惑うばかりの一輝の横で、睦月が箸を置いた。結局彼は三杯もお代わりをしたのだが、あれほど喋っていたのに、何故、こんなに早く食べられるのか――一輝は、まだ半分は残っているというのに。

「ごちそうさま」
「お粗末さまでした」
食後の挨拶を交わすと睦月は立ち上がり、食器を持って出て行く。どこに行くのだろうかと見送っていると、弥生から声がかかった。
「一輝君も、食べ終わったら流しに食器を持って行ってね」
「あ、はい」
言われて、ここでは勝手に食器が片付いていくことはないのだと気付く。
直に、食器を置いて戻ってきた睦月が元の場所へ腰を下ろし、再び会話に参入する。
今日起きたこと、明日あること――話題は二転三転する。
睦月と葉月は競って弥生の気を引こうとし、達郎はそれをニコニコしながら眺めている。
少し距離感を覚えた一輝に、眼が合った弥生がニコリと微笑む。
一瞬、目の奥が熱くなった。
何なのだろう、この苦しいようでいて、離れがたい感覚は。
これが、家族というものなのだろうか。
一輝は、それを知らない。
だが、この空間を、壊したくない――護っていきたいと、彼はその時強く思った。

＊

新しい週が始まる朝、弥生は睦月を前に、懇々と言い聞かせていた。
「いい、睦月？　一輝君は学校に行くのは初めてなんだからね？　よぉく、気を付けてあげるのよ？」
「わかってるって。もう何度目だよ、それ。だいたい……」
ぶちぶちと文句を言う睦月をよそに、今度はクルリと一輝に向き直り、こちらもジッと見つめて言い含める。

「一輝君、わからない事があったら睦月に訊いてね？　無理したり、我慢したりしたらダメなのよ？」
まるで母親のようだ、と一輝は思い、それに対して不満を覚えている自分に気付いた。
しかし、何故不満なのか。
預かっている子どものことを心配に思うのは、当然のことだろう。
一輝はそう納得させようとしたが、何かしこりが残る。
弥生は、そんな一輝の心中には気付いていないようだった。まだ心配そうに軽く首を傾げて二人を交互に見やる。
「じゃあ、遅刻するからもう行きなさい。帰りも寄り道ないでね」
「遅刻したら姉ちゃんのせいだろ」
ボヤく睦月の頭を、ペチンと叩き、弥生が一輝に微笑みかけた。
「行ってらっしゃい、一輝君。楽しんできてね」
「はい。……行ってきます」
その言葉を口にするのは、少しくすぐったい。
「行ってくらぁ」
そう言ってさっさと出て行く睦月の後を、一輝は追いかける。
「行ってらっしゃい！」
柔らかな声が、背中に被さった。

＊

一輝がクラスに入ると同時に、ザワザワと子どもの間に波が立つ
――それは、特に女子の間で強かった。
「うわぁ、カッコイイ」
「イケメンじゃん」
「睦月君とどういう関係なの！？」
これは女子の間での囁き。
「何だよ、すかした奴だな」
「いいとこの坊ちゃんかぁ？」

「朝、睦月と一緒に来た奴だろ？」
これは男子の間でのもの。
睦月と関係がある、という点ではどちらも好評価だが、一輝個人に対しては、男女で大きく差が出るようだ。
――睦月は人望があるんだな。
そう思い、一輝は何となく納得する。あの開けっ広げなところは、気持ちがいいかもしれない。
「じゃあ、ご挨拶してみて？」
担任に促され、一輝は一礼する。
「新藤一輝と申します。数か月という短い間ですが、皆さんと一緒に勉強させていただきます。至らないところもあると思いますが、よろしくお願いします」
教室内が水を打ったように鎮まり返る。担任は、数秒間口ごもった後、ようやく場を取り繕った。
「え、あ、丁寧なご挨拶ね。じゃあ、あそこの一番左の列の、睦月君の前に座ってね」
一輝は自分の挨拶の何が悪かったのかわからず、困惑する。これまでも、何度も同じような言葉を口にしてきたが、いつもはこんな反応は示されない。
首を傾げながら席に着くと、後ろの睦月に背中を突かれた。椅子を後ろに引いて近づけると、睦月が囁いてくる。
「お前、あの挨拶何なんだよ？　どこのおっさんかって感じだったぜ」
そう言われて、ようやく気付く。
「そうか、ＴＰＯか……」
だが、そう言われても、小学生の集団に合わせた応対の仕方など、学んでいない。これは、しばらくここで覚えていくしかないのだろう。
一輝は、担任が板書していく内容を眺めながら、少なくとも授業よりは面白そうだと、考えることにした。

＊

放課後になり、帰宅途中の車の中で、一輝は深々と溜息をついた。
「どうなさいました、一輝様？」
「疲れた。どんな取引相手よりも、疲れる。何であんなに女子が群がってくるんだ？」
こめかみを揉みながらボヤく一輝に、それは仕方のないことだと、橘は納得する。
父親譲りの一輝の容姿は整っており、身に付いた優雅な仕草は、同級生の子どもっぽい男子に飽き飽きしている小学生女児からしたら、王子様のように見えるだろう。
「まあ、変な時期に入ってきた転校生が珍しいんでしょう。直に皆さん落ち着きますよ」
「男子は寄り付きもしなかった。その違いは何なんだ？」
それは嫉妬です、とも言えず、橘は苦笑いをしてごまかす。思春期の子どもの単純さと複雑さを失念していた。
――まあ、一輝様なら、何とかしのげるでしょう。
一日目にしてすでに一輝はうんざりしているようだが、それほど心配はせず、橘は流れに任せることにする。
「さあ、着きましたよ。今日のご飯は何でしょうね」
「お前、また食べていくつもりか？」
さすがに大石家にそれほど多くの部屋が余っているわけではないので、橘は隣に建っているアパートを短期で借りている。彼は一輝の護衛も兼ねているので、常に傍から離れることはない。一輝が登校している間も、車で近くに待機しているのだ。
「だって、弥生様の作るお食事は、それはもう……」
「わかった、好きにしろ」
そんな埒もない会話を交わしながら、二人は居宅へと入っていく。
「……ただいま」

その言葉もまだ使い慣れておらず、自然と声が尻すぼみになってしまう。
返事はなく、まだ誰も帰っていないのか、と一輝は幾つかの部屋を覗いて回った――と、縁側にチラリと何かが見える。
「？」
近寄ってみると、それは弥生だった。
縁側の陽だまりで、丸くなって眠り込んでいる。
「一輝さ……？」
橘を振り返って、立てた人差し指を口に当てる。
「……お休みですねぇ」
すやすやと、それは気持ち良さそうに眠っている。
「何かかける物を探してきますね」
「ああ、頼む」
橘を見送って、一輝は弥生の傍に膝を突いた。
無防備な寝顔は、元々年齢よりも低く見える彼女を、更に幼く見せていた。
ふっくらとした頬に影を落とす、長い睫毛。微かに開かれた柔らかそうな桃色の唇に、目が吸い寄せられる。
――触れてみたい。
不意に、そんな衝動に駆られた。知らず知らずのうちに、指先が勝手に近づいていく。
微かな吐息を感じられるほどになった時――
「ありましたよ」
突然の橘の声に、一輝はまさに跳び上がりそうになる。心臓は早鐘のように打ち、胸郭を突き破りそうだ。
「あれ、坊ちゃま？　顔が真っ赤ですよ？　熱でもあるんでしょうか」
「何でもない！　大丈夫だ！」
そう言って伸ばしてきた橘の手を振り払い、後も見ずに睦月と共同で使っている自室へと向かう。

自分は、いったい、何をしようとしたのか。
眠っている女性に勝手に触れようなんて、自分が信じられなかった。
「僕は、どうなっているんだ……？」
自分が何をしたいのかが解らない。解らない――本当に？
完璧に制御できていた自分が崩されていく。
一輝にとって、それは、たとえようもないほど恐ろしく感じられた。

＊

その夜、一輝は熱を出した。
夕食後、急にばったりと倒れたのだ。
看病し易いように、睦月と一緒の部屋ではなく、卓袱台を片付けた居間に寝かせられている。
心配そうに濡れタオルを取り替える弥生の隣に、橘が腰を下ろした。
「坊ちゃまは、小さい頃から、時々こうやって高い熱をお出しになるのです」
「何か病気なの？」
「ああ、いえ、知恵熱のようなものなのでしょう。解熱剤も殆ど効かず、一、二日高熱を出して、自然と解熱するんです」
「ふうん……初めての学校で疲れたのかなぁ」
「……そうかもしれませんね。弥生様、後は私が看ますので……」
看病を引き継ごうとした橘に、弥生はきっぱりと首を振る。
「いいえ。一輝君はうちで預かったんですから、わたしが世話をします。橘さんはお休みになってください」
一歩も引こうとしない弥生をしばらく見つめていたが、やがて諦めたように橘は溜息をついた。その様子は、どこか、嬉しそうでもある。

「解りました。では、お願いします。いつも、とにかく冷やして差し上げるしか、手はありませんので」
もう一度「よろしくお願いします」と丁寧に頭を下げ、橘は出て行く。
残された弥生はタオルに触れ、温かくなっているのを確認すると、再びそれを氷水に通した。首筋を拭って、扇いでやる。高熱にも関わらず、汗を殆どかいていない。
苦しそうな寝顔は、まだまだ幼い少年のものだ。大変なものを背負っているが、まだ十二歳の子どもなのだ。背負わされるだけ背負わされて、彼自身はいったい何を得られたのだろう。
好きなものを当ててみせるだけで驚いて。
睦月のたあいのない言葉に揺さぶられて。
家族の団欒に居合わせるだけで泣きそうになって。
「ねえ、つらい時にはつらいって言って？　欲しいものは欲しいって言って？　言葉にしてくれないと、わからないんだよ？　教えてくれたら、わたしも力になれるんだから」
子どもらしい柔らかさの残る手を握り、一輝の耳元で囁く。その表情がほんの少し和らいだように見えたのは、気のせいだったのだろうか。
まだ、こんなに小さいのに。
もう少し、彼自身の人生を歩いて欲しいと、切実に思った。

＊

――つらい時にはつらいって言って？　欲しいものは欲しいって言って？　言葉にしてくれないと、わからないんだよ？
夢の中で、そんな優しい声を聞いたような気がする。夢にしては妙にリアルな、声。
寝起きの頭はぼんやりとしていたが、右手が何か温かいものに包まれていることに、一輝は遅ればせながら気付いた。

――何だろう？
右手の方へ顔を向けると、目の前にあるものに全身が固まった。真っ暗だが、この近さなら見間違えようがない。
――やよい、さん……？　何故、こんなところに……？
昨晩の記憶で最後に残っているものは、食事を終え、食器を片付けようと立ち上がったところだ。その後からがすっぽりと抜けている。
首を巡らせると、水とタオルの入った洗面器が視界に入った。そこでようやく、自分がまた熱を出したことに思い至る。気分はすっきりしているので、すでに解熱はしているのだろう。
弥生の手には力が入っておらず、握り締めていたのは一輝の方だったようだ。そっと手を引き抜き、自由になったところで彼女の身体に毛布を掛けた。その寝顔を、しばらく見つめる。
――欲しいものは欲しいって言って？
脳裏によみがえる、その囁き。
だが、生まれながらにして多くのものを手にしている自分が、更に何かを望んでもいいものなのだろうか。
一輝は弥生の柔らかな髪を一房拾う。
もしも――もしも、望むことが赦されるのであれば、この温もりが欲しかった。
彼女が傍に居てくれるなら、どんなことでもできるような気がする。
自分の中の空っぽの何かが、満たされるような気がした。

五

一輝が大石家で過ごすようになり、一ヶ月が過ぎた。

何かと群がってくる女子たちや、遠巻きにしながらチョコチョコとちょっかいをかけてくる男子たちの扱いにも慣れてきた。最初のうちは戸惑ったものの、新藤商事の富にへつらう狸ジジイ共とは違って行動原理に裏がない彼らの扱いは、経験さえ積んでしまえば簡単なものだった。

ここのところ、一輝は睦月の自主トレーニングに付き合うようになっていた。睦月は毎日、運動場まで片道二キロのランニングをし、着いた先で五十メートルダッシュを三十セット、腕立て伏せと腹筋、背筋を五十回、その後また二キロのランニングで家に帰るというトレーニングを欠かさず行っている。これとフルに同じ事をするのは無理なので、実際に参加するのは行きと帰りのランニングだけだが。

「なあ、睦月」

出会った頃とは全く違う打ち解けた口調で、一輝は腕立て伏せをしている睦月に声をかける。『普通の十二歳の話し方』も板についたものだ。

「ああ？」

睦月は腕は止めずに顔だけ一輝のほうに向けてきた。

「睦月は、サッカー選手になりたいんだろう？」

「ああ。なるぜ」

迷いのない断言が返ってくる。

「……もう、決定なのか。――なれなかったら、どうする？」

「まだ一回もチャレンジしてねえのに、できない時のことなんか考えらんねえよ」

「失敗した時のことは考えていないのか？」

「当たり前。そんなこと考えてたら、できるもんもできねぇよ」

一輝には、それこそできない芸当である。常に、うまくいかない

時のために次善の策を考えておくことが、経営には必須のことだ。
背水の陣など、考えられない。
「なんかなぁ、もしダメでも、姉ちゃんが『大丈夫』って言ってくれるからなぁ」
「弥生さんが？」
「ああ。姉ちゃんの『大丈夫』ってやつは、根拠なんかないんだけど、大丈夫な気にさせてくれるんだよな。あれ聞くと、よし、また次頑張るぞっていうか、やる気が出てくるんだ」
　それはそうかもしれない、と一輝も思う。実際に、彼女の『大丈夫』で一輝はここまで来たのだから。
「でもさ、姉ちゃん自身は、どうなんだろうと思う」
　睦月が腕立て伏せを止め、胡坐をかいて座ると、真っ直ぐに一輝を見た。
「うちの親父、職人としては最高だと思うし、尊敬してるよ。だけど、親父としてはどうなんだろうな。家の中のことは姉ちゃん独りでやってて、何かあっても親父に相談とかはしないんだ。親父は、仕事をしててくれればいいからって」
　幼い頃の葉月が夜泣きで一晩中寝なかったことや、離乳食がなかなか進まなかったこと、保育園になかなか馴染めずに何度も保育士と話し合いをしたことなどを、達郎は知らない。睦月が反抗期の頃、学校で喧嘩をしたり備品を壊したりといった問題を起こした時も、弥生が謝りに来た。
「俺も、ちょっと前までは姉ちゃんを困らせることばっかりしてたけどさ、今は少しぐらい頼ってくれてもいいと思うんだよな」
　いつもニコニコしているから、辛いのかどうなのかさっぱり判らない、とぼやいた睦月は仰向けになって腹筋を始める。
　父親が背負った他人の債務のことは、睦月には知らされていないに違いない。だが、彼は何となく、「何かがあった」ことには気付いているのだろう。問題があっても知らされないもどかしさを覚えていても、弥生のある種のポーカーフェイスで跳ね返されて、踏み

込んでいけないのだ。
弥生の笑顔の裏にあるもの――一輝も、それを知りたいと思う。彼女の傍にいればいるほど、ただ見ているだけでは満足できなくなってくる。彼女の中にあるものや彼女を取り囲むものを、知りたかった。

＊

「じゃあ、大石。また明日、学校でな」
聞いたことのない男性の声に、誰が来たのかと、一輝は玄関まで様子を覗きにいく。
そこにいたのは、弥生と、彼女の高校の制服を来た男子生徒だった。いかにも女子に人気がありそうな甘いマスクと、弥生よりも優に頭一つ分は背が高い、すらりとした体型をしている。弥生を見る彼の眼差しが、妙に一輝には気に障った。それが何故なのか解らないが、とにかく、気に障る。
「ありがとう、森口君。荷物持ってくれて助かっちゃった」
そう言いながら、弥生は森口と呼んだ男子生徒からスーパーの袋を受け取っている。
彼の姿が視野から消えるまで見送ってから、弥生は上がってくる。廊下に立つ一輝に気づくと、いつものように笑顔になった。
「ただいま、一輝君。今日は学校どうだった？　面白かった？」
その、いつもと変わらない様子に、一輝は胸がザワザワする。その感覚を何と呼ぶのか、彼は知らない。だが、不快なことは確かで、自然と声が尖ってしまう。
「お帰りなさい。先ほどの方は……？」
「え、ああ、森口君。同級生なんだけど、たまたまスーパーで会って、荷物が多いからって、家まで半分持ってくれたの」
親切な人なんだよ、と屈託なく弥生が言う。その屈託のなさに、一輝は余計にイライラが募ってくる。今まで、弥生に対して――と

いうよりも、他人に対して、こんなに荒い気持ちを抱くことなどなかった。
一輝らしくない硬い表情に気付いて、弥生が首を傾げる。
「一輝君？　どうかした？」
「別に、何も」
ぶっきらぼうな言い方が、何でもない筈がない。
弥生は荷物を置くと、一輝の額に手を伸ばす。また、熱が出ているのかと思ったのだ。
しかし、一輝は伸ばされた手を払うようにして退けた。弥生が目を瞬いているが、彼自身、何故こんなふうに気持ちが泡立つのかが解らない。
廊下での騒ぎを聞きつけたのか、居間から橘が顔を覗かせ、更にタイミングよく玄関からは睦月が入ってきた。
「何してんの？」
睦月が二人を交互に見て、当然の質問をする。
「え、えっと……一輝君の具合が悪いのかも……」
「その『かも』ってのは何なんだよ。一輝、具合悪いのか？」
弥生の言葉に首を捻り、睦月はストレートに一輝に問いかける。
「別に、悪くは……」
珍しく歯切れの悪い言い方とその表情に、睦月は、ピンとくる。家に着く直前にすれ違った人物を思い出したのだ。
「あー、いいよ、姉ちゃんは買った物を片付けてこいよ。こいつからは俺が話を聞いとくから」
「え、あ、うん。……お願いね」
頷きながらも気になるようで、弥生は何度か振り返りながら台所へと入っていく。
「おら、来いよ」
睦月は、顎をしゃくって一輝に自室へついてくるように促した。
連れ立って歩く睦月と一輝の後を、橘も続く。
「あれ、おっさんも来るの？　まあ、いいか」

呟いて、そのまま部屋に入る。扉をぴたりと閉めると、睦月は二人に座るように目で示す。
「お前さ、森口に会ったんだろ」
直球でその名を口にする。一輝は一瞬口ごもりながらも、頷いた。
「……ああ。会ったというか……見た」
「やっぱりな。あいつ、姉ちゃんに気があるんだよな。家の方向全然違うのに、この近所のスーパーによく出没するんだよ。で、うまく姉ちゃんとかち合うと、荷物持つの手伝うからって言って家まで来るんだ。ま、そんだけなんだけどな」
あんなに露骨なのに、姉ちゃん気付いてないんだよなぁ、と若干気の毒そうに睦月が呟く。それを聞いて、橘の顔が輝いた。
「ということは、坊ちゃま……」
「やきもち、だろう？」
睦月が遠慮なく引き継ぐ。
「坊ちゃまが……坊ちゃまが……やきもち……」
橘は感無量というように両手を組み、天井を仰いでいる。
だが、当の一輝は、困惑するように眉根を寄せて首を振った。
「僕が、嫉妬？　何故……」
「はあ？　そんなん、自分で解れよ。でも、姉ちゃん、ああ見えて天然の魔性の女だぜ？　覚悟しとけよ。姉ちゃんの周りをちょろちょろしている奴って、他にも二人知ってるぜ」
「おモテになるんですねぇ……まあ、解らないでもないですが」
「何だよ、まさか……」
「いえ、私はそんな……。ただ、あの雰囲気といいましょうか、癒し系ですよねぇ」
「ああ？　癒しを求める奴には、姉ちゃんはやらねぇよ」
ただでさえ色々背負っているのに、この上、彼氏までおんぶに抱っこするようなやつなど、とんでもない。
「結構な、森口って奴は見込みあるんだよなぁ」
横目で一輝の様子を伺いながら、睦月が言う。その視線の先で、

一輝がギュッと両の拳を握り締めた。
「俺はさ、別に、姉ちゃんのことを護ってくれるなら、誰でもいいんだよな。誰もいなかったら、俺がするし」
睦月の迷いのない言葉に、一輝は我が身を振り返る。
自分は、弥生に救われるばかりだった。
確かに、初めて会った時から彼女のことを追い、問題が起きれば金銭的な援助はした。だが、それは『護る』のとは違うような気がする。身近に接するようになったら赤ん坊のように彼女にすがりつき、今日はあんな醜態まで晒した。
何故、こうも一つ一つ指摘されなければ気がつかないのだろうかと、一輝は自分が情けなくなる。今まで身につけてきた知識は、一体なんだったのだろう。十年来、家庭教師には素晴らしい頭脳だと称賛されてきた。だが、この数ヶ月は、自分の愚かしさを実感させられるばかりだ。
「僕には、知らないことが多すぎる」
ポツリと呟いた一輝の言葉に、睦月も橘も、是とも否とも答えなかった。

六

霙混じりの雨が降る、寒い日だった。

十二月も中旬に入ると、工場もフル稼働して年末に備えるようになってくる。

その日も達郎は朝早くから忙しく立ち働いていた。

「よお、一輝君。今朝も見ていくんかい」

「はい。お願いします」

工場に姿を現した一輝を振り返り、達郎が笑顔で声をかけた。不思議なもので、容姿は全く違うのに、その笑い方は弥生によく似ている。

一輝は、暇を見つけては工場に出入りするようにしていた。

下請けの会社や工場の名称や数字としての業績は、今までも知っていた。だが、彼らがどのように働いているのかは、気に留めたこともなかったのだ。新藤商事の総従業員の数は知っていても、それが人間であることには、気付いていなかったのではないだろうか。

もうじき『休暇』も終わる。それまでに、自分が背負うものの一番の底を形作ってくれている者たちの動きを、言葉を、しっかりと記憶に留めておきたかった。

定位置になっている、誰の邪魔にもならず、しかし、工場内を一望できる場所に陣取る。

いつもと同じように機械は動き、いつもと同じように機械の音がリズミカルに響く。

だが、唐突に。

その流れが壊された。

「うあっ」

引き絞るような達郎の呻き声が響き、その体が崩れ落ちた。

「大石さん！？」

一輝は咄嗟に駆け寄り、床でのたうつ達郎を覗き込んだ。

達郎は胸元を鷲掴みにして苦悶の表情を浮かべている。
「救急車を呼んでください！　弥生さんや睦月にも声をかけて！」
集まってきた従業員たちにそう指示を出すと、達郎に向けて声をかける。
「大石さん！　大石さん！　聞こえますか？」
一輝の声に、達郎はかろうじて肯きを返す。
「胸が、痛ぇ……」
心臓――狭心症だろうか、それとも、心筋梗塞だろうか。
万一の場合にはすぐに救命措置が取れるように、一輝は身構える。
「お父さん！」「親父！」
工場に駆け込んできた弥生は、蒼白な顔をしていた。睦月も顔を強張らせてはいるが、まだしっかりしているようだ。一輝は冷静に判断し、睦月に声をかける。
「心臓が悪いみたいだ。救急車は呼んだから、到着したら一緒に乗ってくれ。僕たちは後から追いかけるから。救急隊が来るまでの間に、携帯電話と保険証を取ってきておくんだ」
一輝の落ち着いた声音に肯いて、睦月は居宅のほうへ引き返す。
二人と同時に駆けつけていた橘が、車の手配をしているのが視界の隅に映った。
「弥生さん？　お父さんは大丈夫ですよ」
今にも倒れそうな弥生に声をかけると、彼女は焦点の合わない眼差しを一輝に向けた。今まで見せたことのないその脆さに、一輝の胸が締め付けられる。
「もう救急車が来ます。意識もしっかりしていますし、大丈夫です」
そっと囁くと、弥生は幼い子どものようにコクコクと肯いた。
財布と携帯電話、保険証を持った睦月が戻ってくるのとほぼ時を同じくして、救急車のサイレンが響いてきた。
「大石さん、救急車が来ました。もうすぐです」
達郎は苦しそうに顔を顰めながらも目で反応する。
けたたましいサイレンが止まったかと思うと、すぐにストレッチ

ャーを押した救急隊が駆け込んできた。テキパキと必要な情報を聴取し、手際よく達郎をストレッチャーに乗せると、睦月と共にあっという間に工場を出て行く。サイレンもみるみる小さくなっていき、間も無く聞こえなくなった。

工場の中には、稼動し続ける機械の音と、囁きを交わす従業員の声だけが残っている。

「今日は休みにします。僕たちは病院に向かいますので、何か判ったらこちらに電話をします。ここで待機していてください」

一輝は従業員たちに向けて、そう指示を出す。従業員たちは何をすればいいのか示されて、安堵したように動き出した。

「一輝様。間も無く車が着きます」

落ち着いた声音の橘へ目配せし、外で待つように指示をする。彼はすぐに踵を返して出て行った。

残るのは、一人だ。

「弥生さん……？」

そっと声をかける。

彼女は血の気の引いた顔のまま、小刻みに体を震わせている。

普段の弥生からは想像できないほどの取り乱しようだった。

できるだけ刺激しないように、一輝はそっと弥生の背中に手を置いた。

「さあ、病院に向かいましょう。睦月に電話をかけて、どこに向かっているのかを確かめないと。葉月君も連れて行かないとですね。橘が面倒を見てくれますから」

弥生は理解しているのかいないのか、一つ一つにコクリと首を上下させていく。背中の手に軽く力を込めると、それがきっかけになったように歩き出した。

二人を待つベンツの中では、葉月を抱いた橘が待っていた。まだ朝早いためか、葉月は橘の腕の中ですやすやと眠っている。

車の中に乗り込んでから、一輝は睦月の携帯に電話する。弥生の目は、一輝の手の中の携帯電話に釘付けになっていた。数回のコー

ルの後、睦月の声が響く。
「睦月、行き先はどこになった？」
「中央総合病院。もうすぐ着くってさ。親父も大丈夫だからって、姉ちゃんに伝えてくれよ」
「わかった」
「中央総合病院だ。出してくれ。弥生さん、お父さんは落ち着いているそうです」
一輝の言葉に、フッと弥生の全身から力が抜けたのが判った。一輝は、思わず、その体に腕をまわす。さして長くもない彼の腕の中に、弥生の体はすっぽりと入ってしまった。
――こんなに小さいのか。
引き寄せたその身体の柔らかさと細さにドキリとする。震えは、まだ止まっていなかった。
一輝は、弥生のあまりの怯えように疑問を抱く。ただ父親が倒れたことに対するものにしては、強すぎではないだろうか。達郎の状態は、救急車に乗り込む直前にも意識はあったし、先ほどの睦月の電話でも大丈夫だと言っており、それほど悪くはない。恐らく、一過性の狭心症だろう。何がそれほど彼女を恐れさせるのか。
そんなことを一輝が考えている間にも車は距離を稼ぎ、やがて病院の敷地内に入る。
病院の建物が近づくにつれ、弥生の身体の震えが激しさを増していく。
「弥生さん……？」
顔を覗くと、完全に血の気が引いていた。
「どうされたのですか？　具合が……？」
問うても、弥生は無言で首を振る。隣の橘が目顔で訊いてくるが、一輝にもさっぱり判らなかった。
車は病院の正面玄関に到着し、降車した一輝は弥生の手を取って院内に入ろうとする。が、その手がクン、と引かれる。
「弥生さん、行かないのですか？」

「……ない」
「え？」
小さな声を聞き逃し、一輝は問い直す。
「行けない」
それは、『行かない』ではなく、『行けない』だった。
一輝と橘は、ここにきて、ようやく、彼女の尋常ではない様子は父親が倒れたことによるものだけではないことに思い至る。
「一輝様、私は葉月様を連れて先に行きますので、落ち着いたら合流してください」
「ああ、判った」
足早に去っていく橘を見送って、一輝は近くにあるベンチに弥生を促す。彼女の消沈振りは、普段の様子を知っているだけに、あまりに痛々しい。
ベンチに腰を下ろすと同時に、堪えきれなくなったものが溢れるように、彼女の頬をポロリと雫が零れ落ちた。その後は堰を切ったように次から次へと流れていく。
声はなく、静かに涙だけを流す泣き方に、一輝の胸が苦しくなる。この涙を止められるならば、何でもしよう――そう、強く思う。
一輝は腕を伸ばし、弥生の身体を引き寄せる。彼女はされるがままに、身体をもたれかけてきた。抱き締める力が、意識せずに込められていく。一輝の力が強くなるのに反比例して、弥生の身体からは力が抜けていくのが判った。
頬をくすぐる弥生の髪が、心地良い。
どれほどの時間が経った頃だろうか。
耳元で、囁くような嗚咽混じりの弥生の声が語り始める。
「お母さんが逝っちゃった時も、こんな感じだった。……急に倒れて、苦しがって……」
小さくしゃくり上げる。
「病院に着いて、お母さんは、どこかに運ばれて行って。葉月は、産まれたけど、お母さんは、帰ってこなくって。お医者さんに、呼

ばれたんだけど、『手は、尽くしましたが』……って。真っ青で、動かなくって。――怖かった……！」
弥生の嗚咽を、一輝は、耳だけでなく全身で感じ取る。
その時、彼の胸の中には強い想いが込み上げてきていた。
――この人を、辛い目に合わせたくない。幸せにしたい。
そのために世界を手に入れなければならないとしたら、一輝はそうするだろう。
そう決心した瞬間、唐突に、視界が拓けた気がした。
もう、『休暇』は終わりだ。
一輝にはそれが判った。
まだ広くない自分の背中よりも更に小さなそれをゆっくりと撫で、彼女が鎮まるのを待つ。
どれほどの時間が過ぎたかは、判らない。だが、いつしか弥生の身体の震えは止まっていた。
「弥生さん……？　行けますか？」
自分でも驚くほどに優しい声音で、一輝はそっと尋ねた。
しばらくの間は空いたが、直に弥生は身体を離し、顔を上げる。頬は涙で濡れそぼっており、瞳には微かな陰は残っていたが、そこには確かに彼女の笑顔があった。
四年の間、誰にも言えなかった思いを吐き出して、まだ完全に『大丈夫』になったわけではないけれど。
――弥生はしっかりと頷く。
「行けるよ。行こう」
その笑顔を受け止め、一輝は、この想いはすでに『恋』ではないのだと、知った。

＊

三日後には達郎の検査も一通り終了し、状態も安定したため、無事退院できることとなった。結果として高血圧と狭心症があると診

断されたのだが、その際、彼が時々――というよりしばしば、弥生に隠れて塩をつまみに日本酒を飲んでいたことが発覚した。
弥生の健康管理ならば完璧の筈だったのに、隠れてそんなことをされては台無しだ。
「……お父さん」
「すまん。本当に、すまん。今度からはちゃんと言うよ」
ベッドの上で土下座をしそうな勢いで、達郎が頭を下げる。止める気はなさそうだが、こそこそされるのよりは遥かにマシだろう。
「もう……。ホントに、こっそりはやめてよね。じゃあ、わたしは退院の手続きに行ってくるから、着替えとかしておいてね」
弥生が出て行くと、部屋に残ったのは達郎、睦月そして一輝の三人になる。
弥生が遠ざかるのを待って、達郎が改まった様子で姿勢を正し、一輝に向けて深く頭を下げた。
「今回は、大変世話になったようで……ありがとうございます」
「いえ、病気なのですから、仕方がないことです」
「それもですが、弥生のこともです」
「弥生さん……？」
一輝が軽く首を傾げる。
「ええ。あいつは、母親が逝った時も泣けんかったんです。葬式の時のことは今でもよく覚えてるんですが、生まれたばかりの葉月を抱いて、この睦月を腰にしがみつかせて、でっかい目を見開いてましたわ」
そう言って、一度、手のひらで顔を撫で下ろす。睦月も黙って聞いていた。
「あいつが母親のことを引きずっとるのは判ってたんですが、俺は何もできんかった。俺が頼りない父親だったばっかりに、頑張らせちまったんですな」
少し微笑んだ達郎の目尻には、光るものが滲んでいる。そして、もう一度、深々と頭を下げた。

「あいつを泣かせてくれて、ありがとうございました」
「大石さん……頭を上げてください」
一輝はベッドサイドに歩み寄り、達郎の肩に手を乗せる。そして、顔を上げた彼の視線を、しっかりと捕らえた。
「僕の方が、彼女から多くのものを受け取っているんです――初めて逢った時から、とても多くのものを」
「一輝君……」
一輝の言葉に、達郎の目が潤みを増す。その先に続く一輝の言葉も知らずに。
「大石さん――いえ、お父さんには、先にお伝えしておきます」
「え？」
達郎が「何を？」と問い返す暇は無かった。
「いずれ、弥生さんをいただきに上がります」
「――……え？」
「もちろん、弥生さんの気持ちが一番、重要です。ですが、僕も力を尽くします。弥生さんさえ受け入れてくだされば、必ず幸せにします」
「ええ！？」
衝撃の告白に、達郎はそれ以外に言葉がない。茫然自失の父親に代わって、睦月がポンと一輝の肩に手を置いた。
「まあ、頑張れ。全然脈なしじゃないと思うが、何しろ、俺と同い年だしな。姉ちゃんの中じゃ、殆ど弟扱いだぜ。俺は妨害はしないが、協力もしないぞ。お前より良さそうなのがいたら、そっちに任せるし」
「まだ、僕が結婚できる年までは六年もあるし、じっくり攻めていくしかないな」
「六年か……。背が伸びれば、ちっとは違うんじゃね？　外見も大事だからな。鍛えろよ」
「そうだな。橘に言って、ジム通いを毎日の予定に組み込むようにしよう」

真っ白になっている父親をよそに、少年たちは好き勝手なことを言う。
「あれ、お父さん、まだ着替えてないの？　もう、子どもじゃないんだから、さっさと動かなきゃ」
やがて帰ってきた弥生には呆れられ、踏んだり蹴ったりの父親は情けない声を出す。
「だって、お前、一輝く……」
「さあ、弥生さん。葉月君たちも待っていますから、ここは睦月に任せて先に車に向かいましょうか」
生まれて初めて自分から欲しいと思ったものを手に入れるには、慎重かつ周到に事を進めなければ。達郎に余計なことを言われる前に、一輝は弥生の手を取り部屋から連れ出した。
無情にも愛娘を連れ去られ、ダメージを回復できない父親はがっくりと項垂れる。そんな彼の肩に、睦月がそっと手を置いた。
「まあ、いいじゃん。まだ六年もあるんだし。あいつはかなりの優良物件だぜ？」
――何よりも、弥生を想う、その気持ちの強さが。
いつかは誰かの手に委ねなければならないのなら、一輝ならばその候補の一人にしてやってもいいだろうと思えた。
「ま、頑張れよな」
少しの悔しさも混ぜて、睦月はこの場にいない相手に呟いた。

エピローグ

「それでは、皆さんお世話になりました」
一輝は大石金型製作所の従業員も含んだ一同の前で頭を下げる。
『休暇』を終え、本来の場所に戻る日だ。
小学校を去る時には、涙に暮れる女子たちが教室の外にも列を作っていたとかいないとか。
弥生が一輝の両手をギュッと握る。
「残念だけど、仕方がないよね。でも、また、いつでも遊びに来てね」
「ええ、是非。さし当たって、クリスマスあたりに伺ってもいいでしょうか」
つまり、一週間後だ。
「いいよ。ケーキ焼いて待ってるから」
嬉しそうに笑う弥生の後方でしょっぱい顔をしている達郎が視界の隅に入ったが、一輝は敢えて気付いていないことにした。
「楽しみです」
この数ヶ月で一輝の背は伸び、やや弥生のことを見下ろす目線になっている。
彼女の笑顔を目にする度に込み上げてくる想いを、もう否定する気はない。
ニコッと一輝が微笑むと、何故か弥生が目を丸くした。その隙をついて、一輝は彼女の頬に顔を寄せる。
「ああ……！　もがっ」
弥生の背後で何やら声が上がったが、それ以上の抗議は阻止されたようだ。
一輝が身体を離すと、大きく見開かれた弥生の目がパチリと瞬きされ、次いで見る見るうちにその頬が真っ赤になっていく。
「……え？」

彼女は言葉もなく、固まっている。一輝は指先で頬の熱を確かめた。
「じゃあ、また」
あまりにその様が可愛らしく、思わずクスクスと笑みを漏らしながら一輝はベンツに乗り込んだ。
走り出した車の中で、一輝が橘に問う。
「弥生さんのあの反応は、どう思う？　いけそうだろう？」
いまだかつて見たことのない主人の楽しそうな様子に、橘は喜びながらも驚きを隠せない。
「ええ、まあ、少なくとも、『弟』にキスされてもあんな反応はしませんよね……」
思えば、祖父の一智も、一輝の祖母と出会うまではかなりその筋でブイブイいわせた人だったと、橘は聞いている。そして、たった一人を見つけてからは、一切脇目は振らずにその人のみにまっしぐらであったとも。
――隔世遺伝だったのか……。
主人の有能さを十二分に知っている橘は、いずれ弥生が落ちるであろうことを確信していた。
――まあ、一輝様が弥生様を幸せにすればいいのだから、これでよいのか。
さし当たって、橘にとっては一輝の幸福が最優先な訳であって。
見事なまでに吹っ切れた主人を横目に、橘はそう結論付けた。

エピローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
「迷子の仔犬の育て方」はこれでおしまいです。
次は「眠り姫の起こし方」です。四年が経って、弥生と一輝の関係は変わっていきます。

プロローグ（前書き）

「迷子の仔犬の育て方」から４年後の話です。

プロローグ

弟みたいな子だと思ってた。
まだ子どもなのに、知らない間に我慢して。
とっても賢いのに、何も知らなくて。
たくさんのものを持っているのに、幸せそうには見えなくて。
もっともっと、色々なことを教えてあげたくなった。
楽しい事も、嬉しい事も。
段々と、柔らかくなっていくところを見るのは、嬉しかった。
もっと、幸せになって欲しいと思った。
――やっぱり、弟みたいな子だと思っていて。
でも、あの時。
まだ子どもだと思っていた腕に抱き締められて。
彼の腕は細いのに力強くて、堪えていたものが抑えきれなくなった。
頬に、唇が触れて。
わたしの中で、何かがざわめいた。
けれど、わたしは、今のままがいい。
――変わってしまうのは、怖い。
何故なら――

一

豪勢な邸の二十畳ほどもある和室の中で、二人の男が顔を合わせていた。

一人は六十代後半と思しき初老の男。

姿勢は崩しているが、和服を渋く着こなしている。切れ長の鋭い眼差しは、若かりし頃はさぞかし女性を魅了したことだろうことをうかがわせた。くだけた態度だが、その身から発する気配は紛れもない威厳を漂わせている。

もう一人は三十代半ばほどと思われる男。

彼はピシリと隙なく黒のスーツを身に付け、正座で真っ直ぐに姿勢を正している。銀縁眼鏡をかけてはいるが、よく見ると伊達のようである。その眼鏡があるために、眼差しの険しさが和らいでいた。

「それでよ、あの二人はどうなっているんだ？」

初老の男が口を開く。

「ゆっくりと、お気持ちを育んでいらっしゃいます」

「ゆっくりったって、もう四年になる。あいつももう十五だろ？相手の娘なんて二十歳になっちまうじゃないか。そろそろ既成事実の一つや二つ作っておいてくれんとな。だいたい、まだ一度も会わせてくれてないじゃないか」

「そういう方々ではありませんので……。一輝様は、何よりも弥生様のお気持ちを優先させていらっしゃるんです。それに、まだ、一智様に会っていただく段階ではありませんから」

銀縁眼鏡の男が生真面目に答えると、初老の男はやや大袈裟に天井を仰いだ。

「まったく、いつまで待たせるんだ？　だいたい、俺があいつくらいの頃は、もう二、三人とはヤッてたぞ？」

確かに彼の若かりし頃はそうだったようだが、それも、彼にとって唯一の女性が現われるまでだった筈だ。その女性と出会ってから

は一切他の女性には目もくれず、落とすまでに数年をかけて口説き倒したという逸話は、一種の伝説のようになっている。
血筋だよな、と心の中で呟きつつ、銀縁眼鏡の男は「くれぐれも」と懇願すした。
「お二人に、余計な手出しはなさらないでください。あの方たちはあれでいいんですから」
最後にもう一度念押ししてから、一通りの近況報告を終えた銀縁眼鏡の男は退室していった。
残された男は、顎を撫でながら思案する。
「そうは言ってもなあ。……俺は死ぬまでの間に、三人はひ孫の顔を見るつもりだぞ」
銀縁眼鏡の念押しを無視する気なのは、確かめるまでもなく明らかだった。

＊

春――。
東京教育大学のキャンパス内を、一人の少女が歩いている。とても小柄で、どう見ても中学生、頑張って見ても高校生なのだが、私服だ。
彼女は大石弥生＜おおいし　やよい＞、これでも十九歳の大学二年生である。高校のときよりもほんの少し背は伸びて、現在百五十一・三センチだが、顔は全く変わらない。本人も童顔であることをいやというほど自覚しているので、化粧をしても子どものいたずらにしか見えないだろうと、下手な小細工はせず、時々色付きのリップクリームをつけるくらいだ。
「弥生！」
スタスタと、小柄な身体に似合わず颯爽と歩く弥生の後ろから、彼女を呼び止める声がかかる。振り返った先にいるのは、高校からの友人たちだった。

「美香ちゃん、森口君」
立ち止まって、彼女たちを待つ。加山美香＜かやま　みか＞は百六十五センチ、森口裕輔＜もりぐち　ゆうすけ＞にいたっては百八十三センチもあるので、その二人を前にすると、弥生は小学生にも見える。
「弥生、今から帰り？」
「うん。美香ちゃんたちも？」
「そう。今日は二コマしかなかったから。この後、森口とカラオケ行こうっていう話になって……弥生も、どう？」
美香の誘いに、弥生は少し困った顔をする。
「あ、えっと……」
「もしかして、あの……？」
森口の控えめな問いに、弥生はこくんと頷く。今日は、二週間前から予定が入っていたのだ。
「じゃあ、仕方がないか」
「お昼ご飯に行こうって、約束してて。校門のところまで、迎えに来てくれるの……あ、ほら」
弥生の指差した先では、若い男性が彼女に向けて手を振っていた。遠目でも見て取れる貫禄に、美香がつくづくと感心した声を出す。
「相変わらず、いい男だよねぇ。アレで十五歳とは思えないよ」
「うん、しっかりしてるよ。さすがだよね」
ニコニコと、できのいい弟を見る眼差しで笑顔になる弥生に、美香と森口は心の中で突っ込みを入れる。
――十五歳にして新藤商事を束ねている男に対する評価じゃないよな。
そう、弥生を待つ人物とは、十五歳になると同時に巨大企業である新藤商事の総帥となった、新藤一輝＜しんどう　かずき＞である。実は十歳の頃から新藤商事総帥の実務を担っていたのだが、その事実を知るものは極々わずかだ。
四年前に父が連帯保証人として背負ってしまった借金を援助して

もらい、それ以降、弥生と一輝は姉弟同然の付き合いをしている。
高校時代から弥生と親しくしている美香と森口は、彼女が一輝と親しくしていることを知っている、数少ない人物のうちに入っていた。
「まあ、ほら、彼も忙しいんでしょ？　早く行ってあげなよ」
「うん。じゃあ、また誘ってね」
バイバイ、と二人に手を振って、弥生は小走りで彼女を待つ人物の元に向かう。
「残念だったねぇ、森口」
「ほっとけ」
高校の頃から森口が弥生にベタ惚れであることを知っている美香が、ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべた。彼はこまめにアプローチしているのだが、さっぱり報われていない。多分、遠回しすぎるのだ。
「あんた、『イイ人』になっちゃってるから……。たまには、違う方向で押してみたら？」
「そんなことして、嫌われたらどうするんだよ」
「男として意識してもらえてないよりマシじゃないの？」
「……」
グサリと痛いところを突かれ、森口は絶句する。その通り、全く、ものの見事に、弥生には意識されていないのだ。だが……下手なことをして、今の彼女の眼差しを失いたくないのも事実である。
はあっと、大きな溜息をついた森口の背中を、美香がバンバンと叩く。
「まあ、頑張りなよ。あっちは上品な振りして、かなりの肉食系とみたけどね」
励ましているのかどうなのか判らない美香の言葉に、森口はがっくりと肩を落とした。

＊

黒塗りのアウディの助手席には、橘勇<たちばな　いさみ>が座っていた。彼は一輝の護衛兼秘書だが、それ以外にも細々とした身の回りの世話もするので、執事か家政婦か、という役割だ。いかにも生真面目そうな容貌で、銀縁眼鏡が良く似合う。

弥生が後部座席に乗り込むと、彼は座席越しに長身をよじって頭を下げた。

「今日は、弥生様」

「こんにちは、橘さん」

いつも穏やかな微笑を浮かべているので、護衛としても有能な人物と言われても、ピンと来ない。

最近、一輝と二人きりになると何となく落ち着かない気分になる弥生は、橘の笑顔にホッとする。睦月と一緒にいるのと大差はない筈なのに、何となく緊張してしまうのだ。

「弥生さん、単位の方はどうですか？」

そんな弥生の心中を知ってか知らずか、一輝は、いつもと変わらぬ穏やかな笑みを彼女に向ける。その声は低音で、深い響きを持っていた。

「えっとね、去年結構がんばって取ったから、今年は割りと楽なの」

その笑顔を至近距離で真っ直ぐに向けられていることにどぎまぎし、弥生はさりげなく窓の外に視線を流しながら答える。

初めて会った十二歳の時の面影は残っているものの、四年の間に、一輝の面立ちはすっかり大人びていた。さらりとした黒髪はやや長めだが、眦が上がり気味の切れ長の目のためか、女々しさはない。マスコミにはその年齢と業績、そして怜悧な容貌がよく取り上げられ、しばしばその形容には『有能』だが『冷徹』という言葉が用いられる。だが、今、弥生に向けられている彼の眼差しは柔らかく、蕩けそうな笑みを浮かべていた。

話しかけながら一輝の手がスッと上がり、絡まっている弥生の毛先を梳く。その指先はすぐには離れていかず、しばらく彼女の髪を弄んだ。

出会った頃の一輝は、いつも分厚い壁を通して向き合っているような印象がついて回っていたが、打ち解けてからは、むしろ触りたがりになった。そうやって触れられていると、弥生は背中の辺りが妙にそわそわしてくる。だが、きっと元々寂しがり屋なのに我慢していたのだろうな、と、彼女は身を引きそうになるのをぐっと堪えるのだ。

「今日はどこに行くの？」

しばらくはジッとしていたが、さすがに耐えられなくなって、スス、と若干身を引きつつ、弥生が尋ねる。零れていく髪を名残惜しそうに目で追いながら、一輝はニッコリと微笑んだ。

「パスタが美味しいお店のことを聞いたので。味を覚えたら、ご自宅でも作れるでしょう？」

「あ、うん。睦月たちにも食べさせてあげないと」

目を輝かせる弥生を、一輝も嬉しそうに見つめる。そんなに見ないで欲しいと思うのだけれども、そう言うと、必ず一輝は「何故？」と訊いてくるのだ。弥生自身にも理由なんて解らないので口ごもってしまうと、彼は凄くイジワルな顔をする。

――昔はあんなに可愛かったのに……。

つくづくそう思い、弥生は小さな溜息をつく。口に出すと何かに負けたような気がするので、呟きは心の中だけにしておいた。

弥生の小さな葛藤をよそに、車は目的地に到着する。

「ここですよ」

一輝の声に釣られて外を見ると『高級イタリア料理店』というわけではなく、こじんまりとした可愛らしい店だった。

「わあ、可愛い」

正直なところ、豪勢な店に連れて来られたらどうしようと思っていたのだ。予想外の一輝のチョイスに、弥生は思わず笑顔になる。

「こういうところ、お好きでしょう？」

「好きよ、ありがとう」

弥生の笑顔に、一輝も満足そうに頷いた。

「では、行きましょうか」
一輝の声が合図であったかのように、外から扉が開かれる。橘だった。
「弥生様、どうぞ」
こういう、お姫様に対するような下にも置かない扱いは、弥生を戸惑わせる。
思い返せば、橘も一輝も、昔から同じような態度だ。別に何が変わったわけでもない。けれども、最近は、一輝にこんなふうに扱われると、何故か無性に逃げ出したくなる。
――きっと、わたしの方が変なんだ……。
今もさり気なく自分の背中に置かれた一輝の手を意識しながら、弥生はそう結論付けた。

＊

店内は狭いながらも温かく落ち着いた雰囲気で、寛いで食事をすることができた。
「おいしかったねぇ」
「そうですね。今度、是非作ってください」
「うん、チャレンジしてみる。上手に作れるようになったら、ごちそうするね」
結構ボリュームのあった料理を全て食べ終えて満足そうにしている弥生を見て、一輝が目を細める。そして彼は、ふと思い出したように胸ポケットから小さな包みを取り出した。
「弥生さん、こちらを……」
「何？」
弥生の誕生日は三月二十五日だが、誕生日祝いは、その日にもらった――数え切れないほどのピンクの薔薇の花束と、コメでもパンが焼けるという、ホームベーカリーを。
「進級のお祝いですよ。ちょっと店を覗いていたら、弥生さんに似

合いそうなものを見つけたので……」
進級と言っても、一年生から二年生に上がるのは難しいことではない。受け取ることを躊躇している弥生に、一輝がゆるく笑いかける。
「高価なものではありません。デザインが気に入ったので、買ったんです」
そう言われ、弥生は包みを受け取り、開封する。
確かに、中から出てきたのは、宝石などは使われていない、花をモチーフとした意匠の可愛らしいネックレスだった。それは弥生の好みにピッタリと合うもので、一輝が彼女のことを考えて選んでくれたのであろうことが伝わってくるものである。
――これなら、いいかな。
「ありがとう。可愛い」
笑顔を向けると、心なしか、一輝もホッとしたようだった。
――そうだよね。せっかく選んだのに『いらない』って言われたら、悲しいよね。
自分だって、一輝のために選んだものを拒否されたら、悲しくなる。
「大事にするね」
言いながらさっそく着けようとすると、一輝が立ち上がり、弥生の背後に回った。
「僕がやりましょう」
一輝は弥生の返事を待たずにネックレスを彼女の手の中から取り上げると、肩を少し越すほどの柔らかな髪をかき分ける。彼の指先が項を掠り、弥生の心臓がドキリと強く打った。一輝の器用な指がネックレスの金具を止めるまでの短い間、彼女の全神経は首筋に集中する。
一輝はネックレスをつけ終えると、身体を固くして身構えている弥生のつむじを見下ろした。ふと思いついて身を屈めると、彼女の毛先をすくって軽く口付ける。微動だにしない弥生は、彼のそんな

悪戯にも気付いていなかった。
「いいですよ」
「あ……ありがとう」
「よくお似合いです。いつも着けておいてくださいね」
嬉しそうな一輝を見ると、弥生も嬉しくなってくる。
「うん……あ、ねえ、一輝君も何か欲しい物ない？　何かお返ししたいな」
昔同じことを訊いて、彼は答えられなかった。だが、今の一輝には何かある筈だ。
しかし、弥生のその問いに、一輝は一瞬沈黙し、ジッと彼女を見つめる。
――あれ？
何か変なことを言っただろうかと弥生が怪訝な顔をすると、ふと一輝は笑顔を取り戻し、首を振った。
「今、本当に欲しいもののために努力しているところなんです。それを手に入れるまでは、個人的に何かを欲しがるのは止めているので。成し遂げられたら、その時にまとめていただきますよ」
「ふうん？」
解るような、解らないような彼の説明に、弥生は曖昧に相槌を打つ。一輝は何かを含んでいる眼差しを彼女に注いだ後、席を立った。
「さあ、そろそろ帰りましょうか。お送りします」
何となく尻切れトンボで終わった会話だったが、一輝には仕事があることだし、と弥生も立ち上がった。

＊

大石家に弥生を送り届けた帰り道、一輝は携帯電話を開いて画面を確かめながら、今日の首尾を振り返っていた。
「橘、彼女はだいぶ変わってきたと思わないか？」
「そうですねぇ、変わったと言えば変わったような、変わってない

と言えば……」
「『弟』に固執してはいる。だが、その理由も判るんだ」
「理由、ですか？」
「ああ、多分、僕が考えているとおりで合っていると思う」
そこをどうするのかが問題なんだ、と、一輝は車の窓から外の景色が流れていくさまを眺める。それは、彼が解消してやらなければならない、課題なのだ。
一輝は、弥生との関係を変えたいと願っている。
――これからも、彼女と生きていきたいと思っているから。
弥生は、一輝との関係を変えたくないと願っている。
――これからも、彼と生きていきたいと思っているから。
同じことを望んでいても、取る手段が違う限り、最終的には異なる道を進むことになってしまう。
そんなのは願い下げだった。
弥生の自分に対する気持ちは、ふとした仕草の一つ一つに滲み出ているのだ。それは、決して、『弟』に対するものなどではない筈だ。彼女自身は気づいていないか、あるいは見えていない振りをしているのかもしれない。
四年をかけて、一輝はここまでこぎつけた。だが、彼女は最後の一線を、なかなか跳び越えてはくれない。
「そこで頼ろうとしてくれないのは、本当の『弟扱い』か」
弥生と出会った頃の、幼い子どもを思い出して自嘲する。あの頃は、彼女の温もりを求めて、ただ縋りつくだけだった。ただ、『自分』のためだけに彼女に焦がれた。
今は、そうではないと思っている。
自分よりも、彼女を幸せにしたい――それが、心からの願いだ。
ただ、「彼女を幸せにしてくれるなら、それが他の男でもいい」とは決して思えず、あくまでも「自分が彼女を幸せにしたい」のだが。
弥生は、四年の年の差をもって『姉』と『弟』のような関係とし

ておきたいようだが、十二歳と十六歳の頃ならいざ知らず、十五歳と十九歳では肉体年齢など大きな問題ではない。
今突き当たっている『壁』の本質は、年の差などではないのだ。
もっと――別のもの。
一輝が、背負っているものだ。
それを捨てることは彼にはできないし、彼女も、彼がそうすることを望まないだろう。
焦ってはいけないと思いつつ、ここに来て停滞してしまった弥生の気持ちが、もどかしい。
無理強いはしたくない。彼女自身の意志で一輝の世界に飛び込んできてくれるなら、自分の持てる力全てで護ってみせるのに。
一輝は、自分の人生において唯一計画通りにいかない、しかし最も重要な案件の難解さに溜息をついた。
「これからの予定はどうなっている？」
「十五時からは会議が。十七時からは上條グループの上條啓一郎＜かみじょう　けいいちろう＞様との会食があります。二十時からは一智＜かずとも＞様からのご紹介で、園城寺薫子＜えんじょうじかおるこ＞様という方とのお約束が入っておりますが……」
橘に声を掛けると彼は淀みなく答える。一智は一輝の祖父で、新藤商事総帥代理の座を退いてからは悠々自適の生活を楽しんでいる筈だ――裏を返せば、暇をもてあましているとも言う。
「園城寺……？　誰だ、それは？」
「私も存じ上げません。一智様の個人的なお知り合いのようで……。同じ時刻に、私は一智様からのお呼び出しを受けておりまして、同席することができないのですが」
「おじい様が、お前を？」
「ええ。警備はくれぐれも厳重に行うように指示しておきます」
あの、はた迷惑な遊び心満載な祖父が、何か厄介なことを計画しているのかもしれない。
一輝には、何か嫌な予感がした。

二

「ねえ、これホント？」
そう言って学食で昼食を取っていた弥生の前に美香が突き出した週刊誌に載っているのは、後姿の一輝と彼の腕に手をかける美女の写真だった。女性はスラリと背が高く、荒い画像からも見て取れるキリリとした美貌で、一輝とよく似合っている。
――新藤商事の若き総帥、十歳年上元モデルと熱愛か！
写真に被さって、そんな扇情的な見出しがあった。
「……綺麗な人だね」
「あんた、それだけ！？」
他に言いようがなく呟いた弥生の台詞に、美香が眉を逆立てる。
「え……え？　……お似合いだね？」
「そうじゃないでしょ！」
美香の逆上振りに、弥生は困惑する。一輝も十五歳になるのだし、好きな人がいてもおかしくない筈だ――それがたとえ十歳も年上だとしても。
弥生の手が、無意識のうちに、数日前にもらったばかりのネックレスをもてあそぶ。
「睦月に彼女ができたみたいで、寂しいけど……」
――仕方がないじゃない。
そう呟いて、弥生は食事を再開しようと俯く。けれども、喉に何か詰まっているようで、食べようとしても食べられなかった。手を止めて固まっている彼女に、美香はもの言いたげな眼差しを向ける。
「もう……彼に同じこと言ったら、ダメだよ？」
溜息をついて雑誌を置くと、美香はしみじみとそう言う。新藤一輝が弥生一筋なのは、傍から見ていると明らかだ。その彼がこの会話を聞いたら、ショックで立ち直れないに違いない。
美香が椅子を引いて同じテーブルについたところで、学食の入り

口に森口が現われた。美香が軽く手を振るとそれに気付き、近づいてくる。
「よお、加山が学食にいるなんて珍しいじゃんか」
裏を返せば、弥生がいつも独りでこの時間に学食で昼食を摂っていることを知っているということになる森口である。
「残念だったわね」
「……別に、そんな……」
せっかく、弥生と二人きりで過ごせるチャンスだったのに――と残念な気持ちがよぎった図星を指され、森口はしどろもどろになる。が、ふと、テーブルの上に置かれた雑誌に気付くと、目を見張った。
「何だ、これ!?」
雑誌を取り上げ、目を皿のようにして文面を追う。
――新藤商事の若き総帥新藤一輝氏が、十歳年上の元モデル・園城寺薫子さんと帝王ホテルのロビーで密会している場面を本社記者が撮影した。時刻は夜の九時。こんな時間にこんな場所で、二人はいったい何をしていたのか。園城寺さんは元モデルで――
雑誌には相手の女性の顔写真も載っている。正統派の美女で、挑むような眼差しをカメラに向けていた。
「え、だって、こいつって……」
森口は口ごもりながら、雑誌と弥生の間で視線をウロウロさせる。
「そうでしょ？　そう思うでしょ？」
美香が肩をすくめながらそう言うと、ようやく森口は少し落ち着きを取り戻す。
「まあ、所詮こんな週刊誌の書くことだからさ……」
写真はややピンボケしており、しかも一輝は後姿で表情は見えない。きっと、弥生に向けるものとは真逆のマイナス百九十六度の眼差しで、女性を見ているに違いない。
「取り敢えずさ、本人に確認してみたら？」
何で自分は恋敵のフォローをしているのか、と森口はボヤきたくなったが、いつもの笑顔がない弥生は見ていたくない。こんな記事

がでまかせなのは普段の一輝を見ていれば明らかなことで、メールの一本も入れればすぐに弥生の暗雲も晴れる筈だ。
だが、弥生から返ってきたのは、口元だけの微笑だった。目も逸らされていて、いつもの、見ていると一緒に心が温かくなるような笑顔ではない。
「いやだなぁ、森口君まで。一輝君は弟みたいなものだよ？　一輝君だって、わたしにそんなこと問い詰められても、困っちゃうよ――あ、もう行かなきゃ」
弥生は終始二人から目を逸らし、明らかに不自然なタイミングで弁当箱を片付け始めた。そして慌しく立ち上がると、「じゃあね」と一言残して小走りに去っていく。
「ねえ、追いかけなくていいの？　うまくしたら、イケるかもよ」
「そんな、弱みに付け込むなんてできないよ」
でも、そう言いつつも、弥生を放っておくこともできない森口は彼女の後を追いかけた。
「結局、『イイ人』なんだよねぇ」
長身のその背中を見送りながら、美香は呟く。彼女としては、弥生さえよければ、どちらでもいいのだが。一輝も森口も弥生にベタ惚れで、どちらもそれぞれに『いい男』なのだから。後は、弥生が選ぶだけだ。
――多分、ダメだよね。
そう思いながらも、美香は森口が『イイ人』を脱却できるように、心の中でエールを送った。

＊

身長差が三十センチもあると当然歩幅の違いも明らかで、森口はすぐに弥生に追いついた。
「大石！」
声を掛けても振り返らない。それは、彼女らしくない反応だった。

森口は弥生を追い越し、前に回る。
俯きがちにズンズンと歩いていた弥生が彼の胸にぶつかりそうになって、多々良を踏む。少しよろけた彼女の両肩を支え――その細さにドキリとしたけれど、手は放さなかった。
「ちょっと、待てって」
上体を屈めて、森口は弥生の顔を覗き込むようにして目を合わせる。そこにあったのは今まで見たことのない、頼りなげな眼差しで、彼は己の理性と感情の狭間でしばし戦いを繰り広げた。
このまま抱き締めてしまえ、とその両腕は叫んでいたが、結局勝利を収めたのは理性の方で、森口は数回こっそり深呼吸をしてから口を開く。
「大石、ちょっと話をしよう」
「……うん」
「じゃあ、向こうに行こうか。――ここだと目立ってる」
森口の言葉で、弥生も二人が周囲の注目を集めていることに気付く。心持ち頬を赤らめ、森口が促すままに大人しく歩き出した。
弥生のつむじを見つめて歩きながら、森口は自分の五年越しの片想いにもそろそろ決着をつけるべきなのだと思う。彼女の背中を押すのならば、自分自身がはっきりさせなければいけないだろう。ぬるま湯に甘んじているのは、彼も同じなのだ。
森口と弥生は、人目につきにくい、木々の間に置かれたベンチに並んで腰掛ける。
しばらくは、二人とも無言だった。
森口はこの空気を壊してしまいたくなかったし、弥生は単純に語る言葉を持っていなかったのだ。
しかし、やがて、深呼吸をした森口が口火を切る。
「あのさ、あの記事……ショックだったんだろ？」
「え……別に？　全然、だよ？」
笑顔ではあるが、やはりいつもとは違う。五年間弥生を見続けてきて、こんな笑い方は見たことがなかった。こんな顔はさせたくな

い――だが、一方で、その顔をするのが自分のためだったら、と思う気持ちもどこかにあった。
「勝ち目、ないよな……」
苦笑とともに、溜息を落とす。
「森口君、どうしたの……？　なんか、元気ない？」
弥生が心配そうに覗き込んできた。彼女自身が落ち込んでいた筈なのに、森口の溜息を聞いた途端に、そんな色など消し去って、彼の気持ちを案じてくる。
森口が何よりも惹かれるのは、弥生のそういうところだった。そして、何よりも他人を優先してしまう彼女だから、自分が力になってやりたいと思うのだ。
「森口君？」
もう一度、弥生がその名を口にする。
自分が行動することで、彼女のその眼差し、その声を失ってしまうかもしれない。森口はそう思ったが、覚悟を決めて最初の一歩を踏み出した。
両腕を伸ばし、彼女を包み、引き寄せる。
初めて抱き締める弥生の身体は、小さく、細く、そして柔らかい。
「……森口君？」
腕の中からいぶかしげな声はあがるが、もがいて逃げ出そうとはしていない。森口はもう少し力を込めた。
「あのさ、俺……初めて会った時から、大石のことが好きなんだ」
「……え？」
少し間が抜けた声も愛おしい。もう一度その身体の甘さを味わって、森口は腕を離した。
きょとんと見上げてくる顔は、驚いてはいる――しかし、男に抱き締められたというのに、丸い頬を染めてはいない。
「今、どう感じた？」
「今って……今？」
「そう」

考え込むように、弥生の眉が寄る。
「……驚いた」
「それだけ？」
「え……あ、うん……」
――結構、アピールしていたつもりだったのにな……。
あまりに予想通りの答えに――予想はしていたのに、やはりがっくりと力が抜ける。
「森口君？」
項垂れた森口の腕に、オロオロと弥生が手をかける。
――その温かさに胸が詰まるけれども。
森口は、意を決して言葉を継ぐ。
「じゃあ、さ。同じことをあいつに――新藤一輝にされたら、どう？」
「一輝君、に……？」
「そう」
一瞬にして、彼女の頬が染まっていく。
「やだ、ちょっと待って」
――ああ、見事に玉砕したな。
狼狽えながら真っ赤になった頬を隠そうとする弥生に、森口は苦笑する。一輝に対する弥生の感情を表すのに、これほどまでに雄弁な答えはない。
「その反応で、『どうでもいい』とか『弟だ』っていうのは、無理があるよ」
まだ、諦めるまでには時間がかかるだろうけれど、言うべきことを言って、森口は自分の中で一つの区切りがついたことを実感する。
「あいつと、ちゃんと話してみなよ。大石さんが、何を感じているのか、どうしたいのか。確かに、俺たちよりも随分年下だけどさ、頼りにはなるんだろ？」
勢いをつけて、立ち上がる。
「あいつの気持ちも、決め付けてやるなよ。あいつがどうしたいの

か、何を考えているのか、ちゃんと訊いてさ。多少時間がかかってもいいから、考えて。大石さんの、人のことを優先するところは凄くいいと思うけど、自分の事も、もう少し優先順位、上げてもいいよ」
「森口君……」
「急に変なこと言って、ゴメンな。でも、高一の時から好きだったっていうのは、ホントだから」
不意に胸に熱いものがこみ上げてきて、森口は急いで踵を返す。
「じゃあ、また明日な」
「あ……森口君、ありがとう！」
歩き出した森口の背に、弥生は懸命に言葉を選んで投げかける。彼がくれた色々なことに対して、それが一番相応しい言葉だと思ったのだ。彼は、肩越しに手を振って返したが、振り返ることはしなかった。

＊

森口と別れ、弥生は帰路につく。
電車の中でも、歩いている時でも、考えた。
――わたしの気持ち……一輝君の気持ち。
弟の睦月＜むつき＞や葉月＜はづき＞とも、父親の達郎＜たつお＞とも、いつまでも一緒にいたい。美香や森口もだ。
一輝とは……？
もちろん、一緒にいたい。だって、『弟』みたいなものだもの。
不意に、あの週刊誌の写真が頭に浮かぶ。
あの女性はとても綺麗で、一輝と並んでいても遜色なかった。
なら、自分が同じように一輝の隣に立ったら、どうなるのだろう？　と、弥生は自問してみる。
想像した画の中の弥生と一輝は、まるで釣り合っていない。自分を隣に立たせたら、きっと一輝は笑いものになる。自分が指差され

るのは気にならなかったが、あんなに頑張っている一輝が何か言われるのは、耐えられなかった。
そもそも、一輝は弥生のことをどう思っているのか。
一輝の方から誘いがかかるくらいだから、好かれてはいる筈だ。でも、その態度は常に礼儀正しい――最近は、何か妙に触るようになってきているけれども。
きっと、一輝の方も、自分のことは姉のように思ってくれているに違いない。
――ほら、やっぱり、それなら一緒にいられるじゃない。
弥生は、そう結論付ける。
気付くと、家の近くまで帰り着いていた。家の中に入る前に、一度大きく深呼吸する。
「ただいま」
声を掛けながら入っていくと、居間からごろりと寝転んだ睦月が顔を出した。
「おかえり」
「あれ？　早いね」
弥生はきょとんとする。睦月はクラブユースからの誘いもあったが、それを蹴って、家から通える距離にあるサッカー部の有名な高校へ推薦入学したのだ。部活の練習はかなり厳しく、いつも帰宅は夜遅くになる。
「ああ、今日と明日は試験だから。中学生の内容の総まとめの」
そう言う睦月の前には、食卓の上にポテトチップス、テレビでやっているのはワイドショーと、どこをどう見ても試験中の学生ではない。すわ、お説教か、と睦月は身構えた。
しかし。
「寝転がってお菓子食べてたらダメだよ」
母親代わりを自認している筈の姉は、ぐうたらな弟の姿を前にして、心ここに有らずの様子で居間を出て行ってしまう。
おかしいな、と睦月が首を傾げたその時、派手な効果音とともに

新しいワイドショーが始まった。その冒頭で司会が口にした内容と画面いっぱいに広がる写真に、目を丸くする。
「あいつに、女……？　ウソだろ」
どのようにでも取れるスクープ写真と、明らかに誇張されている解説内容は信憑性が乏しかったが、こんな内容を暴露させてしまうなど、一輝らしくない。そこまで考えて、睦月は弥生の様子が変だった原因に気付く。胡坐になって、ガリガリと頭を掻いた。
一輝も、慎重にコトを進めたいのはわかるが、もう少し押してもいいのではないかと、睦月は思うのだ。
溜息を一つ吐くと、睦月は立ち上がって姉の部屋へ向かう。
戸をノックすると、少し間が空いてから返事があった。
「なあに？」
十五歳らしからぬ大柄な身体でのっそりと部屋に入る睦月を、ベッドに腰掛けた弥生が首を傾げて見上げる。
「あのさ、アイツのこと……」
一瞬、弥生の目が揺らぐ。
やっぱりそれか、と、睦月は内心溜息をついた。
「気にしてんの？」
「え、何が？」
とぼけようとした弥生の前に、胡坐をかいて座る。椅子だと彼女を見下ろす形になってしまうので、今は敢えて床にした。
「一輝と女のコト、なんかで見たんだろ？」
「……」
弥生は無言で目を逸らした。その『らしくなさ』に本人は気付いているのかどうなのか。
「アイツに訊いたらいいじゃんか。喜んで教えてくれるぜ」
睦月も、森口と同じことを口にする。弥生は少し意固地になっていた。
「別に、訊く必要なんか、ないよ」
「でも、気になってるんだろ？」

「なってないよ。一輝君は弟みたいなものだもの」
言い張る弥生に、睦月は呆れた眼差しを向ける。
「ホントにそう思ってんの？　だったら、アイツ泣いちまうぜ？　少なくとも、俺がアイツの立場だったら、泣くわ」
本当に、心からの言葉である。惚れている女から受ける扱いで『弟』『兄』『父』『友達』のうち、どれが一番きついかと言われたら『弟』だろう。男として身も蓋もないではないか。『兄』『父』だったら頼りがいがあると取れないこともないし、『友達』だったら少なくとも他人だ。だが、『弟』ではどちらも否定される。
「俺だったら、ぜっったい、イヤだね」
大好きな弟に力いっぱい否定され、弥生は俯いた。
「睦月は、わたしの弟じゃない方がいいの？」
「俺はいいんだよ。でも、アイツはイヤがるって言ってるの」
「でも……」
口ごもる弥生に、何がこんなにも姉を躊躇わせるのだろうかと睦月は疑問に思う。元々、弥生はきちんと考えることはするけれども、うだうだ悩む方ではない。割と即断即決の方だ。
一輝は弥生が納得するまで待つだろうが、この調子ではいつになることやら。一輝が弥生を諦めるとも思えないので、他の男が手を出そうとしても、徹底的に妨害するだろう。そうなれば、下手をするといき遅れになってしまう。睦月としてはそれでも構わないといえば構わないのだが。
「まあさ、これを機会に、ちょっとじっくりアイツと話しをしたら？　あのネタのことを知ったら、多分、すぐやってくるぜ？」
正直なところ、まだ姿を現していないことの方が睦月にとっては不思議なくらいだ。
そんなことを思ったとき、タイミングよく玄関の呼び鈴が鳴る。
「噂をすれば影、かな」
よっこらせ、と立ち上がり、睦月は玄関に向かう。
残された弥生は、ジッと自分の手のひらだけを見つめていた。

――何故、皆、変えようとするのか。何故、今のままではいけないのか。
「『弟』でいいじゃない。『弟』の方が――」
――ずっと、一緒にいられるんだから。
その呟きは、声には出せない。そんなふうに考えてしまう自分を、浅ましいと弥生は思った。彼の隣に立つ勇気はないくせに、傍にいることは望む自分を。
やがて、足音が階段を上ってくる。
弥生は、部屋の戸が叩かれないことを願った。

＊

一輝は、目の前に置かれた雑誌を、胡乱そうな眼差しで眺めていた。
それが置かれたデスクの向こう側では、橘が直角に腰を折っている。
雑誌の中には、妖艶な美女に寄り添われた、一輝の写真。それは、完全に捏造記事だ。
「申し訳ありません。私があの時お傍を離れなければ……」
頭を深く下げたまま橘が謝罪するのに対して、一輝は溜息をついた。
その時についていた護衛も、周囲の警戒は怠っていなかったが、写真の荒さからするとかなり遠方からの撮影に違いない。おそらく、橘がいつもどおり一輝の傍についていたら、こんな写真を撮られることなどなかっただろう。しかし、橘には一智の命令を拒否する権限がない以上、離れたことを責めるのは筋違いだった。
「あのクソじじいの仕業だな」
普段は決して口にしないような言葉で、ぼそりと呟く。
おかしいとは思ったのだ。
ビジネス上のメリットは何もない女性の接待を命じられ、丁度そ

の時、有能な護衛である橘は呼び出され。
どちらにも噛んでいるのは祖父である一智だった。
しかも、通常であれば、こういった醜聞は、世に出回る前に回収される筈だ。何故かそのチェック機構も働かず、雑誌はおろか、低俗なワイドショーにまで取り上げられてしまった。
どうせ根も葉もないことなのだから、放っておけばすぐに消えていく話題だ。晒し者になったことは腹立たしいが、敢えて騒ぎ立てる必要もない。問題なのは、弥生がこれを目にしたかどうかということだった。せっかくジワジワ追い上げてきているというのに、こんなくだらない記事を真に受けられたら台無しになってしまう。
一輝は、この記事を目にした弥生がどんな反応を示すのか想像してみた。
最悪なのは、祝福されることだろう。ここ最近の彼女の様子を見る限り、それはないと思うのだが、不安は拭えない。
――嫉妬は、してくれるだろうか。
弥生を悲しませたり、不安に思わせたりなど、させたくない。だが、一方で、自分のために揺らぐ彼女を見てみたくもある。彼女はいつも笑顔で、その笑顔は一輝を幸せにしてくれるのだけれども、それだけでは物足りなくなる時があるのだ。時折、無性に泣かせたくなる。
大事な人の泣き顔が見たいなど、自分は少しおかしいのかもしれないとも思うが、特に最近は、その衝動を堪えるのにそれなりの忍耐力を動員しなければならない事もしばしばあった。
「この後、時間は取れるか？」
「十七時からであれば……」
今は十六時少し前だ――あと一時間もある。
すぐにでも弥生の元へ駆けて行きたい気持ちを押しとどめ、一輝は溜息を一つ吐いて、意識を切り替えた。彼の立場で、個人的な問題を優先させるわけにはいかない。

そして一時間後、一輝はここで待ってしまったことを悔やむ事になる。

＊

弥生は、広々とした和室の真ん中で、ポツリと座らされていた。この部屋で待つように言われて、もう十分ほどになるか。一度は切った携帯電話の電源を入れ、時刻を確認し、再度切る。

自宅へ迎えに来たのは一輝ではなく、その祖父、一智の遣いだった。

いずれ引き合わせるから、と一輝には言われていたが、彼がいない状態で会うことになろうとは。

いったいどんな用件なのかも知らされておらず、弥生は不安だけが膨らんでいく。

時刻を確認してから、更に五分ほどが過ぎた頃であろうか。

静かに襖が開き、和服を身に付けた、威風堂々とした初老の男性が入ってくる。

「待たせて悪かったな」

男の容貌もそうだが、低い声も、一輝のものとよく似ている。

「一輝がいつも世話になっている。祖父の一智だ」

上座に座った一智に手招きされて、弥生は慌てて近寄り、三つ指を突く。

「あ、大石弥生です。こちらこそ、一輝君には、大変お世話になりました」

顔を上げると、真っ直ぐに向けられている鋭い眼差しが突き刺さる。一輝とよく似ている筈なのに、全く違う。いつも彼から向けられるものがどんなに優しいものであったかを、弥生はつくづくと実感させられた。

「今日来てもらったのは、他でもない。一輝とあなたとの、付き合いの件だ」

「一輝君との、お付き合い……？　あ、いえ、わたしと一輝君は、そんな……」
「付き合いではない、と？」
「はい」
「では、あいつが他の女性と関係を持っても、構わないのだな？」
一瞬、弥生の胸が鋭く痛む。けれども、彼女はそれを無かったことにした。
「はい。それは……一輝君が、選ぶことです」
「まあ、そうだな。一輝が、というよりはあいつの背負うものが、だな。最近、一輝が付き合い始めた女性のことは知っているかな？」
――あの、週刊誌の女性のこと……？　やっぱり、お付き合いしてるんだ……。
弥生の脳裏に即座に浮かんだのは、一輝の隣に立って、全く見劣りがしなかったあの女性のことだった。自分とは、全く違う、美しい女性。
「あの、モデルだった方、ですか……？」
「そうだ。あいつとは良く似合っていただろう？　ちと年は離れているがな」
「……はい」
確かに、よく似合っていた。少なくとも、『姉と弟』ですらない、『兄と妹』のように見える自分よりは、遥かに。
「この新藤商事は、もう政略結婚は必要無い。充分に成長しているからな。だが、連れて歩く伴侶には、それなりの見栄えが必要だ。ある意味、装飾品のようなものでな――彼女であれば、その役割を果たせる」
「でも、結婚っていうのは、幸せな家庭を築くのが一番ではないのですか？」
「普通の家庭であれば、な。だが、一輝は家庭の他に、この新藤商事を背負っている。可愛く温かい妻よりも、共に新藤商事の看板となれる者が必要なのだ。新藤商事の新藤一輝にとっては、結婚とは

一種の契約だよ」
断言されて、弥生は言葉に詰まる。彼女にとっての夫婦とは、お互いに支え合い、温かな家庭を作るためのものだ。だが、新藤家に――一輝にとっては、そうではないのかもしれない。
――わたしの幸せと、一輝君の幸せとは、違うものなの？
俯いた弥生は、自分に注がれる観察するような視線に気付いていなかった。
やがて一智が口を開く。
「自分と一輝にとって最善の道がどんなものなのか、よく考えてみなさい」
彼が立ち上がって部屋を出て行くと、入れ替わりで弥生をここまで乗せてきた男性が顔を覗かせる。帰りの車の準備ができていると言われ、弥生はのろのろと立ち上がると、彼について歩き出した。
玄関へ向かう長い廊下を歩きながら、弥生は飽和状態の頭で考えようとする。だが、今日一日、次から次へと彼女の能力外のことに襲われて、もう、頭がうまく働かなかった。
一輝のことは幸せになって欲しいと――その助けになるのならばどんなことでもしてあげたいと、思っていた。けれども、幸せのあり方が自分と違うというのならば、何をどうしてあげたらよいのかが判らない。
――一緒にいるときに笑ってくれたのは、嬉しかったから……幸せだったからではなかったの？
自分だけが嬉しかったのだろうか。
一輝は、ただ、自分に合わせてくれていただけなのだろうか。彼は優しいから、そうだったのかもしれない。本当は、こんな子どもっぽい自分に付き合うのはうんざりしていたのか。
弥生には、もう何が何だか解らない。
数日前までは、一輝に会ってあんなに楽しかったのに、今は会うのが怖かった。
それなのに。

玄関を出て、送りの車に乗ろうとした時。
「弥生さん！」
弥生は、一番聞きたくて、一番聞きたくない声に呼び止められた。

＊

フル稼働で仕事を終えて、これ以上はないという速度で大石家に着いた時、弥生は家にいなかった。
求めていた愛しいヒトではなく、憎たらしいほどの図体に成長した睦月に迎えられ、一輝は落胆を隠せない。だが、続いて睦月にもたらされた情報にその落胆は吹き飛び、代わりに苛立ちがこみ上げてくる。
「では、その迎えは、確かに新藤家からと言ったのですね？」
「ああ。ごっついベンツで来たぜ？　筆で書いた手紙を持ってきてた」
時間を訊くと、一時間ほど前のことだった。一輝は携帯電話を開いて画面を確かめる。
「それ、何だ？」
「秘密」
睦月が一緒になって覗き込んでくるのへ、おざなりに返事をする。
携帯では地図の画面に小さなマークが点滅していた。その場所は、確かに新藤家だ。
「橘、すぐに車を出せ！」
「ちょ、おい！？　あれ、お前んとこの奴じゃなかったのか！？」
慌てたように追いかけてくる睦月に、一輝は振り返りもせずに返事をした。
「いや、確かに僕の家の者だ。大丈夫、弥生さんはちゃんと連れ帰る」
それだけ言うとさっさと車に乗り込み、発進させる。
「橘、うちのおじい様は、いったい何を考えているんだ？」

「……一輝様にとって、一番いい方法かと……」
怒りを漲らせている一輝を宥めようと、橘は控えめに答えた。だが、あまり効果はなかったようだ。
「僕にとって一番いい方法は、放っておいてくれることだ」
にべもなく言われ、橘はそれ以上のフォローを諦めた。一智も、二人にとって悪いようにしないとは思うが、どんな方法を取るかが予測不能だ。
ジリジリしている一輝とハラハラしている橘を乗せ、アウディは渋滞に巻き込まれることもなく軽快に走る。
新藤邸に到着すると、一輝はすぐに弥生の元へ行こうとしたが、家の者に阻止された。
「一智様が外でお待ちになるようにとおっしゃっておりまして。お嬢様はもうじき出てこられます。お帰りの車も用意しておりますので、そちらでお待ちになってはいかがでしょうか？」
一智が現役の頃から付き従っている者で、やんわりとした物腰だが、決して引かない。
仕方なく、一輝はアウディの中で待つこととした。
「おじい様は、弥生さんに何を吹き込んでいると思う？」
「そうですねぇ……一輝様がどんなに弥生様を想っていらっしゃるか、とか……？」
「そんな可愛らしいことをあの人がするわけないだろう。大体、今回のことを仕組んだ張本人だぞ？　まったく、何をしたいのか……」
時間を置いて少し頭が冷えてきたのか、一輝の口調はぼやき程度になってくる。橘はそんな主人にホッとしながら、サイドミラーに映った人影に声を上げる。
「あ、一輝様、戻ってらっしゃいました！」
つられて一輝が振り返ると、こちらに向かってトボトボと歩いてくる弥生が見えた。その様子からして、祖父に何か芳しくないことを言われたのは間違いなさそうだった。
即座に車のドアを開け、彼女のもとに駆け寄る。

――何を言われたにせよ、そんなことはすぐに吹き飛ばしてみせる。
その自信が、一輝にはあった。
「弥生さん！」
そう思って、その名前を呼んだのに、振り返った弥生の眼差しに思わず足が止まってしまう。そこには、紛れもない怯えがあった――彼に対する、怯えが。
「弥生さん？」
もう一度、声を低めて名前を呼ぶ。だが、彼女はふと目を逸らしてしまう。
歩み寄り、弥生の腕を取っても、その目は一輝を見てはくれなかった。空いている手を彼女の頬に当て、その顔を覗き込む。
「弥生さん？　あの人に――おじい様に、何を言われたのですか？」
そう問うと、弥生の目がふっと揺らぐ。やはり、動揺させられるようなことを言われたのだ。
「弥生さん、教えてくださらないと、解りません。以前に弥生さんがおっしゃったことですよ？　言葉にしなければ伝わらない、と」
一輝の言葉に、弥生の顔がくしゃりと歪む。
――あ、泣く。
一瞬、一輝はそう思ったが、彼女の目から零れるものは無かった――まだ。
「あの……あの、ね。わたしは、家族みたいなままでいたいの。変えたくないの」
弥生のか細い声に、ここが正念場だと一輝は悟る。彼女が欲しがっている言葉を与えることは簡単なことだ。しかし、それでは、自分の望む形で彼女を手に入れることは、決して叶わない。
「僕は、変えていきたいです」
弥生が意味を取り違えないように、真っ直ぐにその目を覗き込んではっきりと伝える。びくりと彼女の身体が震えたが、一輝は留まらなかった。

「あなたは僕を『弟』のままにしておきたいかもしれないけれど、僕はそれでは嫌です。あなたも、本当は僕のことを『弟』なんて思っていない筈だ。僕は、一人の女性として、あなたに僕の隣に立っていて欲しい――今までも、『姉』だなんて思ったことはなかった」
一輝が言い切ると同時に、弥生の目から堪えていたものがボロボロと溢れ出す。彼女の涙は胸を締め付けるような苦しさをもたらしたが、ここで止めてしまえば永遠に変わらないままだ。
「あなたが何かを不安に思うなら、それを解消するのは僕の役目だ。教えてくれれば、何でもする……何でもできる」
「……メ、ダメ。違うの。ダメなのは、わたしなの。わたしじゃ、一輝君の隣には立てないの」
「何故？」
「わたしが、こんなだから。わたしは、わたしだから。変われないから。あの人みたく、一輝君に似合うようには、なれないよ」
『あの人』というのが誰のことを指しているのかは、すぐに判った。だが、一輝はあんな女は望んではいない。
「僕が望むのは、今のあなた自身だ。このあなた以外のあなたなど、欲しくない」
「でも、ダメだよ。ダメなんだよ。もっと、ちゃんと似合う人じゃないと、ダメ……」
弥生が初めて見せる、嫉妬と劣等感。
彼女にそんなものを抱かせたくはなかった――それは紛れもなく一輝の中にある本当の気持ちだ。だが、その一方で、彼のためにそれらを覚えた弥生が、どうしようもなく愛おしくなる。
衝動的に小さく華奢な身体を引き寄せ、腕の中に閉じ込める。かつて抱き締めた時とは違い、自分の中にすっぽりと包み込めてしまう。彼女がしゃくりあげるたびに伝わる震えも、胸元を濡らす涙も、甘い髪の香りも、何もかもが狂おしいほど、愛おしい。
気付けば、嗚咽を漏らす彼女の小さな唇を、自分のそれで塞いでいた。

柔らかな彼女の唇はたとえようもなく心地良くて、どんなに味わっても足りない。彼女が息を求めた隙に口付けを深めると、華奢な全身がビクリと震えた。
彼女の甘さを味わって、いったいどれだけの時間が経ったのか、いつしか弥生の嗚咽も震えも止まっていた。力を失った身体の儚い重みが一輝の腕にかかっている。唇を放し、彼女の耳元でもう一度囁く。
「僕が欲しいものは、あなただけだ。あなた自身と、あなたの幸せが、欲しい」
その言葉とともに彼女の身体がふるりと震え、意識は失われていないことを一輝に知らせる。手放し難くしばらく抱き締めていたが、フッと息をついて、自律する。そのまま彼女を抱き上げ、アウディの後部座席に乗せた。
「僕は決して諦めない。四年越しの想いを甘く見ないように」
宣言するようにそう囁いて、一輝は身を屈めると、ぼうっと見上げてくる弥生の頬に口付けた。そして静かにドアを閉める。
最後ににこりと彼女に笑いかけ、車の向こう側から固唾を飲んで成り行きを見守っていた橘に歩み寄る。
「彼女を送ったら、迎えに来てくれ」
何か吹っ切れたように晴れ晴れとしている一輝に、橘は複雑な顔をする。
「坊ちゃま……初心者にあれは、ちょっと……」
「でも、落ち着いただろう？」
一輝は悪びれた様子もなく、そう言う。どちらかというと、『落ち着いた』というよりは『放心した』という表現の方が正しいのではないかと橘は思ったが、口には出さなかった。頭を一つ振って、切り替える。
「では、弥生様をお返ししたらすぐに戻りますので、こちらでお待ちになっていてくださいね」
そう言い置いて、橘は後部座席に乗り込んだ。呆然としている弥

生に何か言おうかと思ったが、しばし迷って、もう少し彼女の中で整理がつくまでそっとしておくことにした。
「弥生様……？」
車を走らせてしばらくしてから、橘はそっと弥生に声をかける。弥生はまだ熱に浮かされたような眼差しを、彼に向けた。
「お話、できますか……？」
いくらかの間は要したが、やがて弥生がコクリと頷く。
「では、ですね、一智様と――一輝様のおじい様と、どんなお話をなさいましたか？」
弥生はちらりと橘を一瞥し、また目を伏せる。膝の上の両手を、じっと見つめた。
「弥生様？」
もう一度促され、何度か躊躇った後にようやく彼女は口を開く。
「結婚は、温かい家庭よりも、会社のためにしないといけないから、一輝君のお相手には、隣に立ってお似合いの人じゃないと、って……」
「それは、見た目が、ということですか？」
怪訝な顔で橘に問われ、弥生は頷く。少なくとも彼女には、そういう意味に取れた。
「……おかしいな。いったい、何を考えていらっしゃるんだ、あの方は？」
眉をひそめた橘の呟きは、弥生にはよく聞き取れなかった。
「え？」
首を傾げる弥生を、橘は笑ってごまかす。
「いえ、何でもありません。で、それをお聞きになって、弥生様はどう思われました？」
「わたしは、結婚は幸せな家を作るためにするんだって、思ってました。でも、一輝君とわたしとでは、背負うものが違うから……。わたしの考える幸せと、一輝君にとっての幸せって、違うんですよね」

「でも、一輝様が心の底から弥生様を求めていらっしゃることは、よくお解りいただけたでしょう？」
橘の言葉に、先ほどのことを思い出して弥生の頬が赤く染まる。頬にキスや、ギュッと抱き締められたことはあった。でも、あんな――。
赤くなった両頬に手を当てて俯く弥生を見つめ、これは充分すぎるほど脈があると橘は確信する。
「一輝様にされたこと――お嫌でしたか？」
橘の問いに、しばらくは反応がない。が、やがて、弥生は、頬を手で包んだまま、ゆるゆると首を振った。予想はしていたが、本人からもらえた反応に、橘はホッと笑みを漏らす。
「では、一輝様のことを、考えてみてもらえませんか？　一輝様には、しばらく時間を差し上げるようにお伝えしておきますから」
「でも、おじいさんは……」
「取り敢えず、一智様の言葉は忘れておいてください。あなたがどうしたいのか、あなたが思う一輝様の幸せがどんなものなのか――それを考えてみて欲しいのです」
――わたしから見た、一輝君にとっての幸せ……？
橘に言われ、弥生は考える。
今まで、一輝にとって一番大事なのは『新藤商事』だと思っていた。初めて出会った頃から、彼の生活の多くを占めているのはそれだったし、大きな企業を背負うことに対して、彼が努力し、悩んできたことを見てきたのだから。
――『新藤商事の立派な総帥』であることが、一輝君にとっての幸せではないの？
『新藤商事』なくして一輝を考えることはできないだろう。けれども、ただ、一輝のことだけを思えば、彼の幸せはどこにあるのだろうか。
「一輝君自身の、幸せ……？」
ポツリと呟いた弥生に、もう橘は声をかけることなく、黙って彼

女を見守っていた。

三

一輝の祖父、一智と会ってから、一週間。
一輝からは、毎日花束が届く。
それはピンクの薔薇であったり、可愛らしいチューリップであったり、見たことのないようなフワフワした花だったり――誰か人任せにせず、彼自身が弥生のために選んだことが伝わってくるものばかりだった。
毎日送ってくることが前提な為か、一つ一つは小さいものばかりだ。けれども、弥生がマメに水切りなどをしているためかとても日持ちがよく、最初にもらったものもまだ瑞々しいままの姿を保っている。
「姉ちゃん、また来たぜ」
そう言って睦月が持ってきたのは、ひまわりがメインで黄色を基調にした、見るだけで気分が明るくなるような花束だ。
弥生は添えられたカードを見つめる。
――あなたに会いたい。
いつも、書かれているのは一言だけ。けれど、その一言が、弥生の胸を苦しくさせる。
――もう少し、もう少し待ってね。
あれから、ずっと考えている。
考えて、考えて……この迷いから、あと一歩で抜け出せそうな気がする。
『新藤』を背負う一輝の幸せは、隙を見せず、誰からも一目置かれる『新藤商事の総帥』でいることにあるのかもしれない。でも、『新藤』ではない、ただの一輝だったらどうだろうか。昔、短い間でもここで過ごしていた一輝は、幸せだったに違いない、と弥生は信じている。
『新藤』一輝も、『ただの』一輝も、どちらか一方だけでなく、

どちらも同じように幸せにすることが、自分にはできるのだろうか。
そう、弥生は自問する。
答えは、まだ、見つからない。

＊

弥生が答えを探し求めていた頃、新藤商事の執務室では、まるでヤニが切れたニコチン中毒者のように、総帥がジリジリと落ち着きをなくしていた。
弥生に会いに行かないようにしてから、一週間。
それまでは三日と空けず、何かと理由をつけては、少なくとも顔だけは見に行っていたのだ。
「そろそろ、行ってみてもいいのではないかな……」
ぼそりと呟いた一輝に、橘が首を振る。
「まだです。弥生様の方から会いに来られるまで、辛抱のしどころです。いずれ必ず、いらっしゃいますから」
橘は断言するが、一輝には確信が持てない。
弥生自身が「自分が辛いから」と離れていくことは、ないと思っている。
困るのは、「一輝のために」と離れていってしまうことだ。もしも彼女がそんなふうに迷っているのならば、今すぐ傍に行って抱き締め、自分がどんなに弥生を求めているかと説得するべきではないだろうか。
あの後、祖父を問い詰めてみても、あの狸じじいは全く手の内を明かさなかった。彼が何かを仕組んでいることは間違いないというのに。
いったい、一智は弥生にどんなことを吹き込んだのか。
それさえ判れば、手の打ちようがあるのだが。
日毎に増えていく溜息を今日も深々と吐き、一輝はデスクに向かう。

いくら気分が沈んでいても、それと総帥としての自分とは別の話だ。
いつもどおりに職務をこなし、案件を片付けていく。むしろ、仕事に集中している方が余計なことを考えなくて済む分だけ、楽だった。
そろそろ昼休みになろうかという時、秘書から面会の希望者がいるとの連絡を受ける。
「アポイントメントは入っていなかったのですが……」
橘が首を傾げながら手帳を確かめた。
「どちらの方だ？」
一輝がインターホン越しに秘書に問うと、彼女は困ったような声で返す。
「それが……名前を仰らないのです。ただ、一輝様は会うことを望まれる、と……。……女性の方なのですが……」
そこまで聞いて、一輝の中に「もしや」という期待が溢れてくる。
――弥生かもしれない。
普段、弥生がここに出入りする時は橘が連れて上がってくるため、秘書を介したことがないのだ。秘書は弥生を知らず、弥生も何と言ってここに繋いでもらったらいいのか判らないのかもしれない。
弥生を待ち焦がれるあまりに真っ当な判断能力を欠いていた一輝は、つい、己の望むように解釈してしまった。
「ここへお通ししろ」
「一輝様、ちょっと、お待ちを」
「いい」
咄嗟に遮ろうとした橘を手で制し、一輝は秘書に指示を出す。
期待に満ち満ちて立ち上がった一輝だったが、やがて姿を現したものを目にした途端、このビルの屋上から地下駐車場まで落とされたような落胆を味わった。
「園城寺さん……」
姿を見せたのは、園城寺薫子――すらりと長身で目の覚めるよう

な美しさを誇る、だが、一輝にとっては諸悪の根源でしかない女性だ。祖父に言われて何度か食事をしたが、例の件もあって、もう二度と会うつもりはなかった。
「一輝君、なかなか声を掛けてくださらないから、会いに来てしまったわ」
鼻から抜けるような甘ったるい声でそう言いながら、腰を優雅に振りつつ一輝に近寄っていく。
「まだ、仕事中ですので」
氷よりも遥かに冷たい声音に気付いていないのか、薫子は多くの男性が蠱惑的と受け取る笑みを浮かべる。腰に置かれた手が、くびれを強調させた。
「あら、いやだ。でも、もうすぐお昼の時間でしょう？　お待ちしておりますから、ランチに行きましょうよ」
彼女が単なる新藤商事の権力に群がる女性たちの一人であるだけならば、さっさと追い返していただろう。だが、一智の肝煎りとなれば、そうはいかない。
「申し訳ありませんが、まだ当分かかります」
「じゃあ、先に食事を済ませましょう。ランチが美味しいフランス料理のお店があるのよ」
そう言いながら、薫子は、ささくれ一つない綺麗に整えられた指先で、一輝の頬をたどる。自信に満ち満ちた眼差しは、よもや自分が断られようとは、微塵も思っていないようだった。
「ほら、行きましょう」
薫子が誘うように一輝の肩に腕を絡ませる。
その瞬間。
堪えに堪えていた苛立ちが限界を超える。
「放していただけますか」
これ以上はないというほど、冷え切った声。
出会って以来、薫子は何度か一輝と食事をともにしていたが、この年下の少年は、いつでも穏やかで礼儀正しかった。彼女ほどの女

性が迫れば、『思春期の男の子』など、すぐに落とせると思っていたのだ。
薫子はドライアイスにでも触ってしまったかのように思わず手を放し、一歩後ずさる。彼女に向けられた一輝の眼差しは偽りの温かさを消し去り、まるで物を見るようなものとなっていた。
「あたくし……何かお気に障るようなことをしてしまったかしら……？」
適度な媚を含ませた目で、掬い上げるように一輝を見つめる。たいていの男性は、これでイケる筈だ――筈だった。
だが、一輝の視線は。
「私には、あなたをつまみ食いする気はありません」
それは、『お前に本気になるつもりはない』というあからさまな意思表示だった。
「あたくしは、おじい様の……」
「祖父は関係ありません。私は、共に過ごす女性は自分で選びます――それは、あなたではない」
先日食事をした時、新藤一輝という少年は、薫子が見つめれば甘い微笑を返してくれていた。この、今目の前にいる男は、本当に同じ人物なのだろうか。
一輝の、薫子に向ける視線は冷ややかだ。
だが、何故か、薫子は甘い笑みを向けられていた時よりも、身体の奥が熱くなるのを感じる。
――この男を落としたい。
一智からその孫を紹介された時は、ただ『新藤商事』の莫大な財産を手に入れることができればいいと思っていた。自分の美貌は自負していたが、それが永遠のものではないことも理解していたからだ。この容姿を餌にして、一生が保障されるようなものを得る必要があったのだ。
穏やかで甘い男など今までいくらでも手に入れてきた薫子にとって、一輝は財産のおまけに過ぎなかった。しかし、この怜悧な一面

を見せられて、この男を自分が熱くさせる場面を考えた――ぞくぞくしてくる。
「ごめんなさい。お邪魔しちゃったのね？　また日を改めるわ」
「いいえ、必要ありません。もうお会いすることはありませんから」
薫子は殊勝な態度に作戦を変更してみたが、一輝は取り付く島もない。
「そんな……まだ、あまりお話もしていませんわ」
少し哀れっぽさを足す。目も潤ませて。
しかし。
「特にお話しすることはありません」
一輝の眼差しが表すもの――それは、無関心。
この男は、自分に対して何の興味も持っていないのだ。そして、これからも持つ気がない。あの甘い態度は『演技』に過ぎなかったのか。
それを悟ると、薫子の中に込み上げてきたのは激しい屈辱感だった。
男性は、すべからく自分の美しさを賞賛すべきなのに。
わなわなと身体を震わせ、柳眉を逆立てた薫子は、それでも美しい。だが、一輝の心を動かすものではないのだ。
大輪の深紅の薔薇のような薫子を前にしても、一輝の心が求めるのは小さなタンポポのような弥生だけだということを、彼女は知らない――知っても、理解できないだろう。
「さあ、仕事がありますので、お引取りいただいてよろしいでしょうか？　橘、ご案内を」
橘に促されるまでもなく、薫子は険しい眼差しで一輝を睨むと、消音カーペットであるにも関わらず足音を立てそうな勢いで、部屋を出て行く。
「どうやら、案内は不要なようだな」
澄ました顔でそう言った一輝に、橘は渋い顔を向ける。
「一輝様……あの手の女性は、もう少し扱いを慎重になさらないと

……」

「願い下げだ。あの馴れ馴れしさと香水臭さには、いい加減、うんざりしていたんだ。そもそも、弥生さんとの関係がこじれてしまったのも、あの女の所為だろう。これ以上、付き合ってやる義理はない」

いかにも「清々した」と言わんばかりの一輝に、橘は諦めたように首を振る。まあ、一輝もこの件ではかなり鬱憤が溜まっていたようであるから、仕方がないのかもしれない。

だが、様々な人生経験を経てきた橘には、あの女性が更なる厄介事を持ち込む予感がしてやまなかった。あの手は、恨みを買うと何をされるか判らない。

色々と気を配らなければならないと、橘は頭を巡らせた。

四

「行ってきまぁす」「行ってくらぁ」
葉月と睦月の元気な声が玄関で響く。
「行ってらっしゃい。あ、ちょっと待って、睦月、お弁当！」
つっかけサンダルを履いて、弥生は大声を上げながら睦月を追いかける。
平凡な、朝の風景。平凡だけれども、弥生にとっては幸せな、風景。
――これが幸せでは、いけないの？
あれから、何度も考えたことをまた考える。
――一輝君にとっての幸せのカタチは、どんなもの？
一輝に最も近い一智は、会社のために生きることが彼の幸せだと言った。
弥生にとっての幸せは、家族を家で休ませ、また元気に送り出せることだ。
――この二つは、一緒には成り立たないものなの？
弥生が幸せだと思うことは、一輝にとってはどうでもいいことなのだろうか。
切実に、知りたいと思った――一輝にとっての幸せを。
一智に現実を突きつけられたあの日から、もう十日が経った。その間、毎日花束は届けられている。けれど、これほど長い間、一輝の顔も見ず、声も聞かずに過ごすのは、彼と出会って以来初めてだった。
「会いたいな」
ポツリと呟くと、その想いが胸から溢れてくる。
「会いに、行こう」
声にすると、もう、居ても立ってもいられなくなる。
弥生は、携帯電話を握り締めた。

＊

電話を受けている橘が、笑顔になる。

一輝は、何をそんなに喜んでいるのかといぶかしみながら、彼が電話を終えるのを待った。それほど間をおかずに橘は電話を切ると、主人に向けてニッコリと笑いかける。

「朗報ですよ」

「どんな？」

正直言って、今の一輝にはどんないい話でもどうでもいいことだった――弥生のことを除いては。

「おや、あまり興味がおありではないようで」

ニヤニヤと、橘が人の悪い笑顔になる。

「だから、何なんだ？」

「だから、朗報です――弥生様がいらっしゃいますよ」

「何！？」

思わず、一輝は立ち上がる。しかし、来るというだけでは、どんな結論になったのかが判らない。

「他には、何と？」

「他に、ですか？　さあ、ただ、今日、一輝様にお会いになりたいとだけ……」

ようやく会えるという嬉しさが、一輝の中でむくむくとこみ上げてくる不安と入れ替わっていく。

――もしかしたら、もう会わないつもりなのかも……。

新藤商事総帥としての一輝は、常に自信に満ち溢れている。迷いや不安などとは無縁だった。しかし、弥生のこととなると、絶対に大丈夫だという確信が持てない。

「何時に来てくれる、と？」

「業務が終わる十八時にお願いします、とお伝えしましたが」

今は朝の八時――まだ半日近くもあるのか、と一輝は落胆を隠せ

ない。
この十時間を鋏で切り取って捨ててしまえるものならば、一輝はそうしただろう。
その日の一輝の仕事に対する熱意は、いつにもまして、周囲の者を驚嘆させたのだった。

＊

その視線は、終始、大学生とは思えない容姿のその娘のことを追いかけていた。絡みつくようなそれは、彼女の一挙手一投足を観察する。
視線の主――園城寺薫子は、本当にその娘が目当ての人物なのだろうかといぶかしむ。しかし、雇った男からの報告では、確かに新藤一輝は何かと都合をつけてはその娘に会いに行っていたということだし、ここ二週間ほどは、直接会うことはないものの、連日花を贈っているとなっている。
自分が女としてあんな子どものような娘に負けたとは思えない。しかし、新藤一輝にとって、何がしかのウェイトを占めていることには間違いはないのだろう。
新藤一輝から屈辱的な対応をされてから、一週間。
薫子は躍起になってあの少年の弱点を探した。依頼した探偵事務所は、両手の指でもまだ足りない。しかし、それだけしても、役に立つような報告を持ち帰ったのは一社のみ――見つけられた『隙』はあの大石弥生という娘だけだった。
ごくごく平凡な娘。見てくれも、生活も。
大分前に母親を亡くし、この娘が母親代わりをしているようだが、全然不幸そうではない。大石家からはいつも笑い声が聞こえてくる。
その笑い声を聞くと、薫子の胸に何かチリチリと焼けるような感覚が滲み出てきたが、それが何なのかは解らなかった――解りたくもなかった。

娘が男女の友達らしき二人組みに声を掛けられて振り向き、笑顔になったのが見えた。心から嬉しそうなその笑顔が、無性に気に障る。

何の取り柄もないくせに、一輝に関心を向けられて、あんなに――。

あの弥生という娘が、どれほどの役割を果たしてくれるものなのか。

もしかしたら、一輝にとって、何の影響も与えないのかもしれない。

それでもいい、と薫子は思った。

あの娘が、二度とあんな笑顔を浮かべられないようにしてやれるなら、それはそれで胸がスッとするに違いない。

そして、また次を探せばいい。

物を見るように自分を見たあの少年の表情を、ほんの少しでも動かすことができるならそれでよかった。

計画は立てた――後は実行に移すのみ。

薫子は、獲物を狙う猫のように、チロリと唇を舐めた。

五

――何故、こんなことになっているのだろう。
目の前には、圧倒されるような長身の美女――園城寺薫子。
週刊誌で一輝と一緒に写っていた女性の筈だが、当然のことながら、弥生と薫子の間に接点は一つもない。きれいだけれどもとても怖い眼差しで見下ろされ、弥生はこの女性にこんなふうに見られる理由を、混乱する頭で懸命に考えた。
けれども、弥生に答えが見つけられる筈もない。そもそも、完全なる薫子の逆恨みなのだから。
「あ……の？」
弥生は恐る恐る薫子に声をかける。
ここに至るまでの経緯は、あれよあれよという間のことだった。
大学が終わり、一度家に帰って夕食の支度をした。電子レンジで温めるだけの状態まで整えて、もう一度自分の気持ちを確かめてから、一輝のもとへ向かうために家を出た。
橘は迎えを手配すると提案したが、弥生は断った――その方が、気持ちが落ち着くだろうと思ったからだ。
バスと電車を乗り継いで、新藤商事本社の最寄り駅で降りて。
一輝が待つビルを見上げて深呼吸をしたところで、後ろから声をかけられた。
振り向いた先にいたのが、この女性で。
いぶかしむ間も無く、サッと近寄ってきた車の中に引っ張り込まれて。
――一輝のことで話があると言われた。
そう言われると無下にもできず、約束があるから、と一輝に連絡を入れるために携帯電話を取り出したら奪われ、電源も切られてしまった。
そうして今、このホテルの一室に、園城寺薫子と二人きりでいる

羽目になっている。
「あの、それで……？」
もう一度、弥生は薫子に声をかけた。
じっとりと、獲物を呑み込もうとする蛇のような、薫子の眼差し。
不意に、彼女が笑みを浮かべた――が、その笑みは見る者の心を寛がせるものではない。
「あなた、新藤一輝とどんな関係なの？」
「え……？　一輝君？」
「そう、新藤一輝。彼って、素敵よね。十五歳なのに、物凄い財産を持っていて、クールで……素敵だわ」
弥生には、この女性がいったい何を言いたいのかが判らない。一輝を褒めている台詞なのに、目は冷ややかで――そこに潜むのは怒りだろうか？
「あたくしはね、彼と結婚する筈だったのよ。彼のおじい様が紹介してくださって。彼を落とせたら、あたくしを新藤家に入れてもいいとおっしゃったのよ」
「一輝君のことを……好きなんですか？」
「好き？　そんなこと、どうでもよかったわ。新藤家の財産がどれほどあるのか、知らないの？　あれのためなら、何だってするわよ」
「……財産」
「そう。あたくしは美しいわ。けれど、死ぬまでこうではいられない。だから、これを武器に、死ぬまでの保障を手に入れようと思ったのよ」
それなのに、と薫子は憎々しげに吐き捨てる。
「あの坊や、あたくしのことを馬鹿にして！　腹が立ったから、ちょっと虐めてあげようかなって、思ったの」
うふん、と鼻を鳴らして笑うさまは蠱惑的でもあったが、言っている内容はそこはかとなく物騒だ。
しかし、弥生は、薫子の台詞の後半よりも前半に、より強く反応する。

「一輝君とお付き合いしたのは、お金のためだったの……？」
弥生のその問いに、薫子が目を丸くする。
「当たり前じゃない。そりゃ、彼自身も素敵だけれど、もっと素敵なのは彼が持っているモノよ？」
「……結婚したら、一輝君を幸せにしてた？」
「幸せ！　当然よ。男はみんな、あたくしで幸せになるわよ？　この身体で」
「からだ……？」
「そう、もう、天国のようだって、みんな言うわ」
何だか、微妙に会話が食い違う。
「それって、『からだ』のことだけなの？」
「そうよ。男と女の間にあるのは、それが一番でしょ。彼はあたくしの身体で楽しめる。あたくしは彼のお金で楽しめる。ほら、お互い幸せじゃない」
――それが本当に、一輝君にとって幸せなの？
弥生は自問し、首を振る。とてもそうは思えなかった。
「違う、違うよ。それは『幸せ』なんかじゃないと思う」
「まあ、何が？　あなた、シたこともないんでしょ？　てんで、ガキ臭いもの。どんなに男が悦ぶか、知らないくせに。一輝クンだって、同じよ」
「でも……そんなの、全然幸せそうじゃない。あなただって……」
「うるさいわね！」
言い募る弥生に、蕩けるような顔をしていた薫子が、豹変する。そのあまりに唐突な変貌に、思わず弥生は息を呑んだ。ギラギラとした目が向けられて、今すぐにこの場から逃げ出さなければ、何かが起こると直感した。けれど、わずかに身を引いた弥生の腕を、薫子がしっかと掴む。
「あんたに何が解るのよ……いいわ、もう。最初は、アイツに仕返ししてやりたいだけだったけど、あんたもムカつくもの。滅茶苦茶になっちゃえばいいのよ」

「え……？」
弥生は薫子が何を言っているのか解らず、おろおろと見上げるだけだ。薫子はそんな彼女を引きずって歩き出すと、続き部屋へのドアを開ける。その先は寝室で、クイーンサイズのベッドが置かれており、中には三人の男が思い思いに座っていた。
「ほら、この子よ。好きにして」
そう言いながら、薫子は投げ出すようにして弥生を放す。
よろけて膝を突いた弥生を、ゆっくりと立ち上がった男たちが取り囲んだ。明らかによくない雰囲気に、弥生は逃げ道を探すが、三人がほぼ等分に立っておりすり抜けるのは難しそうだった。
「へえ、ちっちゃいな。でもふにふにしてそうじゃん」
「あ、俺は小さい方がいいや」
「抑え込みやすいけどな、俺はもうちょっと……」
男たちは好き勝手な言い様だ。見下ろしてくるあからさまな捕食者の目付きに、弥生は自分がネズミにでもなったような気がしてくる。
不意に、彼らのうちの一人が手を伸ばし、弥生の腰を鷲掴みにする。
「ほそーい。かるーい」
茶化すように言いながら彼女をヒョイと持ち上げると、男はそのままベッドの上に放り投げた。
「……っ！」
思わず目を閉じ、再び開けた時、弥生の視界は覆いかぶさる男で塞がれていた。
「ほら、おとなーしくしてたら、気持ちよくさせてやるからさ。暴れると、痛いよう？」
男が何をしようとしているのか解らないほど、弥生も無知ではない。自分に向けて男の手が伸ばされた時、弥生は声にならない声で、たった一人の名前を呼ぶ。
――一輝君！

何故、その名前が出たのかは判らなかった。
けれども、弥生が助けを求めて呼んだのは、その名前だけだった。
それに応じるように。
「君たち、その人から離れてもらえるかな」
この上なく穏やかでいて、聞く者の心を凍りつかせる声が、部屋に響き渡った。

＊

十八時まであと十分。
いつもより早く仕事を終わらせた一輝は、執務室の中を三十分以上はウロウロと歩き回っていた。
「一輝様……少し落ち着かれたらいかがですか？」
呆れたような声で、橘が声を掛ける。だが、これから抜け殻のように生きていく破目になるかどうかの瀬戸際に、落ち着いていることなど一輝にはできなかった。
「弥生さんはまだかな……」
彼の言葉を無視してそう呟いた一輝に、橘は溜息をつく。だが、常に冷静沈着な主人が、たった一人のためにオロオロするさまを眺めるのは、決して嫌ではない――むしろ楽しかった。
と、その時、橘の胸ポケットに入っている携帯電話が振動した。そこからの報告をじっと聞いていた橘の顔が、徐々に硬くなっていく。通話が終わり、携帯電話を閉じると、彼は一輝に今耳にした事実をそのまま伝えた。
「園城寺薫子が、弥生様を連れ去った模様です」
「はぁ？」
咄嗟に、一輝は間の抜けた声を返してしまう。『園城寺薫子』と聞いてもすぐには誰のことなのか思い当たらず、認識するまでに一拍を要した。
「ああ、あの女か。彼女が、何をしたって？」

「このビルの近くで、限りなく弥生様の外見に合致した女性を車に引っ張り込み、走り去ったそうです」
「いったい、誰からの報告なんだ？」
「この間の様子が気になったので、園城寺薫子に見張りを付けていたんですよ。よもや、弥生様を狙っていたとは……」
橘は舌打ちをしたが、見張りが弥生のことに注意を払わなかったのも無理はないかもしれなかった。一輝と弥生のつながりは完璧に隠されており、薫子が平凡な女子大学生を気にしていたからといって、それが一輝に関わることだとは思わなかったのだろう。
「彼女の行動は全て報告するように指示していたのですが……私のミスです」
「そんなことはいい！　すぐに探さないと！」
一輝は色を失うと、携帯電話を開き、操作する。画面には、地図と移動する点が映し出された。
「実際に使う必要に迫られるとは、思いませんでしたね」
「……ああ。念の為、だったんだがな」
画面上の点は、弥生の位置を知らせるものだった。以前に贈ったネックレス、あれには超小型の発信機を忍ばせてあったのだ。
一輝がマスコミに取り上げられるようになって、どんなに細心の注意を払っていても、弥生のことに気付かれるだろうことは時間の問題になった。一輝が心にかけていると知られれば、営利目的の誘拐の対象などにもなりかねない。それを案じて持たせておいたものだったが……こんなことで使うことになろうとは思わなかった。
「すぐに車を用意しろ。追うぞ」
「は、直ちに！」
橘と共に地下駐車場に向かいながら、何度も携帯電話を確かめる。点はまだ地図の上を動いていた。車の中で弥生に危害が加えられる可能性は低いと思われたが、それでも一輝の心の中には不安がこみ上げてくる。
普段は気にならない高速エレベーターの降下速度が、妙にゆっく

りと感じられた。この、馬鹿げたほどの高層ビルが腹立たしい。
地下駐車場に着くと、すでに用意されていたアウディに乗り込む。地図の中の点は静止しており、場所を確認すると『帝王ホテル』とあった。
「帝王ホテルか……」
順調に走れれば、一五分もすれば着くだろう。だが、そのたった一五分の間に弥生がどんな思いをするかと思うと、園城寺薫子という女をこの手で絞め殺してやりたくなる。
「一輝様……」
触れたら切れそうな空気を漲らせている一輝に橘が気遣わしそうな声を掛けたが、彼は気付かなかった。
結局帝王ホテルに到着したのは二十分後で、一輝の苛立ちは最高潮に達していた。真っ直ぐにカウンターに向かうと、フロント係を冷ややかに見据える。
「ここに、園城寺薫子という女が部屋を取っているだろう？」
フロント係はその眼差しの鋭さに一瞬息を呑んだものの、そこはプロフェッショナルというもので、すぐに気を取り直し、にこやかに答える。
「大変申し訳ございませんが、お客様の情報を……」
「ご託はいい。支配人を呼べ」
にべもなくぴしゃりと一輝が遮ると、その勢いに押され、フロント係はインターホンで支配人を呼び出した。
「間もなく、参りますので……」
言葉通りに、支配人は数分と待たせずに現われた。一輝を見ると、あたふたと足を速めて近づいてくる。
「これは、新藤様、今日はどんなご用件で？」
「園城寺薫子という名前の女が部屋を取っている筈だ。教えろ」
「申し訳ございません。お客……」
「それは、もう聞いた。いいから、教えろ」
遥かに年上の支配人が、一輝の眼光に押され、しどろもどろにな

る。
「教えないというのなら、私の持てる力全てで、このホテルを潰すぞ？」
一輝の威圧で支配人のプロ意識がぐらつき始めたところに、すかさず橘が入り込んだ。
「申し訳ございません。実は、ですね……その園城寺薫子という方は、不法行為を行う可能性が高いのです。このホテルでそのような不祥事が起きれば、そちらもお困りになるのでは？　コトが起きる前であれば、内々に片を付ける事も可能なのですが……」
一輝のムチと橘のアメで、支配人が迷い始めていることが見て取れた。橘は、もう一押しを加える。
「大丈夫、園城寺様も、コトが終わったら、きっと、何も仰いません」
ニコリと笑顔が説得力を与えた。
「――判りました。新藤様は、園城寺様にお呼ばれになったのですね？　では、部屋の鍵をお渡ししますので……お部屋は、二〇〇五室でございます」
差し出された鍵を、一輝は殆どひったくるようにして取り、踵を返してエレベーターに向かう。エレベーターの狭い空間の中には階数を上がるごとに一輝の怒りが満ちていくようだった。橘も車を運転してきたもう一人の護衛も、息を潜めて主を見守る。
一輝はエレベーター内の階数表示を親の敵のように睨み付け、二十階に着くと同時に開きかけたドアの隙間から擦り抜けるようにして降りると、真っ直ぐに二〇〇五号室を目指す。
鍵を使ってドアを開けると振り返った薫子が目を見張ったが、驚きのあまり声も出ないようだった。すかさず橘が押さえ込み、ハンカチで手首を縛り、猿轡をして、もう一人の護衛に渡す。その間にも、一輝は何やら下卑た声が聞こえてくるもう一つの部屋の方へ向かっていた。
一輝が目にしたのは、ベッドの上に四つん這いになっている男と、

その陰から見え隠れする、小さな身体。
「……気持ちよくしてやるからさ。暴れると痛いよ？」
男の下卑た声が耳に届き、一輝は、怒りのあまりに大声を出すこともできなかった。
「君たち、その人から離れてもらえるかな」
その押し殺した声に、部屋の中の者が皆一斉に振り返る。
「お、まえ、誰だ！？」
殆ど反射のように殴りかかってきた男を、一輝は右腕で受け流し、左拳を彼の鳩尾に叩き込む。反吐を吐きかけられる前に、放り投げた。それを見た、もう一人の立ち竦んでいた男が一輝に向かってくるが、脇を擦り抜けた橘がカウンターで蹴り飛ばす。男は二メートルほど吹っ飛んで壁に叩きつけられた。
「……すみません、力加減をし損ねました」
申し訳なさを微塵も感じさせない口調で、橘は謝った。そのまま、ベッドの上で弥生に被さったまま呆然としている最後の男の襟首を掴み、引っぺがすと、腹に膝蹴りを食らわせる。うずくまったところに肘を叩き込んだ。
一連の流れが過ぎ去るのに、五分とかからなかった。昏倒した男たちは、呻き声すらあげていない。
静寂の戻った部屋の中、ベッドの上では、弥生がぺたりと座りこんでいる。髪が乱れているせいもあってか、いつもより、更に幼く見えた。
一輝はゆっくりと近寄ると、彼女の腕を取り、子どもにするように抱き上げる。
背中をさすりながら揺らしてやると、その身体が震えだした。
「……ふっ……う……」
耳元で小さな嗚咽が聞こえ、一輝は腕に力を込める。
――この間は、同じ身体を自分本位な激情から抱き締めた。
今はただ、この小さな身体を、包み込んでやりたいとだけ思う。
「大丈夫ですよ。もう、大丈夫……」

一輝の囁きで箍が外れたのか、弥生がようやく声を出す。
「ふ……う……こわ、かった――こわかった、よ……」
「すみません。僕のせいでもあるんです」
一輝が苦い口調で言うと、フルフルと弥生の頭が振られた。
それが『謝るな』という意味だったのか、あるいは『一輝の所為ではない』という意味だったのか、一輝には判らない。ただ、『弥生に拒まれていない』ということだけは解った。
「僕が……護りますから……」
――だから、離れていかないで。
声に出さなかった祈りを聞き届けたかのように、弥生が何度も頷く。
お互いの肩に顔を埋め、温もりを確かめ合った。
いつまでもこうしていられたら、これに勝る幸せはないのに、と一輝は思う。
だが、その穏やかな時間を、憎々しげな女の声が打ち破った。
「ちょっと、何なのよ、あんた！」
振り返ると、猿轡を外されて、二人を爛々とした目で睨む薫子の姿があった。
下ろして欲しそうに弥生が身じろぎしたが、一輝は抱き上げる腕により力を込める。
「何なのよ！　その、だらけた顔！」
もう一度、薫子が叫ぶ。彼女の目の前にあるのは、相手を魅せようと微笑むのではなく、相手に魅せられて微笑む一輝の顔だ。自分には決して見せなかった表情に、薫子は羨望の混じった怒りをぶつける。
「あんた、おかしいんじゃないの！？　そんなガキ臭いチビの小娘のどこがいいのよ！」
口汚い言葉で罵る薫子に、普段の優美さは微塵もない。その言葉を受けて、一輝の腕の中の弥生がビクリと身を震わす。だが、対する一輝は、これ以上はないというほど甘い微笑を浮かべた。

「いいんですよ、弥生さんはこれで。こんなふうに腕の中にすっぽり入ってしまう方が、全部僕のもの、という感じがするじゃないですか」
　罵りに対して惚気を返され、薫子は唇を噛み締める。だが、彼女には、まだ手札があった。
「おじい様には、なんて言うつもり！？　あの方は、『新藤商事の総帥に相応しい妻』としてあたくしを選んだのよ！？」
　だが、それに対しても、一輝は鼻で嗤うだけだ。
「祖父の考えは、僕には関係ないことですね。元々、僕が新藤商事を背負おうと本心から決意したのは、彼女を幸せにするための武器にしようと思ったからですから。弥生さんが新藤商事の事を背負う必要は、全くないんです。このひとは、僕のことだけ考えてくれていればいいんですよ」
　言葉を失う薫子に、更に追い討ちをかけたのは橘だった。
「それに……大変、申し上げにくいことなのですが……一智様は、『新藤商事の総帥に相応しい妻』なんて、これっぽっちも考えていないと思います」
「どういう意味！？」
「実は……一智様の奥様――一輝様のおばあ様は、新藤家のメイドだったんです。その彼女を一智様が見初めて、ひたすら追いかけ回し、数年かけてようやく求婚に応じてくださったとか……」
　丸っきりの当て馬だったと思い知らされて、薫子は失神寸前である。これまで、多くの男を手玉に取ってきた筈の自分が、当て馬にされたとは、到底容認し難い事実だった。
　黙りこんだ薫子に、一輝が駄目押しを食らわす。
「あなたを、拉致、暴行教唆の罪で訴えたいところなんですよね。ちょっと鼻薬を嗅がせたら、もう少し何か付け加えられるかもしれません。やりようによっては、十年から二十年ぐらい、『別荘』に入っていてもらうことも可能かな」
　強気だった薫子が一気に蒼白になる。一輝の台詞を聞いて彼女を

振り返った弥生は、その打ちひしがれた様子に、どうしようもなく気の毒になってしまう。
「ちょっと、一輝君……何も、そこまでしなくたって……。結局、何もなかったのよ？」
「あなたにほんのわずかでも『何か』があったら、今頃、皆殺しですよ？　死体の五体や十体処分するのなんて、簡単ですから」
目に剣呑な光を浮かべてにこやかにそう言われ、それが冗談だと思いたくても、弥生には笑えない。
「……一輝君……ともかく、もう、いいじゃない。もうお終い、ね？」
涙も乾ききっていない顔で言われ、一輝は溜息をつく。あまり強硬に事を推し進めたら、むしろ怒られそうだった。
「仕方ないですね。弥生さんがそう仰るなら……。いいですか、園城寺さん？　今後、僕たちの前には姿を見せないように。とりあえず、そちらの男たちから言質は取っておきますから、もしもまた姿を見かけたら、何らかの手段は取らせていただきます。ご自身が平和に生きたかったら、僕たちには近づかないことをお勧めしますよ」
ニッコリと、今となっては何のありがたみもない笑顔でそう言われるが、薫子はそれ以上抗う気力は持ち合わせていなかった。
拘束を解かれて大人しく出て行く薫子を見送り、ついで、三人の男たちの意識を戻して引っ立てていく橘ともう一人の護衛を見送った。
部屋に残ったのは一輝と弥生だけである。
一輝はソファに腰を下ろすと、そのまま膝の上に弥生を乗せる。
「一輝、君……？」
「何でしょう？」
一輝は平然と笑顔を返してくる。
「あの、下ろしてもらえる、かな……？」
「イヤです」
「何で！？」

殆ど悲鳴のような声を上げる弥生を、一輝は楽しそうに見つめる。
「だって、この方が目線が同じになるし。このままでお話をうかがいたいですね。元々、僕に会いに来られる筈だったんでしょう？」
「う……でも、顔が、近いよ……」
「そうですね」
内心で、「これで十五歳なんて、絶対ウソだ！」と弥生は叫ぶ。けれども、話を終わらせない限りは解放してくれそうもなくて、覚悟を決めて口を開く。
「あの、ね……一輝君にとって、何が幸せなのか、教えて欲しいの」
決死の覚悟で言葉にした弥生を、まじまじと一輝が見つめる。
「僕の、幸せ……？」
「そう」
彼の顔には、『何を今更』とデカデカと書かれている。
「そんなの、あなたが隣にいてくれることですよ？　前にも言ったでしょう、『弟としてではなく傍にいたい』と。僕の隣にいて、あなたが幸せだと思ってくれるなら、それに勝る喜びはないですよ」
「……そんなことでいいの？」
「僕にとっては『そんなこと』ではないです。何しろ四年――いや、もう五年以上になりますから」
「五年以上？　でも、初めて会ったのって、一輝君が十二歳の時だよね？」
きょとんとそう言われ、一輝は苦笑する。
「僕が十歳の時、実はあなたに会っているんです。あなたは覚えていなくて当然ですよ。雨の日に傘を貸すなんて、いくらでもしてそうですから」
「わたし、一輝君に傘を貸したの？」
「そう。そして、その時僕にとって必要だったものをくれました。僕はあの日、恋に落ちたんです」
そう言うと、一輝は弥生の頬に、首筋に、ついばむようなキスを落とす。

「それから、あなたが元気で過ごしているか、見ていました――一歩間違えばストーカーですけどね。あの債務の事がなければ、僕は一生、こうしてあなたに触れることはなかったでしょう」
ある意味、僕にとっては幸運でした、と、今度は手を取り、指先に唇を触れる。
「一緒に過ごしているうちにどんどん気持ちが膨らんで、ただ見ているだけだなんて、できなくなって。――あの、あなたが僕の腕の中で泣いた時、僕はあなたを愛していると気付いたんです。あの時、あなたを護りたいと――幸せにしたいと、願いました。そして、本当に新藤商事を背負う覚悟ができたんです」
真っ直ぐに見つめられて、弥生の胸の中に温かいものが満ちてくる。
「わたしが幸せなら、一輝君は幸せになれるの？」
「そうです」
じゃあ、と弥生は心からの笑みを浮かべる。
「わたしは、一輝君を幸せにできるのね！」
笑いながら一輝を抱き締める。
そんな彼女を抱き締め返しながら、彼は弥生の耳元で囁く。
「あなたしか、僕を幸せにできる人はいません。それに、あなたを幸せにするのは、僕でありたいんです」
「わたしも、一輝君を幸せにしたいと思ってたの。多分、ずっと前から」
一輝は、長く望んできた温もりをようやく手に入れることができたことが、信じられなかった。だが、弥生は柔らかだけれども確かな力で、彼を抱き締めてくれている――その温もりは夢ではない。
一輝は彼女の身体に回した腕に力を込めた。
弥生が、自信に溢れた声で宣言する。
「わたし、一輝君を幸せにするわ、絶対」
そうして、二度目に交わした口付けは、優しく甘いものだった。

エピローグ

「どうだ、橘。俺の作戦はうまくいっただろう？　名付けて『雨を降らせて地を固める』作戦だ」

意気揚揚と自慢する一智を前に、橘は心の中で特大の溜息をついた。

今回は、この老人のお陰でえらい目に遭った者が多すぎる。

「一智様――ほどほどにしておいてあげましょうよ。どうせお互いに想い合っていたのですから、いずれはこの結末になる筈でしたよ？」

何も無理矢理ことを進めなくても、と言いたい橘だが、一智はすっぱり却下する。

「何を言ってる。そんなに待ってたら、ひ孫の顔が見られねぇじゃねぇか」

「ひ孫……見られない人のほうが多いんですよ？」

「俺は、見たいんだ」

まるで駄々っ子のようである。

この駄々っ子の手綱をとることができていたという伝説の奥方に、是非会いたかったと、橘は思う。

「気の毒だったのは、園城寺様ですよ。一智様に踊らされ、プライドをへし折られ、犯罪行為すれすれの事をしてしまい……。下手したら人生終わってますからね」

「ああ？　自業自得だろ、ありゃ。あの女の所為で一生を潰した男は多いぞ？　まあ、後でそれなりのモンは渡しとくがな。基本的には、金さえあれば満足できる女だよ、あれは」

あれだけ利用しておいて、全く悪いと思っていない様子の一智に、橘は少しゾクリとする。恐らく、こういうところは一輝もいずれ似てくるのだろうと思われるのだ。

目的を達成するためには手段を選ばない、冷酷非情な指導者――

それが、巨大な企業には必要なのかもしれない。だが、一輝には、知ってほしいこと、忘れて欲しくないものもたくさんあるのだ。その殆どは、弥生たちと出会うことで知ってもらうことができた。
橘は、そうやって一輝が手に入れたものを繋ぎとめるためのよすがが、必要だと思っている。
きっと、弥生がそれになってくれるのだろう。
彼女が一輝の傍にいる限り、大企業を形作るものは生身の人間であることを、忘れることはないに違いない。彼女の存在は、否応なしに人の温もりを、想いを思い出させるだろうから。
「それで、あいつらの結婚式はいつだって？」
橘の物思いを、一智の声が無粋に断ち切る。
「一輝様はまだ十五歳ですから、まだ三年は先の話です」
「はぁ？　そんなに待てん。先に子どもだけでも作るように言っておけ」
「弥生様もまだ学生です。当分は無理ですよ」
「いっそ、辞めさせちまうとか……」
「……一智様」
流石に聞き流すことのできない台詞に、橘は一智をジトリと睨む。
「あまり過ぎたことをなさるようでしたら、この橘、全身全霊をもって阻止させていただきますから」
橘の釘さしに、一智は苦笑いでごまかす。
橘は、今までずっと、一輝を護ってきた。これからは、一輝と彼を取り巻くものも護っていかなければならない。きっと、それはどんどん拡がっていくのだろう。
やりがいと喜びに溢れた職務に、彼は自身の一生を捧げるつもりだった。

エピローグ（後書き）

本文は、これでおしまいです。
サイドストーリーを書きたいな、とは思っているのですが……。
感想、お待ちしています。
お気に入り登録してくださった方、評価してくださった方、ありがとうございます。

プロローグ（前書き）

一輝のお祖父さん、一智の話です。ハッキリ言って、ダメ男です。
彼の成長（２０代後半ですが）を見てあげてください。
書きながらの投稿なので、連載のペースはゆっくりかもです。

プロローグ

「俺は、本当は船乗りになりたかった」

私の主人が、そう言ったことがある。私が彼付きのメイドになってから、それほど日が経っていない頃だった。

ベロベロに酔っていたし、そんな内容だったから、本気かどうかは判らなかったけれど。

もしかしたら、身に余るほどのものを背負わされることが辛いのかな、とか、深読みしたりして。

次の日の朝、主人に「船乗りになりたいのですか？」と訊いてみたら、「なんだそりゃ」と笑い飛ばされた。

やっぱり、ただ酔っていただけだったのかも。

でも、あの時の彼の眼差しは、今でも忘れられない。

彼に「何かしてあげたい」と思ったのは、後にも先にもあれっきり。

船乗りになりたいというのなら、この家から逃げ出す手助けをしてもいいとすら思った。

時々、主人の目の中に同じ色が見えることがないか捜してみるけれど。

隠しているだけなのか、それとも、あの時限りの気の迷いだったのか。

――まあ、ある意味、港ごとに違う女がいる船乗りのような人だけれどもね。

1

高校を卒業した春、春日百合<かすが　ゆり>は母の瑞江<みずえ>から一智<かずとも>付きのメイドになってくれないかと頼まれた。

家政科のある専門学校に通う予定だったのだけれども、母からどうしても、と言われたのだ。一智は新藤商事の跡取りなのだが、どうにも締まらない人物らしい。大学を卒業して三年になるというのに、まだ仕事に身を入れるわけでもなく、毎日ダラダラ過ごしているという。

特に困っているのが――。

「坊ちゃまは男振りが良くて、しかも財産をお持ちでしょう。もう、女性が放っておかなくて……。坊ちゃま付きにすると、みんな目の色が変わっちゃってね。この間は母親ほどの年の人にしてみたんだけど、『これ以上お傍にいられません』と辞めてしまって……。流石に、坊ちゃまの方から使用人に手をお出しにはなることはないのだけど……。いつかは間違いが起きそうで。いっそお世話をする人を男性にしてしまおうかと思っても、坊ちゃまはそれはイヤだとおっしゃるし」

瑞江は二十五歳にもなる一智を未だに『坊ちゃま』と呼ぶ。彼が小さい頃から屋敷のメイドとして働いているから、自分の子どものような感覚でもあるらしい。

溜息をついた瑞江は、しみじみと百合を眺める。

「あんたは……しっかりしているし、大丈夫だと思うんだよね」

多分、瑞江としては『しっかりしている』という点の他に、百合の容姿も考慮に入れたのだろう。親の欲目を入れても、百合は平凡を絵に描いたような娘だ。ストレートの黒髪、目も鼻も唇も『普通』。体型も、どちらかというとややふっくらだが、『普通』だ。メガネをかけているので、特に生真面目そうに見える。産まれてこの方

十八年、男性に熱を上げたことも、男性から告白されたこともない。
――百合としても、別に男性にもてたいという気持ちは皆無なので、容姿を気にしたことはなかったが。
「頼むよ」
母一人子一人で育てられ、百合としても母がそこまで頼むのならば、是非とも協力してあげたい。
「わかった、母さん。いつからいったらいい？」
ニッコリ笑って快諾した娘の手を、母親は喜びとともに握り締める。
「助かるよ！　明日からでもいいかしら？　坊ちゃまは付きっ切りで世話してあげる人がいないと、ダメで……」
百合は内心、「どんな二十五歳だよ」と突っ込んだが、それは隠して頷いた。
「じゃあ、明日からね」

＊

そして、一年と数ヶ月が過ぎた。

2

「一智様！　ほら、朝ですってば。まだギリギリ朝にしてあげます。あと五分で十一時になっちゃいますよ！」
百合は本日五度目に一智の寝室に入り、今度こそカーテンを全開にする。時期は残暑の残る九月。昼近くになれば、陽射しも強くなる。真っ暗だった室内に、眩しい光が一気に広がった。
これで目を覚まさないものはいない。百合の感覚では、その筈だった。
だが、部屋の主はもそもそとシーツを被ってしまう。
「頼む……昨日も遅かったんだよ……あと、五分……」
「ダメです！　お仕事で遅かったならまだしも、遊びじゃないですか！　それに、あと五分を聞いて、もう三時間です」
膝丈のメイド服、髪はきっちりとシニヨンにして黒縁メガネをかけた百合は、外見も中身もメイドの手本に相応しい。
すっぽりと一智が被っているシーツを両手で握ると、一気に剥ぎ取る。
と、同時に元に戻した。
「……一智様……お休みになる時には何かお召しになってくださいと、いつも言っているでしょう……」
地を這うような百合の声に、一智がまだ覚醒していない不明瞭な声でもごもごと答える。
「面倒臭かったんだよ……」
「みっともないです。もしも火事とかあったら、裸で逃げる羽目になるんですよ？　お金持ちなんですから、強盗が入ることもあるかもしれないじゃないですか。裸で縛られたりしちゃうんですよ！？」
「解った、解った。次から気を付けるって」
流石にこれだけごちゃごちゃ言われれば目も覚めてくるというものだ。ようやく一智はムクリと身体を起こした。

今年の五月で二十七歳になった一智は、寝起きだというのに精悍な眼差しが際立っている。日本人離れした鼻筋はすっきりと高く、女性が放っておかないのも頷ける。無精ひげさえ、色気があった。
「たまにはさぁ、こう、ニッコリ笑って『おはようございます、一智様』とか、言えないわけ？」
寝癖のついた頭を掻きながらそうぼやく一智に、微妙に視線をずらして、百合は着替えを渡しながら返す。
「一智様が毎朝六時に、私が声をかけなくても起きて下さったら、喜んでそうさせていただきます」
「そりゃ、無理だ」
はは、と笑いながらケロリと言う一智に、再び百合は眉を吊り上げる。
「普通の二十七歳は、そうされているんです！　いい年した男が人に起こされなきゃ起きないなんて！　しかもこんな時間に！」
「解った、解った。ほら、着替えるぞ」
手を振りながら苦笑すると、一智が今にもベッドから下りそうな仕草をする。更に叱り飛ばそうとしていた百合はクルリと向きを変えて、ドアに向かった。そして、振り返らずに、取り敢えず言わなければいけないことだけ伝えた。
「いいですか？　今日は十五時から役員会がありますからね。忘れないでくださいね。水谷さんも、もう二時間前から待っているんですから」
「はいはい」
「『はい』は一つです！」
まるで小学校の先生のような注意を残して部屋を出て行く百合の背中を、一智の笑い声が追いかけた。

3

独り部屋に残ると、一気に寝室は静けさを取り戻す。危うく、もう一度シーツにもぐりこもうとして、流石に一智は自重した。

まったく、百合はいつでも面白い。七歳も年下だというのに、まるで母親のようだ。

たいていの女性は、一智の前ではシナを作り、決して声を荒げたりはしない。彼が何を言っても、あでやかに微笑んで「ええ、そうね、一智さん」。そういう女性も嫌いではないが、正直言って、誰も彼も同じに見える。危うく名前を間違えそうになったことは、何度もあった。

だが、百合だけは、誰とも違う――誰とも、間違えようがない。

一智はベッドから下りて、彼女が置いていった着替えを手に取った。百合が丹念にアイロンをかけたシャツは、皺一つない。

下着すら着けていないのは、確かに昨晩は面倒になったから、というのもあるのだが、時々、百合のあの反応を見たくなるから、という理由も混じっている。彼の裸――と言っても、せいぜい腹くらいまでだが――を見て顔を赤くする女性は、百合ぐらいなものだ。露出狂の気はないが、ついついやってしまう。

今日も、こちらを向いている時には視線を逸らしているし、背中を向けていても、真っ赤に染まった耳が丸見えだった。

クスクスと笑いながら、一智はシャツに腕を通す。

気が重い役員会に出なければいけない朝は、このくらいの楽しみがあってもいいだろう。

一智は大学卒業後に二年間ほど身分を隠して下請け会社で働かされた後、二十四歳から専務という役職に就けられた。だが、実績もない、血筋だけの若造についてくる者がいたら、それこそ驚きだろうし、胡散臭い。

名ばかりの専務という役柄は、はっきり言って、いてもいなくて

も同じだ。会議に出たところで、所詮、三代目の若造の言うことなど、誰も耳を傾けたりはしない。役員たちが喧々諤々とやりあうところに、ただ座っているだけだ。

――それに、何の意味があるというのか。

着替え終わってひげを剃り、髪を整える。

仕上がれば、見てくれだけは立派な、会社役員だ。

大きく息をつき、一智は寝室を後にする。

食堂では、一智の食事とともに、秘書の水谷真司<みずたに　しんじ>がコーヒーを飲みながら待っていた。社会人にしては長めな髪の一智に対して水谷は短く刈り込んでおり、いかにも『日本人』という容姿は生真面目を具現化したようだ。

「おはようございます、一智様」

立ち上がり、きっちりと頭を下げる。かれこれ七年の付き合いになるが、毎回こうだ。こういう真面目なところが、百合とどことなく似ている。

「よ、待った？」

まるでデートの待ち合わせのような言い方に、水谷の眉がピクリと動く。

「二時間ほど」

「あ、そう。悪かったな」

すぐに怒りを顕わにする百合と違って、水谷は滅多に表情を変えることがない。だが、秘かにイラッとしているのは、間違いないだろう。これはこれで、面白いのだ。

「俺はこれから朝飯だけど、一緒に昼飯食っとく？」

「いえ……結構です」

ニヤニヤと笑っている一智に対して、どう思っているのか。

無表情のまま、水谷が書類を差し出した。

「こちらが、本日の会議の資料です」

「ふうん」

スクランブルエッグをつつきながら、パラパラとめくっていく。

「――これって、ちょっと変じゃね？」
気になったところをチョコチョコと確認する合間に、時々百合が現れて給仕をする。
ふと、一智は彼女の手に目を留めた。
「あ、百合、ちょっと……」
「はい？」
動きを止めた彼女の右手を取り、小指の外側の辺りをペロリと舐める。
「――！！」
「ケチャップ付いてた」
手を放すと、百合はバッと両手を背中に隠してしまった。その顔はまさに茹でダコだ。
「ッ！　――おっしゃってくだされば、自分で拭きます！」
殆ど叫ぶようにそう言うと、百合は小走りで食堂を出て行ってしまう。
大声で笑う一智に、流石に水谷が咎めるような視線を向けた。
「おからかいになり過ぎでは……？」
「まあまあ。これでちょっとはやる気が出てきたよ」
そう言って、一智はトンと書類をまとめる。最後に百合が注いでいったコーヒーを飲み干すと、立ち上がった。
「じゃあ、行くか」

＊

キッチンに駆け込んだ百合は、流しに直行すると勢いよく手を洗う――冷たい水で流しても、まだ温かな感触が残っていた。
洗い物をしていた母の瑞江が、きょとんと百合を見つめている。
「どうしたんだい？」
「……一智様のイタズラよ」
「またかい？　あの方も、子どもっぽいから……」

あれが子どもっぽい悪戯なのか、そうでないのか……。いずれにしても、百合のことを妹か、最悪母親としか見ていないからこその行動だろう。

どんな気持ちがあったら、『女性』にあんな嫌がらせができるというのか。

手が痛くなるほど流水をかけ、ようやく、百合の気が済んでくる。

全身から怒りを発散させている娘に、瑞江がおずおずと声をかけた。

「でも、お前にはホントに感謝してるんだよ？　あの方付きのメイドが一年以上も続いているなんて、凄いことなんだから」

一月ともたずにコロコロと代わっていた頃を思い出したのか、瑞江が溜息をつく。取り敢えず、どんなに遅くなってもちゃんと毎晩帰ってくるようになったし、出席しなければならない会議に遅刻することもなくなったから、と母は笑顔になるが、百合としては、そんなこと褒められているようでは、社会人としてダメすぎるだろうと思うのだ。

「あのね、甘やかしすぎなのよ、『お坊ちゃん』を。やれば、ちゃんとできるんですから」

もっとビシビシしごいて、三十歳までには毎朝九時に出勤するようにさせるのが、目下のところの百合の目標になっている。

「早いところ奥様を見つけてくだされば、もう少し落ち着くんだろうけどねぇ」

再び洗い物に戻った瑞江が、手を動かしながらそうぼやく。

女性との関係は相変らず派手で、とっかえひっかえどころか、時々、同時に複数と付き合っているような節がある。それを百合が諌めたら、「公認だから」とシレッと返された。

女性が浮気を認めているなんて、百合には到底理解できない感覚だ。自分だったら、別に金持ちでも格好よくなくてもいいから、自分だけを見つめてくれる人がいい。そして、質素でも幸せな家庭を築くのだ。父親を早くに亡くした百合には、それが何よりの夢だっ

た。母の瑞江も結局父のことが忘れられずに、再婚せずに今まで来ている。
百合も、そうやって、たった一人の相手を見つけたかった。
――こんな生活だと、その出会いもないんだけど……。
一智のわがままに振り回されて、早一年強。住み込みで、屋敷の外に出ることも滅多にないため、出会いというものが欠片もなかった。
百合はまだ二十歳だが、この調子で行けば、もう二十歳、と言った方がいいのかもしれない。
「あぁ、結婚したいな……」
ポツリと呟いた百合に、心配そうに瑞江が尋ねる。
「結婚しても、坊ちゃまの面倒見てくれる？」
――いくら大事な母の頼みでも、正直言って、ゴメンだった。

3（後書き）

どうぞツッコんでください。セクハラ野郎です。
もう、ダメ男です。

4

「一智さん、今晩は一緒にいてくれるんでしょう？」
――こいつの名前ってなんだっけ？
ホテルのベッドでしなだれかかってくる女の身体に腕をまわした一智が考えたのは、そんなことだった。
「んー、そうだなぁ」
返事を濁して唇を寄せれば、何の抵抗もなく応えてくれる。ウエストは細く、肋が浮くほどだが、胸は驚くほど大きい。
――これって、ニセモンだよなぁ。
そう思いながらも、スムーズに服を脱がしていく。
女性のどこをどうすれば反応するか、一智は熟知していた。あっという間に蕩けていく彼女を、半分以上は冷静な自分を残しつつ、味わう。それは、身体の欲求を満たすための、ただの『行為』だ。
コトが終わって、ベッドの上で枕にもたれたまま、一智はタバコをふかす。何回か煙を肺に送り込み、揉み消した。ちらりと隣で眠る女を見下ろした後、音を立てずにベッドを下りる。
ざっとシャワーを浴びて全身にこびりついた強い香水の匂いを消して外に出ると、廊下では忠犬のように水谷が佇んでいた。
「お待たせ。帰るぞ」
水谷は無言で目を伏せて、歩き出した一智に続く。
帰路の車の中で、一智は昼間の会議を思い出していた。
相変らず会議は勝手に進行し、一智の発言を一度も必要とすることなく、スムーズに終了した。
――別に、俺がいてもいなくても、どうでもいいだろうに。
その空虚感は、いつもついて回る。
女と抱き合っていれば何となく満たされた感じがしてくるが、コトが終われば、結局は何も変わっていない現実が戻ってくる。
時刻はすでに深夜の〇時をまわっていて、こんな時間に帰ったこ

とがバレたらまた百合に叱られるだろうかと、一智は苦笑した。
車は静かに屋敷に向かう。
もとより水谷は余計な口はきかないし、何となく、一智も軽口を叩く気分ではなかった。
さほどの時間をかけずに到着すると、屋敷は静まり返っており、玄関の明かりだけが灯されていた。
「じゃ、また明日な」
そう水谷に手を振って、一智は一人屋敷に入る。
何となく喉が渇き、寝る前に何か飲もうかとキッチンに向かうと、明かりが漏れていることに気付いた。こんな時間に誰だろうと、一智は眉をひそめる。
足音を忍ばせて覗き込んで見ると――百合だ。
「百合」
突然入ってきた一智に、彼女はびっくりした顔をして見上げてくる。パジャマにカーディガンを羽織り、背中の半ばまである髪を下ろしている。寝る前だからか、メガネもかけていなかった。
多分、百合が起きている時間に彼が帰ってくることが滅多にないから、ということもあるのだろうが、彼女がこんなふうに寛いだ姿をしているのを見るのは、彼女がここに住み込むようになってから、初めてだった。
「――一智様？」
微妙に語尾に疑問符がついているのは、よく見えていないからだろうか。何となく心許なげな表情が、あどけない。そして……手にしているものは、握り飯のように見える。
「どうしたんだ？　こんな時間に」
尋ねた一智に、何故か百合は口ごもる。
「……ちょっと……小腹が空いて……」
その答えに、思わず一智は吹き出してしまう。
「もう夜中だぜ？　それ、食っちまうの？」
「だって、お腹が空いてたら眠れませんもの」

からかいを含んだ一智の声に、百合が頬を膨らませた。と、彼女は首をかしげる。
「一智様は、どうされました？」
「ん、ああ。何か飲もうかと思って……」
「じゃあ、お作りします」
いや、いい――と言いかけて、甲斐甲斐しく動き始めた百合の背中を見守ってしまう。何を作るのかと思っていたら、彼女が冷蔵庫から取り出したのは、牛乳だった。パンをコンロにかけ、牛乳を注いでいく。
「なあ、それ……」
「ホットミルクですよ。もうお休みになるんでしょう？　ホットミルクは安眠にいいんですから」
噴き上げないようにゆっくりとパンを回しながら、彼女が答える。
――なんか、柔らかそう……。
百合の背中を見つめているうちにふっと頭の中に浮かんだその感想を、一智は自分でも怪訝に思って打ち消した。
「普通は、酒だろ？」
「ダメです。お酒は、寝付けるかもしれませんが眠り自体は浅くしますから、良い睡眠が摂れません。寝る前は、ホットミルクの方がいいんです。――はい」
「何の薀蓄だよ」
一智は思わず笑ってしまいながらも、差し出されたミルクを受け取る。啜ってみると、ほのかに甘い――これは、蜂蜜だろうか。ちらりと百合に視線を投げると、彼女もジッと一智を見つめていた。
「……うまいよ」
その言葉に、百合がホッと口元を緩ませる。普段見せたことのない柔らかなその表情を見た瞬間、何かが一智の胸に詰まった。
「――？　どうされました？」
動きを止めた彼に、百合がいぶかしげな顔で尋ねる。
「あ、いや……なんでもない。お前も、それ食っちまったら？」

ごまかすようにそう言って、顎で調理台に置かれた握り飯を示した。
「あ、はい」
頷いて、彼女は両手で持った白握り飯をもそもそと食べ始める。
一智の方に視線は向いているが、多分、それほどはっきり見えていないのだろう。一智は横目で彼女を注視しているのだが、あまり気にしていない様子だ。見られていることに気付いていたら、きっと何か言うに違いない。
――二十歳か……。
彼女が初めてこの屋敷に来たのは、十八歳の時だった。あの頃は、まだ子どもっぽさが残っていて――けれども、一智に対する『指導』ぶりは今と同じだった。
あれから一年と……半年ほどになる。いつの間にそんなに過ぎていたのかと、少し驚いた。普通の二十歳は、もっと遊んでいるだろう。少なくとも、一智のお相手たちは皆、二十歳をだいぶ超えても親の金で遊びまくっている。
そう思い、ふと、何も祝ってやっていないことに気がついた。
――遊ぶ暇も与えずこれほど世話になっているのに、あんまりな職場環境ではないのか？
雇い主として、正しくない対応だろうと、一智は反省する。
――何か、彼女が喜ぶようなものを選んでみよう。
何をあげたら、先ほどの『ちょっと緩む』程度ではなく、『満面の』笑顔を見せてくれるのだろうか。そう思うと、何故か、無性にその顔が見たくて堪らなくなった。
これまで、数多くの女性にプレゼントを渡してきたが、選ぶのは水谷に任せていたので、実際のところ、女性がどんなものを喜ぶのかがよく判らない。光モノであれば、大体ウケていたような気がするのだが。
そんなことをつらつらと考えていた一智に、百合がおずおずと声をかけた。

「あの……？　私、そろそろ休ませていただきますが……」
「ん、ああ。しかし、食べてすぐ寝てもいいのか？　太るぞ？」
――だから、もう少し、ここにいればいい。
ふと、そんなふうに考える。
しかし、一智の心の声など聞こえる筈もない百合はと言えば、彼の台詞にムッと口を曲げた。
「いいです。気にするほどのスタイルではないですから。それよりも、体力勝負なんですよ、一智様のお世話は」
「ふうん」
「じゃ、失礼します」
そう言って彼の横をすり抜けようとした百合の腕を、捕らえた。
「一智様？」
怪訝な顔で百合が見上げてくるのに構わず、腕の中に包み込んだ。中背の百合の頭の天辺は、丁度一智の顎の下辺りにくる。鼻先を、シャンプーの香りがくすぐった。その香りに誘われるように髪を掬い取ってみると、その柔らかさ、滑らかさに、手放しがたくなる。腰の辺りに置いた手には、なんともいえない感触が伝わってきた。
――あれ、これって、意外と……。
ススッと、背中から腰にかけて撫で下ろした。
と、固まっていた百合が変な声を上げて唐突に暴れ出す。
「ひゃっ！　ちょっ、一智様！？」
それはたいした力ではなかったが、一智はパッと手を放した。解放された百合は、真っ赤な顔でジリジリと数歩後ずさる。その様は、まるで警戒する仔猫のようだ。
「何なんですか、いったい……」
「いや、ちょっと、どんなスタイルなのかな、と……。何か、思ったよりも触り心地がいいな、お前」
明らかに百合を怒らせるであろう台詞を、ポロッとこぼしてしまう。当然のことながら、彼女の眉が見る見る吊り上った。
百合がさっと近づいたかと思ったら、突然一智の頭に衝撃が走る。

「いてっ！」
見下ろせば、ブルブルと全身を震わせた百合が拳を固く握って足を踏ん張っている――拳骨で頭を殴られたのは、生まれて初めての経験だった。
「……いいですか、一智様？　それは、とても、非常に、失礼です――いろいろな意味で。今晩、よく、反省してください。これから寝たら、明日は七時には起きられますよね？　もう、容赦しません。きっちり、規則正しい生活をしてもらいます。根っこから、叩き直しますから」
地を這うような声が、張り上げられたものよりも尚一層、百合の怒りを感じさせる。何がこれほど彼女を怒らせたのかよく解らないまま、一智は頷いた。
そんな彼をもう一度睨んで、百合はキッチンを出て行く。
彼女の後姿を見送って、一智は首を傾げた。
彼としては、褒めたつもりだったのだ。これまで、一智が付き合ってきたのは長身、細身のモデル体型ばかりだ。漂ってきたのが柔らかな香りだったり、全身が自分の腕の中にすっぽり入ってしまったり、全身がクッションを抱き締めたような柔らかな感触だったり、というのは、非常に新鮮な感覚だった。
――思わず撫で回してしまったのがマズかったに違いない。きっと、そうだ。
……百合が聞いたら激怒しそうな『反省』であることに、一智は全く気付いていなかった。

＊

キッチンを出た百合は、怒り心頭のまま、競歩並みのスピードで自室へと向かっていた。
新藤家では百合と瑞江――百合が働き出したのを契機に、彼女も住み込みにしたのだ――の他にメイド三人、運転手、執事が住み込

みで働いているが、それぞれ個室を割り当てられている。
自分の部屋に辿り着くと、ガッシと枕を掴み、力任せに何度も振り下ろした。
「もう！　タラシ！　女っタラシ！　バカ！　私は、太ってなんか、ないんだから！」
夜中で大声が出せないのがまた、ストレスになる。
あんなふうに無造作に抱き締めてしまえるのは、一智が自分を妹あるいは子ども扱いしているからだ――突然のことで変なふうに胸がドキドキして思わず硬直してしまったが、続いた彼の台詞が、その証拠だった。
「どうせ！　私なんか、女っぽくないけど！　もう！　『触り心地』って、何なのよ！」
最後にバフン、と叩きつけ、そこに顔を埋める。そして深々と溜息をついた。
七歳も年上で、普段美女とばかり付き合っている一智からしたら、百合は子どものようにしか思えないだろうけれども、あんなふうに無造作に抱き締めていいものではない。
百合は、もう一度溜息をつく。
「……寝よ」
何故これほど腹立たしいのか自分でも理解できないまま、そう呟くと、百合はモソモソと布団を被った。

5

シャッと勢いよくカーテンが開け放たれる。
それと共に、薄暗かった寝室に、早朝の光が溢れかえった。ついでに窓を開けてしまうと、十月半ばの涼しい空気が流れ込んでくる。
「さ、一智様！　朝です。記念すべき早寝早起き一週間目ですよ！」
時刻は朝の六時三十分。
軽やかな百合の声が室内に響くが、返ってくるのは意味を成さないうなり声のみだ。
「ほらぁ。起きてください。今日もよく晴れて気持ちがいいですから」
「……あと五分……」
「ダメです」
そう言うと、羽毛布団を引き剥がした。布団の暖かさに慣れた身体には、外の空気は肌寒く感じる。今日はパジャマを身に着けていたぶんだけ、マシかもしれないが。
仕方なく起き上がり、一智は欠伸を噛み殺した。実際のところ、それほど眠気は強くない。毎朝決まった時間に起きるようにしたら、身体もそれについてくるらしく、以前のように『どうしても起きられない』という状態はなくなった。
それにしても、この一週間の、なんと健全だったことか。
朝がこの時間に叩き起こされるので、必然的に、夜は眠くなる。以前は午前様が普通だったのに、ここ数日は夕食も自宅で摂るようになった。
「はい、お着替えです」
本日も無事に目覚めさせられて、上機嫌な百合が衣類一式を差し出す。
一智はいつもどおりにそれを受け取ろうとして、ハタと思い出した。

身体を捻ってナイトテーブルの引き出しを漁ると、小さな包みを取り出す。それを、ポン、と着替えの上に置いた。中身は、一週間かけて一智自身が選んだネックレスである。小さなダイアモンド数個が付いたシンプルなデザインで、百合に似合うに違いないと思ったのだ。

「……何ですか？」

マジマジとそれを見つめて、百合が尋ねる。

一智からすれば、何故プレゼントだと思わないのかが解らない。

「誕生日プレゼント。九月だったんだろ？　二十歳になったんだよな」

「ええ、そうですが……」

「取り敢えず、開けてみろよ」

百合の喜ぶ顔が見たくて、一智が急かす。彼女は着替えと共に一度それをベッドに置くと、再び取り上げ、丁寧に包装紙を剥がしていく。

細長いケースを開け、数秒間、ジッと中身を見つめた。次に一智に向けられたのは、いかにも呆れたような眼差しだ。

「いただけません」

「――なんで」

「当たり前じゃないですか。私は使用人ですよ？　雇い主からこんな高価そうなものなんて、いただけるわけがないじゃないですか。庶民の金銭感覚から、大きくズレてます。こういうのは、大事に想われている方に差し上げてください」

そう言いながら差し出されて、一智は思わず受け取ってしまう。

「じゃあ、七時には朝食にしますから、それまでに食堂にいらしてくださいね」

呆気に取られている彼を置き去りに、てきぱきとそう言うと、百合はさっさと出て行ってしまった。

一智は、ケースを開けてネックレスを見る。センスは悪くない筈だ――だが、そういうことではないらしい。では、どういうことな

のだろう。
　さっぱり理解できなかったが、百合が喜ばなかったということだけは、解った。
　プレゼントを渡された時よりも、一智が一週間続けて早起きした方が嬉しそうに見えたというのは、いったいどういうことなのか。
　呆然としながら、一智は取り敢えずそれをナイトテーブルに戻して、着替え始めた。

＊

　出社途中の――早起きするようになって、毎朝執務室には行くようになった――車の中で、一智は朝の顛末を水谷に話して聞かせた。そして、意見を求める。
「どう思う？　何で、百合のやつはアレを受け取らなかったんだ？」
　この上ない難題の答えを訊くように眉根を寄せた一智に、水谷は無言で視線を向ける。
「やっぱり、お前にも解らないか……」
　肩を落とした一智を見る目は、冷たい。そして、彼は言った。
「ええ、全く解りません。それを受け取ってもらえると、あなたが考えたことが」
「はあ？」
「珍しくご自分で探されているかと思えば……彼女に差し上げるものでしたか」
「でも、『普通』は受け取るだろう？」
「……あなたの『普通』も彼女の『普通』も少しずつズレてますから。しかも、それがどちらも正反対に。なので、重なる筈がありません」
　これまでの女たちは、同じような物をやると十人中七人は喜んで抱き付いてきたものだ。一智も、百合にそこまでの反応は期待していなかったが、受け取って、ニッコリ笑って「ありがとう」の一言

くらいはあると、信じていた。
「どうすりゃ、喜ぶんだ？」
「普段の彼女をよく観察していたら、判るのではないですか？」
私が知るわけないじゃないですか、と言わんばかりの水谷の眼差しと声音である。
「……そうしてみるわ」
今すぐにでも答えが欲しかった一智には物足りない返事ではあったが、水谷に百合が望む物をピタリと当てられるのも、何となく、嬉しくない気がした。

6

最近、百合は妙に視線を感じる。
視線の主はよく判っているのだが、その意図が解らない。
つくづく彼女の主は理解不能な人間で、この間は突拍子もないものをプレゼントされそうになった。
見るからに高価そうなネックレスは、誕生日ごときで使用人に気軽にやるようなものではないだろう。まあ、新藤家の財力からすれば、ほんの端金で買えてしまうのだろうけれど……。
まあ、まだまだ常識は乏しい人だが、早寝早起きをして、きちんと毎朝出社するようになったのは褒めてあげたい。
百合としても、何か一つやり遂げた気がする。
一智の部屋に飾る花を切るために庭をうろついていると、水谷と行き合った。
「こんにちは。こんなところで、どうされたんですか？」
今日は日曜で休日だが、水谷はほぼ毎日顔を出す。秘かに百合は、主人が何かしょうもないことをしていないか、見張るためではないかと思っていた。
水谷は軽く会釈をして近寄ってくる。
「失礼します。お邪魔してもよろしいでしょうか」
「構いません。急ぐことではないですから」
何の用かと思っていると、水谷は突然頭を下げた。
「水谷さん？」
「百合さんには、感謝してます。一智さまのことで」
「え……？　ああ」
百合は思わず顔をほころばせる。
「それって、水谷さんがありがたがることですか？」
「ええ、もう。やはり、きちんと出社していなければ、下への示しがつきません」

確かに、いくらお飾り専務でも、会議の時にしか顔を出さないのはあんまりだ。そんなところでも役に立っていたのかと、百合は嬉しくなった。思わず口元が緩む彼女を見下ろしながら、水谷は続ける。

「一智様は、優秀な方なんです。本当は。きっと、新藤商事をこれまで以上に成長させるでしょう。でも、それにはやる気を出してくださらなくては……」

「でも、仕事って、やる気を出すも何も……やらなければならないことでしょう？」

特に一智の立場では、まさに『やらねばならない』筈だ。そんなふうに甘えたことを言っているようでは、将来の新藤商事が、ひいてはその従業員たちのことが心配だ。

ムッと眉間に皺を寄せた百合に、水谷が苦笑する。

「そうなんですけれどもね、三年前に一智様が専務に就任された時、世襲で、その年で、となると、やはり風当たりが強かったんです。……というより、風がなかった、というべきでしょうか」

そう言った水谷が、肩を竦める。生真面目な彼らしくない所作に、百合は首を傾げた。

「？」

「相手にされなかったんですよ。ボンボンの若造が何を言う、とね」

「ああ……」

「それでも、初めはもっとやる気を見せていたんですよ。でも……」

「拗ねちゃった？」

「そう」

二人は思わず顔を見合わせて笑ってしまう。

共通の上司をネタに笑うなんていけないことかもしれないが、『拗ねた』という表現があまりにピッタリ来すぎた。なんだか、可愛らしい。

ひとしきり笑った後、水谷が口元に笑みを残したまま、言う。

「でも、一番助かっているのは、女性たちへのプレゼントを買いに

行かされなくなったことです。寄り道もなくなりましたね。以前は毎日のようにプレゼントやらホテルやらを手配させられていましたけれど、きちんと出社するようになってからは、帰りも早くて……。正直言って、一智様の傍に三日以上女性の姿がないのは、数年ぶりです」

心底から、水谷は感心しているようだ。

ちょっとそれはどうよと思った百合だが、ふとあることを思い出す。

「ああ、じゃあ、あのネックレスも水谷さんが？」

「え？」

「この間、一智様が私の誕生日プレゼントにって」

「あ、いや、あれは――」

言いかけて、水谷が顔をハッと百合の背後に向ける。釣られて振り返ろうとした彼女の腕がグイと引かれて、思わずバランスを崩した。ひっくり返るかと身構えた背中が壁に当たる。こんなところに壁があったかしらと肩越しに後ろを見ると、彼女を見下ろしている一智の目と出合った。彼は何やらムッツリと不機嫌そうに見える。

――笑っていたのが、ばれちゃった……？

本人がいないところで話題に出したことを申し訳なく思って百合が神妙な顔つきになると、一智の眉間の皺はより一層深くなった。

「一智様？」

何をそんなに怒っているのかと、恐る恐る名前を呼ぶ。と、不意に、彼は百合の腕をひっぱって早足で歩き出した。

「一智様！」

水谷が呼びかける声が追いかけてきたが、一智の足は止まらなかった。

7

二階の書斎の窓から、一智は庭を歩き回る百合の姿を目で追っていた。どうやら、活けるための花を揃えているようだ。彼が咥えたタバコは、吹かされることもなく、ただ燃えていく。

あっちに行ったり、こっちに来たり。

彼女は一本一本丁寧に選びながら、花の間を歩いていく。

と、百合に向かって水谷が近寄っていくのが見えた。

何やら、二人で話している。

――妙に楽しそうだな。

そう感じた途端、一智は、何故か無性にイライラしてきた。

――今、笑ったか？

はっきりではないが、百合が微笑んだような気がする。思わず身を乗り出して眼を凝らした。

そして。

今、確かに、はっきり、笑った――百合が、声を上げて笑っている。

その途端、一智は居ても立ってもいられなくなり、タバコをねじ消して書斎を飛び出した。そのまま、一目散に庭を目指す。

上から見た場所に二人はいたが、一智が着く前に笑い声は止まってしまった。それでも構わず近づいていく。

百合の背後に出る形になり、先に気付いたのは水谷の方だった。彼の視線に気付いて振り返りかけた百合の腕を掴んで、引き寄せる。振り向いた彼女は、一智と眼が合うと同時に、いつもの生真面目な表情に戻ってしまった。

――そんなに、俺の前では笑えないのか？

理不尽だとは思いながらも、そんな考えが一智の頭の中をよぎった。苛立ちは最高潮となり、彼は百合の手を引いて歩き出す。背後で水谷の呼ぶ声が聞こえたが、無視して歩き続ける。

殆ど百合を引きずる勢いで、誰にも邪魔をされない場所――自分の寝室へと向かった。そして、放り込むようにして彼女を部屋に入れて、扉を閉める。

一智は振り返って百合を見ると、小走りでないとついてこられなかった彼女は、肩で息をしていた。話せるようになるまで、しばし待つ。

「で？　何を話していたんだ？」

最後に大きく息をついた百合に、一智が問うた。

「え？」

「だから、笑ってただろ？　何を話していたんだよ」

「あの……一智様が専務になられた時のこと、とか……」

「それだけ！？」

「え、あと……女性とのお付き合いが減ったとか……」

「そんなことで、あんなに大笑いしていたのか？」

どちらも自分の話だ。なのに、何故、水谷とはあんなに笑い、当の本人の前では仏頂面をしているのか。

一智は、益々イライラが募ってくる。

話せば話すほど不機嫌度を増してくる一智に困った様子で、百合がおずおずと切り出す。

「あの、水谷さんも、一智様のことを悪く仰っていたのではないですよ？　むしろ、褒めてらっしゃいました。あ、水谷さんって、本当に熱心な方ですね。素っ気ないですけれど、心の底から一智様に尽くそうとされておられて……。気難しそうに見えるんですけど、話してみると、結構、気さくで話し易くて――」

「黙れ！」

彼女が水谷のことをフォローしようとすればするほど、聞くのが耐え難くなってくる。

思わず、大声で一智は百合の言葉を遮っていた。彼はこれまで、百合に――女性に対して声を荒げたことなどない。初めて聞く乱暴な一智の声に、彼女はポカンと彼を見上げていた。

だが、百合のその唇から水谷の話題が出ると、どうしようもなく腹が立って仕方がない。
そう、口紅を塗っているわけでもないのに、綺麗なピンク色で、柔らかそうで……いつも一智を叱り飛ばしてばかりいるそれが、今は心許なげに薄っすらと開かれている。
――その時、一智は何も考えていなかった。
立ち尽くしている百合の腕を掴んで引き寄せると、噛み付くように口付ける。もがいて、声を上げようとしたところを容赦なく攻め立てた。逃れようとする、驚くほどに柔らかなその身体を、抱き潰さんばかりに引き寄せる。メガネが落ちたのが視界の隅に映ったが、構わなかった。
初めは征服するような荒々しさを持っていた口付けを、百合の抵抗が弱まるにつれ、優しく慈しむものに変えていく。完全に抵抗がなくなると、彼女の中を丹念に隅々まで探っていった。そこは何処もかしこも、蕩けるように甘く柔らかい――まるで麻薬のように、もっともっとと求めてしまう。
溺れる者が酸素を求めるように百合を貪って、堪能しつくした一智は、ようやく唇を放すことができた。
と、同時に。
唐突に我に返る。
つま先が浮き上がるほどに抱き締めていた身体を解放すると、百合はクタクタとその場に座りこんだ。両手を床について顔を伏せたまま、肩を震わせている。
――泣いているのか……？
「……あ……百合……？」
しばらく待って、一智は恐る恐る声を掛ける。
その声に反応して、ピクリと彼女の肩が震えた。そして、顔を伏せたまま、ゆらりと立ち上がる。
今にも倒れそうなその風情に、一智は思わず両手を差し伸べかけたけれども、百合から発せられた低い声に全身が硬直する。

「そんなに……」
「――え？」
「そんなに、溜まってるんですか？」
何が？　と訊き返す余地はなかった。
顔を上げた百合の炯々たる目が、ヒタと一智に据えられる。
「明日から、五時起きです。邸の周りを、ランニング二十周――いいですね？」
「え、おい、ちょっと、待て」
慌てて宥めようとしたその瞬間。一智には百合から稲光が放たれたのが見えた――間違いなく。
「黙らっしゃい！　たった二週間かそこら女性との付き合いがないからって私なんかにこんなことをするなんて、よっぽど溜まっている証拠です！　運動でもして、発散しなさい！」
ぴしゃりと鶴の一声で厳命すると、床に落ちたメガネを拾って、フラフラと部屋を出て行く。無事に自室に辿り着けるのか不安になるような足取りだったが、硬直したままの一智には後を追いかけることはできなかった。
百合が出て行くのと入れ違いで、水谷が姿を現す。あまりのタイミングの良さは、部屋の外で待機していたからだろう。
「一智様……」
「――何も言うな」
あんなふうに我を失うことなど――女性に無理強いしたことなど、一智には今までなかった。
どうして、あんなことをしてしまったのか、その理由は解らない。まさに茫然自失の態だ。
だが、自分の仕出かしたことは、よく解っている。つまりそれは、明日から五時起き、ランニング二十周をしなければならないということだった。

＊

這う這うの体で何とか自室に辿り着いた百合は、部屋に着いて戸を閉めた途端にその場にヘタりこんだ。
あれは、いったいなんだったのだろう。
震える指先で唇に触れると、まだ熱を持っているようだった。
「あれ、ファーストキスだったんだ……」
ポツリと呟く。
まるでそれが引き金になったかのように、視界が滲み、後から後から涙が溢れてくる。
――いやじゃ、なかった。
そのことに驚いている自分と――受け入れている自分とがいる。
この涙は、キスが嫌だったからじゃない。キスに、気持ちがなかったからだ。
一智が自分を女性として見ていないことは、よく解っている。さっきのアレは――理由はよくわからないけれど、彼が何かに腹を立てていたから、されたキスだ。
それが、悲しい。
何も感じていない相手なら、こんなことをされた時、押し寄せるのは悲しみよりも怒りだろう。
でも、自分の中にあるのは、純粋な悲しみだ。
それが、意味することは……。
「うそぉ……」
いったい、いつからだろうか。一智のことをただの雇い主とは思えなくなったのは。
振り返って思い当たるのは、あの夜。
酔った一智が、唯一『弱音』らしいものをこぼした、夜。
あの時、自分は、彼に対して確かに「何かをしてあげたい」と思った筈だ。
母が亡くなった父のことを話す時に必ず口にするのは、「この人の支えになってあげたいと思ったのよ」という言葉。そう思った瞬

間、母は恋に落ちたのだと言った。
「こういうこと、なんだ」
つくづくと、実感する。
――その日、初めて百合は仕事をサボった。

8

一日は粛々と始まる。
今日も一智は、百合が起こしにくるよりも早くスウェットの上下に着替え、部屋を出た。
あれから一ヶ月。
一智は毎日、『屋敷をランニングで二十周』の日課をこなしていた。最近では、ストレッチや筋肉トレーニングまでするようになっており、元々引き締まっていた身体は、より一層均整が取れてきている。
――そろそろ、赦してくれてもいいんじゃないかな……。
走りながら、一智は期待する。
この一ヶ月間、彼は実に『イイ子』だった。百合に叱られるようなことはせず――それ故に、何か物足りない。いつもの調子になって欲しいのだが、どこか沈んだような彼女が怖くて、怒らせるようなことができないのが現状だ。
まるで不可視のバリアがあるように、今一歩が近寄れない。
笑ってくれとは言わないが、せめて、以前と同じような距離感を取り戻したい。
そう思って、ふと一智の中に「本当に？」と自問する声が響く。
――本当に、以前と同じような関係を取り戻したいのだろうか。
兄と妹のような……母と子のような。
改めてそう問うと、自分の望むものは、それとは何かが違う気がした。
――もっと、傍に置いておきたい。もっと、触れたい。……いっそ、自分の中に包み込んでしまいたい。
そんな考えが頭をよぎり、一智は愕然として立ち止まる。
――俺は、今、何を考えた？
我に返ると、手が届きかけていた何かが遠ざかっていく。それを

手に取ることができれば、全てが変わるような気がする。しばらく立ち止まって考えてみたが、一度離れてしまったものは、もう戻っては来なかった。
一智は、溜息をついて再び走り出す。
そして、また、考えた――百合との関係を修復する方法を。
十周目を走り終えたところで、救い手の存在を思い出す。
――瑞江だ。
百合に直接訊けないのであれば、母親の瑞江に訊けば、彼女が好むものが何なのか、教えてもらえるに違いない。
不意に視界が明るくなって、足にも翼が生えたように感じられた。
さっさと残る十周を走りきり、手早くシャワーを浴びるとキッチンに向かった。早く起きるようになって百合の行動パターンを知ったのだが、大体この時間はアイロンのかけ直しをしている。期待通り、キッチンは瑞江一人が切り盛りしていた。
「瑞江」
入り口を気にしながら、一智は瑞江に声をかける。振り向いた彼女は、こんな時間にキッチンに入ってきた一智に驚いたようだ。
「どうなさったんですか？　お食事を早めますか？」
いつもの食事の時間には、まだ一時間ほどある。
「あ、いや、ちょっと、訊きたいことがあっただけだ。食事はいつもどおりでいい」
「お訊きになりたいこと？」
「ああ」
一智はそこで少し言葉を探した。
「あの、だな。百合が好むものって、なんだ？」
「は？」
突然、何の脈絡もない質問に、瑞江が目を丸くする。
「いや、あいつ、誕生日も祝ってやれなかったし……。何かしてやれないかな、と思って。何か好きなものとか、好きなところとか……」

誕生日と言っても、もう三ヶ月近く前のことになる。怪訝な顔をしながらも、瑞江は律儀に答えてくれた。
「……そうですねぇ。水族館とか、好きですよ。ストレス解消なんかに、よく独りで行ったりしていたみたいです」
「水族館……」
そんなところでいいのだろうか。
一智が今まで付き合ってきた女たちは、高級レストランを借り切って欲しいとか、超高級ホテルの最上階から夜景が見たいとか、ボートを借り切ってクルージングをしたいとか、そんなのが多かった気がする。
怪訝な顔をする一智に、瑞江は笑って続けた。
「水族館は、亡くなった父親がよく連れて行ってくれたんです。ほら、水中トンネルみたいになっているところとか、あるでしょう？あれが好きで、あの子ったら、もう、あんぐり口を開けていつまでも見惚れてたものです」
その時の様子を思い出したのか、瑞江がフフッと小さく笑った。
一智の脳裏にも、目を輝かせている百合の姿が浮かぶ。確かに、高級レストランで寛ぐ彼女は全く想像できないが、水族館ではしゃぐ彼女は想像するのも簡単だ。
「わかった。ありがとう」
明るい見通しが立ってきて気をよくした一智は、瑞江に礼を言うと、意気揚々とキッチンを出た。そのまま自室に向かうと、いつものように百合が待っている。
「お着替え、こちらに用意してます」
差し出された服を受け取りながら、さりげない口調で一智は誘いをかける。
「百合、今度の日曜日に、水族館へ行くぞ」
「水族館？　一智様がですか？　どなたか、女性と？」
「お前とだ」
「私？」

何の脈絡もない誘いに、当然のことながら百合は眉をひそめながら首を傾げる。考える余裕を与えると断られそうで、一智は一気に言い切った。
「お前、誕生日プレゼントを受け取らなかったじゃないか。その代わりだよ。好きなんだろう？　水族館」
「ええ、まあ……」
「よし、決まりだ。いいな」
さっさと断言してしまう。律儀な百合は、一度約束さえしてしまえば、断れないに違いない。
「じゃ、着替えるぞ」
強引に約束を取り付け、さっさと部屋から追い出した。日曜日は明後日なので、仕事だなんだと百合と接触する時間を減らせば、断られることもあるまい。われながら姑息だとは思いつつ、それぐらいしか手が思いつかなかった。
――会社に行くのが待ち遠しいなど、彼にとって、滅多にないことであった。

＊

「水族館ですか？」
出社途中の車の中で、一智は水谷に日曜日の計画について話した。
「そう」
「あなたにしては随分まともな選択ですね」
サラッと失礼なことを言われたが、一智は気付かなかった。得意顔で、更に伝える。
「だからな、その日は貸し切りになるように手配しておいてくれ」
「……はあ？」
「だから、貸し切りに――」
「聞こえています。そんなことしたら、また彼女に叱られますよ？」
「なんで。その方が女は喜ぶだろ？」

至極当然、という顔で断言した一智に、水谷は溜息をつく。
「とにかく、私は、貸し切りにはしないことをお薦めします。それでも、どうしてもそうされたいとおっしゃるならば、直ちに手配しますが」
そこまで言われると、なんだか一智も自信がなくなってくる。何しろ、百合に関してはやることなすこと裏目に出ているのだ。
「……わかった。じゃあ、止めておこう」
渋々ながら頷くと、水谷がホッとしたように見えたのは気のせいだろうか。
とにかく、一智は百合を喜ばせたかった――それだけだ。
この一ヶ月、一智は『反省』し、何が百合を怒らせるのかを考えた。まずは生活――朝帰りもせず、起こされなくても早起きをして朝の日課もこなし、社にも通っている。これは及第点をもらえるだろう。後は、不用意に触らないことだ。今まで一智が触ったりキスしたりして怒る女はいなかったが、多分、彼女を一番怒らせているのは、これだ。重々肝に銘じておこう。
――一人頷く主人を隣から生ぬるい眼差しで見守っている秘書に、一智は気付いていなかった。

9

日曜日は絶好の行楽日和になった。とはいっても、回るのは屋内ばかりなので、天気はあまり関係ない。しかし、一智には、燦々と輝く太陽は、今日の成功を約束してくれるもののように思えた。

「よし、じゃあ行くか」

そう促して先に百合を車に乗せ、続いて一智も身を屈めて乗り込む。

動き出した車の中で、一智は窓の外を眺めている百合の姿を窺った。いつもはきつくひっつめたシニヨンだが、今日はふんわりとゆるくまとめていた。シンプルなデザインの淡いピンクのワンピースも良く似合っている。

いつものメイド仕様だと、実際の年齢よりも四、五歳は年長に見えるが、今日は年相応に――可愛らしい。

視線に気付いたのか、不意に彼女が振り返る。

「何か？」

眉をひそめて見つめてくる顔は相変わらず化粧をしていないが、そんなものは必要無いくらい頬はスルンと滑らかだ。そして、柔らかそうなその唇。

そう思考が進み、ハッと一智は我に返る。

「何でも。……似合ってるな、その格好」

「……ありがとうございます」

一智の台詞に、ほんのりと百合の頬が染まる。桃のようなそれを舐めてみたら、どんな味がするのだろう。

だが、まだ、一智の中では理性が勝った。意味のない会話で気を逸らす。

「いい天気で良かったよな」

「そうですね。外を歩きたい気分です」

寛いだ表情でそういう百合に、なかなか幸先のいいスタートが切

れたことを確信する。
「よし、じゃあ後で少し歩くぞ」
これから行く水族館の近くには、公園もあった筈だ。百合のことだから、水族館を回り終えれば「さあ、帰りましょう」ということになりかねない。散歩をネタに、取り敢えずは引き延ばしを図れた。
さしたる渋滞もなく比較的スムーズに水族館に到着すると、そこは家族連れでごった返していた。騒がしい子ども連れも多く、やはり貸し切りにするべきだったかと百合を見下ろしたが、彼女は別に気にしていないようで、むしろ楽しそうに見える。
――何がそんなに嬉しいんだ？
百合の『お楽しみポイント』が判らないまま、一智は彼女と連れ立って館内に入る。
内部を順路どおりに進んでいくと、魚の群れだけでなく、磯の生物、ペンギン、イルカ、クラゲなど様々な海洋生物が現われる。
百合は、その一つ一つに目を輝かせ、明るい声を上げた。
――まずい。
屈託のない彼女の様子に、一智の手が疼く。それを伸ばして、彼女に触れてしまいたくて、どうしようもなくなる。
百合から視線を引き剥がして理性と欲望の間で彼が戦っていると、不意に指先に柔らかく温かなものが触れた。そして、キュッと握りこまれる。
「一智様？　次に行きませんか？」
見下ろすと、漂うクラゲに釘付けだった百合が不思議そうに見つめていた。クイ、と手を引かれる。
「あ……ああ」
手を握られることがこんなにも心地良いものだとは、知らなかった。いったい、どんな拷問だよ、と思いつつも、彼女の手を振り払うことはできない。引っ張られるままに歩き出した。
やがて、二人はトンネル型の水槽に足を踏み入れる。
「わぁ……」

一智の隣から、小さな声が上がった。
「こういうの、好きなのか？」
「はい。水族館の中で一番好きです」
百合が、夢見るような声で返事をする。
そのまましばらく進んで、二人は真ん中ほどで立ち止まった。
ガラス張りのトンネルの中にいると、まるで海の底に佇んでいるようだ。大小さまざま、色とりどりの魚が群れをなして泳いでいく。時々、巨大なエイやサメのようなものがよぎっていくと、下から溜息のようなものが聞こえ、一智の指先を握っている百合の指先の力がわずかに強まる。
百合に気付かれないように横目で見下ろすと、彼女はうっすらと唇を開け、天井を一心に見上げていた。その様は、まるで子どものようだ。多分、幼い頃もこうやって父親の手を握って、同じように見上げたのだろう。
無防備なその唇にキスを落とすのは、容易なことだ。だが、一智は動けなかった。それよりも、何か強い感情が胸にこみ上げてきて、彼女と同じように視線を上に向ける。
――百合の過去も、現在も、未来も、自分のものにしたい。
溢れてくるその感情の名前を、彼は知らない。だが、それはとても強い欲求だった。
どれほどの時間が過ぎた頃であろうか。一智の手がそっと引かれた。
「一智様……？　そろそろ行きませんか？」
視線を下ろすと、首を傾げて彼を見上げている百合の視線と行き合った。
「ああ……そうだな」
そう答えて、ただ握られているだけだった指先に力を入れると、百合の手がピクリと震える。だが、振り解かれることはなかった。
二人はゆっくりと足を進める。
水族館を出ても公園を歩き、当たり障りのない、たあいもない会

話を続けた。
夜は気取らないレストランで食事を摂る。
それは今まで一智が味わったことのない、穏やかで柔らかな時間だった。
やがて帰りの車は門をくぐり、二人の関係が元どおりの『雇い主とメイド』に戻る時がやってくる。
今日は『うまく』やれた。うまく、百合を喜ばせることができた筈だ。多分、明日からはまた、以前と同じような二人に戻れるだろう。
だが。
――以前と同じ？
果たして、自分は『それ』を望んでいるのだろうか。
それ以上考えることなく、一智は屋敷に入りかけた百合の腕を捉えた。
「一智様？」
見上げてくる眼差しは、ほんのわずかも彼を疑っていない。
「キスしたい」
「え？」
百合の目が、メガネの奥で丸く見開かれる。
返事は待たなかった。
「悪い」
そう声を掛けて硬直している彼女のメガネを外すと、そのまま頬を両手で包む。強引なことはしなかった。軽くついばむだけのものを、何度も繰り返す。
名残惜しくも最後に触れて唇を離すと、何かを探すような百合の眼差しが向けられていた。しばらく互いの目を覗き込み――先に目を逸らしたのは、一智だった。
「悪い」
もう一度繰り返し、扉を開けてエントランスへ百合を押し込んで、自分は外に残ったままで、扉を閉めた。

晩秋の冷たい空気の中、一智は佇む。
自分が何を望んでいるのかよく判らず、思わず溜息が零れるのを止められない。
ふと、彼は手の中に残るメガネに気が付いた。

＊

百合は扉の内側にもたれてしばらく外の気配を窺った。けれども、ノブが回される気配は、ない。
小さく息をついて、扉から離れる。歩き出してからメガネがないことに気付いたが、仕方がない。少し心許ない足取りで自室へと向かった。
部屋に入ると、ノロノロとベッドに腰を下ろす。
――あのキスは、何のつもりだったのだろう。
以前のものは、怒りからのものであることが明らかだった。感情に任せてあんなことをした一智が、悲しかった。
けれども、今日のものは、さっぱり解らない。
朝は自分の気持ちがばれてしまう羽目になってしまわないかと不安だった。でも、ずっと、一智は穏やかに接してくれて――以前の子どもじみたところも全くなくて。
無事に、一日を終われると思ってた。
なのに……。
最後に一智の目の中にあったものは、何だったのだろう。怒りとか、そういう激しいものではないことだけは、解ったけれど。
――いつも、女の人と会った時は、別れ際にあんなキスをするの？
そう思うと、今更のように涙が頬を零れ落ちていく。
「なんか、もう、疲れたな……」
ポツリと呟くと、ドスンと心の中に何かが落ち込んだ。
それを追い出したくて百合は大きく息を吐いたが、何も変わらなかった。

10

「この間なんだけどさぁ」
そう、唐突に切り出した主人に、今日の予定を告げていた水谷が口を噤む。
「はい？」
「ほら、日曜日の……俺って、どうしたいんだと思う？」
「はぁ？」
珍しく、生真面目な水谷が間の抜けた声を出した。
「いや、結構うまくいってたんだぜ？　ホント、家に入る直前までは」
「一度も叱られず？」
「そう。『必要以上に触らず』」
たった二つ――『叱られるような非常識なことはしない』『必要以上に触らない』は、水谷が与えた最低限のアドバイスだ。まあ、『非常識』に関しては、一智にどこまで『常識』があるのか判らなかったので、忠告した水谷としても微妙なところだったのだが。
「良かったじゃないですか……『家に入る直前までは』？」
「ああ。……最後の最後で、キスしちまった……」
ぼんやりとそう答えた一智に、水谷が呆れたような声を出す。
「何で、また」
「それが、解らねぇんだって」
そこで、一智は大きな溜息をつく。
「うまくいって、明日からはまた元通りだ、と思った瞬間、なんか耐えられなくなった」
「何に？」
「それが、解らん。ただ、前と同じじゃ嫌だと思ったんだ」
「で、キス……」
「ああ。よく解らねぇだろう？」

同意を求めた一智に、しかし、水谷は奇妙な眼差しを向けた。幼い子どもを憐れむようなその目で見られると、なんだか妙にバカにされている気がする。

「何だよ？　お前にはこれがなんだか解るのか？」

「いえ、まあ……あなたがこれまで真っ当に成長してこなかったのだということが、よく解りました」

「どういう意味だよ」

「それ、もう少し、ご自分で考えてみてください。他人が教えるものじゃないですから。――で、十五時からですが……」

一人心得顔で言うだけ言って、水谷はさっさと『本日の予定』に戻ってしまう。

取り残された一智はムッと口を曲げた。

学業成績は常に『優』だったし、お飾りに甘んじているとは言え、早々に職務にも就いた。交友関係は広いし、女との付き合いも入れ食い状態で並以上にこなしてきた。そんな自分の何処をとって『成長していない』などとぬかすのか。

水谷の言うことがさっぱり解らない。

だが、解らないのは百合のこともだし、何よりも自分自身のことだ。

結局何の解答も得られないままで不満を募らせた一智を乗せ、車は本社ビルに入っていった。

11

随分と肌寒くなり、日の入りも早くなった今日この頃。
暗くなっても姿を見せない百合を探して、一智はキッチンを覗き込んだ。しかし、そこにいるのは瑞江だけである。
元々、日曜は好きなように過ごしていい事になっているため、屋敷にいなければならないわけではない。だが、そうはいっても、大抵百合は屋敷にいて、結局一智の世話を焼いていることが殆どなのだ。それが、今日は昼過ぎから一向に姿を見せなくなった。
「瑞江、百合はどうしたんだ？」
問われて、彼女は口ごもる。
「あら、聞かれてませんか？」
「何を？」
「……」
どこか気まずそうにする瑞江に、一智は答えを迫る。
「どこに行っているんだ、あいつは？」
「あの、まあ……簡単なお見合いといいましょうか……」
「見合い！？」
「ええ……あら……てっきりお話ししているものだとばかり……」
「聞いてないぞ！」
声を荒げた一智に彼女が驚いた目を向けていたが、それに取り合う余裕はなかった。
「どこでやっているんだ！？」
詰問する一智に、瑞江が慎重な眼差しを向ける。
「それを聞かれて、どうなさるんです？」
「もちろん、連れ帰る！」
「……あの子は、普通に結婚して、幸せな家庭を築くのが夢なんです。それを邪魔するわけにはいきません」
『邪魔』という単語を出されて、一智は言葉に詰まった。そこに、

瑞江はさらに続ける。
「元々このお仕事は、本当なら専門学校に行く予定だったところを止めさせて、頼んだことだったんです。専門学校に行って、他のお仕事に就いていれば、今頃いいご縁に恵まれていたかもしれません。そうしたら、あの子の夢は叶っていたんです。あの子は良く勤めてくれましたし、何よりも私はあの子の母親ですから……。今回、あの子から相談されて、本来の道に戻してあげるのが一番だと思ったんです」
いけませんか？　と、普段の柔和な瑞江が見せたことのない強い眼差しで問われ、一智は抗する言葉を失う。フラフラと、半ば逃げ出すようにしてキッチンを後にする。
自室へ戻った一智は、力なくベッドへとへタりこんだ。
――百合が、結婚する？
それは、彼女が他の誰かのものになり、彼女の一番がその男になるということか？
今のように、呼べばすぐに姿を現すということはなくなり――最悪、ここを辞めてしまうかもしれないのだ。いや、彼女のことだから、辞めるだろう。きっと、自分にしてきたように、夫となる男に尽くすに決まってる。
そう考え、一智は思わず跳ぶようにして立ち上がった。そして、ウロウロと落ち着きなく室内を歩き回る。
そんな事態は、耐え難い。今でさえおかしくなりそうなのだ。
檻の中の熊のように行ったり来たりを繰り返しながら、一智は考える。
――どうしたら、百合を思い留まらせることができるんだ？
だが、どんなに考えても、答えは全く見つからなかった。

12

門の外でタクシーを降りて、百合はうつむきがちに玄関へ向かう。
歩きながら見合い相手のことを思い返し、溜息をついた。悪い人だったからではない。むしろ、とてもいい男性だった。穏やかで、人の話をよく聞いてくれて、仕事ではそれなりの地位に就いているが、何よりも家庭を大事にしたいと言っていた。
そして、結婚を前提に交際したい、と。
彼と結婚すれば、必ず幸せにしてくれるだろう。
そう、信じさせてくれる男性で、穏やかで幸せな家庭を望む百合にとっては、願ってもない相手だった。
――でも……。
小さく溜息が漏れる。
何かが、足りなかった。それが何なのかが判らない。
時刻は遅く、玄関の鍵は閉められている。多分、起きている者もいないだろう。百合は合鍵を取り出した。
中は、当然暗い。かと言って、歩きなれた邸内で電気を点ける必要も感じられず、百合は暗がりを壁伝いに自室を目指した。
もう少しで着く、というところで、彼女は部屋の前の壁に寄りかかって佇む人影に気付いてギクリとする。シルエットでも、それが誰なのかは充分に判る――できたら、今晩は会いたくない相手だった。
「一智様……」
ゆらりと身体を起こした彼は、立ち止まった百合の元に歩いてくる。
「百合」
暗闇の中でも光っているような一智のその目に見下ろされると、身が竦んだ。
「ちょっと来い」

身体を硬くした百合をどう思ったのか、一智は彼女の腕を取って歩き出した。その行動に、百合は慌てる。
「待ってください、一智様。今日はもう遅いですから、明日……」
そう言い募る百合を彼は無言で見下ろしたが、足は止めない。引きずられるようにして、そのまま――彼の自室へと連れて行かれる。
部屋に着いても、しばらく彼は無言のままだった。三歩分ほど離れて、無言のまま、百合をジッと見下ろしている。
先に沈黙に耐えられなくなったのは、百合の方だった。
「一智様？　あの……」
けれど、口を開いたはいいが、先は続かない。いつもと違う華やかな服装や、薄いとはいえ化粧をしていることが、何故か彼女をいたたまれなくする。
一智に黙って見合いをしたことに罪悪感のようなものを覚えているのだが、本来は彼に関係ないことなので、別に気にせず、平然としていてもいい筈だ。なのに、この居心地の悪さは何なのだろう。
更にまたしばらくの沈黙の後、ようやく一智が動く。
ギリ、と歯軋りの音が聞こえ、わずかに足を踏み出した。
「百合……どうだったんだ」
何が、とは問えなかった。彼は、全て承知のようだ――話したのは、母だろうか。
「どうって――」
「ごまかすな。見合いだったんだろう？」
見下ろしてくる目が、怖い。その目から顔を逸らし、百合は呟くように答える。
「良い方でした」
視界の隅に映る一智の拳に力が込められたのが見えた。彼がゆっくりと息を吐く。
「結婚、するのか……？」
「そ、れは……」
「するのか！」

一歩近付かれ、一歩、後ずさる。だがそれぞれの歩幅は異なり、必然的に二人の距離は縮まった。
「お前は、そいつのものになるのか……？」
低く絞るような声での囁きが、かろうじて百合の耳に届く。ぞくりと悪寒のようなものが彼女の背筋を走り抜けた直後――一智の腕がさっと伸び、次の瞬間には、百合は彼の胸に頬を押し付けていた。
咄嗟にもがいた百合を押さえ込むように、彼女の身体に回された一智の腕に力がこもる。それは、痛みを覚えるほどだった。
「一智、さま……」
掠れる声でその名を呼ぶ百合の頭に被さって、一智の軋む声が届く。
「お前が、欲しい」
一瞬、百合の息は止まった。全身を強直させた彼女をどう思ったのか、一智が言葉を重ねる。
「お前を、抱きたい」
――ああ、そういうことか……。
一智が自分を求める気持ちと、自分が一智を求める気持ちとは、決定的に違う。その二つは、絶対に重ならない。
そう理解した瞬間、百合の頬を雫が転げ落ちていく。
――もう、終わりにしよう。
諦めにも似た気持ちが、百合の心を支配した。
胸元を濡らす彼女の涙に気付いた一智が、腕を放し覗き込む。
「泣くほど、イヤか？」
問いかけには、首を振って応えた。
「いいえ……いいえ」
「じゃあ、いいのか？」
不安げな一智に、百合は精一杯の笑顔を向ける。
「――はい。あなたのものに、してください」
その言葉を言い終えないうちに、百合の身体はフワリと抱き上げられる。

――これで、最後にするから。
一智の胸に顔を押し付け、百合は小さく息をついた。

13

気を失うように眠りに落ちた百合の頬に、涙の跡が残っていた。
一智は彼女を起こさないように細心の注意を払って、そっとそれに触れる。
初めてだった百合に、きつい思いをさせてしまったかもしれない。そんな考えがよぎると、彼女が寝ているというのに無性に抱き締めたくなる。彼はなけなしの理性でそれを堪えた。
懸命に一智に応えてくれた百合の身体は柔らかく、温かく、これまで付き合ったどんな女たちからも得たことのない喜びを彼に与えてくれた。慣れていない身体を大事に扱ってやらなければならなかったのに、彼は我を忘れて貪ってしまったのだ。
彼女の寝顔を見ていると込み上げてくるこの想いは、いったい、なんなのだろう。
どんな相手にも、感じたことのない、想い。
自分の中のこの気持ちを、百合に伝えたいと思った――いや、伝えなければならないと思った。
だが、伝えるための言葉が、彼には思い浮かばない。
――傍にいてくれ？
――手放したくない？
――お前が欲しい？
――お前は、俺のものだ？
どれも近いようでいて、何かが違う。きっと、百合には肝心な何かが伝わらない。
起きたら、必ず『何か』は伝えなければ。その言葉を探すうちに、トロトロと一智は眠りに堕ちていった。

＊

ふと、百合は暗がりの中で目を開けた。腰の辺りに、何か温かく重いものが載っている。
小さく身じろぎすると、身体のあちこちが甘い痛みを訴えた。
――ああ、そうだ。
闇に慣れると、目の前にあるのは、一智の胸。少し視線を上げると、薄っすらと無精ひげが生えた彼の顔。
――自分は、彼に全てを許したことを、いつか後悔するだろうか。
そうは思わない。
今も全身に感じる温もりが、堪らなく愛おしい。
このまま、彼のために生きていく道もありかもしれない。
けれど、いずれ自分は彼により多くを求めるようになり、彼は他の女性のもとに行く。
そうなったとき、自分は耐えられるだろうか。
――いいえ、きっと、無理。
一度手に入れてしまったものを失うのは、つらい。
今なら、まだ離れられるから。
もう一度だけ涙をこぼし、百合はゆっくりと腰に絡みつく一智の腕をどけ、ベッドを下りる。
「お慕いしています、ずっと」
彼の耳元に、小さく、そう囁いて。
百合は静かに部屋を出た。

＊

朝になって、姿が見えない百合を捜して一智が大騒ぎを始めるまでは、まだ数時間の静けさが残っている。

14

百合が行方をくらましてから、すでに一ヶ月。
一智は執事からその連絡を受けるとすぐに、瑞江の元に向かった。
「お前宛に手紙が届いたそうだな」
そう言って一智が詰め寄ると、彼女は手にしていたものをパッと背後に隠した。その行動が、手紙が誰からのものであるかを雄弁に語っていた。
「見せろ」
「ご覧になって、どうなさるおつもりですか？」
「百合を迎えに行くに決まってるじゃないか！」
苛立ちを隠さない一智の声にも怯まず、瑞江は唇を引き結ぶ。百合が、瑞江にどこまで話していったのかは彼には知る術がない。彼女のことだから、多分、何も話してはいないのだろう。だが、一智と何かがあってここを出ることに決めたのだろうということは、母親の勘からか、瑞江は薄々感じ取っているようだった。
瑞江が、強い口調で一智に問いかける。
「何のために？」
「何のため？」
「ええ。あなたは、何のために百合が必要なんですか？」
「そんなの……」
答えようとして、一智は言葉に詰まる。彼自身の中でも、未だに百合に対する気持ちを表すものは見つかっていなかった。
そんな彼を、瑞江が呆れたように見つめる。
「連れ戻すための言葉も知らないのに、どうやって説得するおつもりですか？　戻ってきて、世話をしろ、と？」
「違う。そうじゃない」
「では、なんて？」
問い詰められて、自分の中にある想いを、一智は何とか言葉にし

ようとする。それが正しいものかどうかは、判らなかった。しかし、瑞江を頷かせるためには、何かを言わなければならない。
「……傍に、いて欲しいんだ。俺の傍に、ずっと。ただ、いてくれるだけでいい」
精一杯の一智の台詞に、瑞江は溜息をつく。
渋々ながら、という風情で背後に回していた手紙を差し出した。
「あの子は聡い子だから、あなたの言葉足らずのところも察してくれるでしょう。でも、失敗したら、きっと永遠にあの子を失いますよ？　あなただけでなく、私もね。今度逃げたら、きっと二度と連絡してきてくれないでしょう。あの子は父親に似て、『こう』と決めたら引きませんから。……私も、それ相応の覚悟であなたにこの手紙をお渡しするんですからね？」
百合に最も近い存在からの真に迫った脅しに、手紙を受け取りかけていた一智の手が止まる。だが、一度大きく息を吸い込むと、彼はそれを取った。
「何がなんでも、百合を取り戻す。失ってたまるか」
自分に言い聞かせるようにそう呟いて、封筒に目を落とす。そこにはここの住所と瑞江の名前しかない。そして消印は――京都の都市だろうか。
取り敢えず、日本全国どこにいるかさっぱりわからなかった状態から、一つの都市、あるいはその周辺まで絞れる。全国に送った調査員を全て京都に向ければ、じきに見つかる筈だ。
「待ってろよ……百合」
どこの空の下にいるとも判らない彼女に向けて、一智は呟いた。

15

二月の京都の夜は寒い。

働いている小料理屋での仕事が終わり、百合はマフラーに頬を埋めるように首を竦めて、住処としているアパートを目指す。古い建物なので断熱ばっちり、というわけにはいかないが、石油ストーブを点ければそれなりに暖かくなる。

気を抜くと大きな足音を立ててしまう外階段を、夜も遅いので極力気を使って上った。

と、自分の部屋の前に佇む人影に気付いて、立ち止まる。何者かを確かめようと薄闇の中で目を凝らし――次の瞬間、思わず身を翻して、足音を気にする余裕もなく階段を駆け下りた。だが、ストライドの違いは顕著で、当然のことながら、さほど走らないうちに追いつかれてしまう。

腹立たしげな声をあげた一智に、グイと腕を掴まれた。

「百合！　逃げてどうする！」

「放してください！」

足を踏ん張って掴まれている腕を引っこ抜こうとするが、それが叶う筈もない。

逆に、業を煮やした一智の腕の中に抱き込まれてしまう。数ヶ月ぶりに触れるその温もりに、百合の視界が滲んだ。

「百合、帰るぞ」

抱き締められたまま耳元で囁かれ、何度もそうされた夜を思い出し、百合の背中がぞくりとする。

「……無理です」

「何故」

「もう、あなたのお傍にはいられません」

「だから、何故そう思うんだ」

少し身体が離され、一智の手が顎にかかったかと思うと、百合は

顔を仰向かされていた。真っ直ぐに見下ろしてくる彼の視線が、痛い。もともとシャープな輪郭だったが、頬の辺りがいっそう鋭くなったように見える。
「何故、俺の傍にいられない？」
また、一智が同じ質問を重ねる。百合は答えようとして、震えが抑えられない唇を何度か湿らせた。
「一智様が……私を望まれるのは、これまでの方たちとは毛色が違っているからです。外見も――反応も。物珍しさに慣れてしまえば、きっと……」
――飽きてしまう。
その言葉は、自分の口から出すことはできなかった。
ふと顎を捉える一智の力が抜けるのを感じ、百合は顔をそむける。きっと、図星を突いたに違いない。
「お前に、そんなふうに思わせていたのか？」
彼のその声には、愕然とした響きが滲んでいた。
「ええ。だって、そうでしょう？　私は綺麗でもないし、優雅でもないし、頭がいいわけでもない。これまで一智様がおつき合いなさってきた方々を振り返ってご覧なさいな。私に興味を示された理由なんて、一目瞭然でしょう？」
諭すように、百合は言い募る。自分を包む一智の腕が緩んだのは、彼自身も事実に気付いたからであろうか。
「ね？　ですから、私のことは放っておいてください」
一歩下がって、微笑みながら百合は言う。彼女を絡め取っていた一智の腕が、力なく垂れ下がった。
「そうじゃないと言っても、ダメなのか？」
「ご自分で気付かれていらっしゃらないだけです」
「俺は、信じるに値しない？」
「信じるも何も……」
――最初から、単なる気の迷いなのだから。
百合は一歩も退かない覚悟で顎を引いた。ここで自分に負けたら、

きっと一生後悔する。
「俺はお前が欲しい。他の女になど、目移りはしない。どうやったら、納得するんだ？」
「無理はなさらないで下さい」
笑顔でそう言った彼女に、一智が奥歯を噛み締めるのがわかった。
――こんなふうに苛立たしそうにするのも、彼の思ったとおりにならないからに違いない。
百合は潤んでくる視界の中、瞬きを堪えて一智を見つめる。
彼はしばらく押し黙っていたが、やがて強い光を宿した眼差しを百合に向けた。
「解った」
「お帰りいただけるのですか？」
自分が放った言葉が、チクリと胸に刺さる。だが、百合は辛うじて微笑みを保ち続けた。
一智は一瞬たりとも百合から目を逸らすことなく、続ける。
「ああ。今晩のところはな」
「え？」
「お前が理解できる方法で、俺の『誠意』を見せてやる」
「『誠意』？」
「そうだ。見ていろ、必ず俺はお前を納得させてやる。だから、二度と行方はくらますな。もしもまた姿を消したら必ず探し出して、今度は一生屋敷から出さないからな」
それだけ言うと彼が腕を伸ばし、百合は逃げる間もなく抱き寄せられた。
「これを最後に、お前が『いい』と言うまで、お前には触れない。でも、会いには来るからな。――逃げるなよ」
もう一度一智が繰り返し、ポケットを探ると何かを取り出した。それは彼の手の中でシャラリと音を立てる。
百合がその正体に気付くよりも先に一智の腕が彼女の首にまわされ、何かヒヤリとしたものが項に触れた。

「これ……」
胸元を見下ろすと、いつか彼が渡そうとしたネックレスが光っていた。
「それ、俺が選んだんだからな。女に渡すものを自分で選んだのは、それが初めてだ」
憮然とした顔でそう言う様子が、可愛く見える。
「『大事に想う相手にやれ』と言ったのは、お前だ。仕舞い込んだりするなよ？　ちゃんと着けとけよな」
無くしたら大変だから、家に帰ったら仕舞っておこうと考えた百合の頭を覗き込んだかのように、一智が釘をさした。
「俺は、お前を諦めない」
噛み締めるようにそう囁いて百合を抱き締めると、首をかしげて唇を寄せてくる。
――信じて、いいの？
目を閉じて彼の温かさに溺れながら、百合は心の中で問い掛けた。

16

一智は、卓上の書類を片付けると、デスクの引き出しを開けて、『ソレ』を取り出した。
準備は万端に整った。もう、これ以上彼女に『否』とは言わせない――もしもその答えが返ってくるようであれば、掻っ攫って屋敷に閉じ込めるのも辞さない覚悟だ。
「なあ、水谷。俺はよくやっただろ？」
相変わらず生真面目に佇む右腕にそう投げかけると、彼はニコリともせずに答えた。
「そうですね。あなたが二年も女性断ちができるとは思いませんでした。どんな人間でも、やればできるものだと実感しましたとも」
「……そっちかよ」
まあ、確かに、彼女に会いに行くたびに、何度手を伸ばしそうになったことか。触って、抱き締めて、キスをして、いっそ最後まで……。高校生の頃だって、妄想でそこまでやったことはなかったというのに。
主人と使用人という縛りを解かれたためか、一智が『節度を持った態度』を取るように死力を尽くしたことが効を奏したのか、彼女は屋敷では見せてくれたことのないような柔らかな表情を見せてくれるようになった。時折見せる笑顔の、何と可愛らしいことか。無防備に見つめられ、理性をかなぐり捨ててしまいそうになったことは数え切れない。
触れたくてたまらない相手が目の前にいるのに、触れてはならない――確かに、あの拷問の日々に耐えた自分は、褒めてやりたい。
ボヤいた一智に、水谷は当然の顔をして返す。
「もう一つの方に関しては、最初から信じていましたよ。あなたなら必ず成し遂げると」
すでに、一智は新藤商事の『お飾り専務』ではなく、『社を率い

る指導者』としてなくてはならない存在になっている。それが、彼の『実力』だ。
「……――そうか」
この秘書は、顔の筋肉一つ動かさずに言ってのけるのが小憎らしい。一智は口ごもった挙句、ようやくその一言だけ漏らした。
「まあ、取り敢えず、行くぞ」
「はい。お車の準備はできています。頑張ってきてください。三日間は休みにしましたから」
静かな口調だが、水谷の中では最大限の応援をしているのだろう。
一智は執務室を出る前にもう一度鏡を見て、ネクタイを締め直した。そして包みを手に取る。『ソレ』だけは何があっても忘れてはならないものだ。
この二年間、考えに考えて、ようやく彼女に伝えるべき言葉を見つけることができた。
その言葉で、絶対に間違いがない筈だ。
「百合……待ってろよ？」
一智は、遥か遠方の地にいる彼女に向けて、そう呟いた。

17

一智の元を離れてから、もう二年以上が過ぎた。
彼が迎えに来た時は身を切るような寒さだったけれど、あれから季節は二回巡り、そろそろ桜の蕾も膨らみ始めている。
京都に辿り着いた時からお世話になっている小料理屋の開店準備をしながら、百合はふとテレビのニュースに目を止めた。アナウンサーが読み上げた『新藤商事』という一言が耳を掠めたからだ。
すぐに切り替わってしまったアナウンサーの下のテロップには、『新藤商事』『新部門』と書いてあった気がする。続いて映し出されたのは、会見する一智の姿だった。
彼は『あれ』以来、毎月一回は必ず京都にやってきて、百合がそこにいるか、何事もなく過ごしているかを確認して、殆どとんぼ返りで東京に戻っていく――あの日の宣言どおり、指一本、彼女に触れず。
時折、食いつかれるのではないかと思わせる眼差しを向けられることがあったが、彼は極めて礼儀正しく振舞った。
アナウンサーは、『新藤商事』『新部門』『躍進』などの単語を並べていき、そして『専務新藤一智』の名を挙げる。
「一智様、やったんだ……」
彼を軽視する役員たちをねじ伏せるのに、どれだけ頑張ったのだろう。
遊び暮らしてばかりで出社すらままならなかった一智が、随分成長したものだ。
我知らず、ふふ、と小さな笑みが漏れる。
と、不意に。
店のドアに掛けられた鈴が軽やかな音を立てる。開店までは、まだ一時間近くあり、『準備中』の札もかけられたままの筈なのだが。
「すみません、まだ……」

営業スマイルで振り返った百合は、『客』の姿を見て固まった。
「一智様……」
「愛想笑いすら、俺には見せんのか」
苦笑しながらそう言って、彼が近づいてくる。そして、いつものように、触れられない距離で足を止めた。
「今日はお仕事がある日じゃないんですか？　それに、こんな時間に、どうされたんですか？　あ、こちらに出張ですか？」
いつもは休日の昼間に来るのだ――仕事をサボってはいない、という証拠に。平日の夕方に来るなど、この二年間なかったことだ。
一智はその質問には答えずに、ジッと百合を見下ろしている。
そしておもむろに、膝を突いた。
立場が入れ替わって見下ろす形になり、百合は慌てる。
「ちょ……っと、一智様！　スーツが汚れます！」
床はきれいに掃除してあるが、それでも一着何十万円もする服でそんなことをされると、困る。
けれども一智は、腕を引っ張って立ち上がらせようとする百合を制し、スーツのポケットから手のひらに載る程度の小さなものを取り出した。
開かなくても中身はわかるその小箱に、百合の鼓動が速まっていく。
「一智、様……？」
怖いほどに真剣な一智の眼差しが、百合を射抜いてくる。
「俺は、もう充分に『誠意』を見せただろう？」
「え？」
「この二年、お前には指一本触れなかった。仕事もこれ以上はないというほど、やった」
「え、ええ」
先ほどのニュースが百合の脳裏をよぎる。経営や会社のことはよく解らないが、多分、充分すぎる成果なのではないだろうか。でも、それがこの、大の男に跪かれているという状況と、どんな関係があ

るのか。
戸惑う百合の前で、一智が小箱を手のひらに載せ、開ける。
そこから現われたのは、深く透き通った真っ青なサファイアにダイアをあしらった、指輪だった。サファイアは、九月の誕生石ではあるけれど……。百合の誕生日まで、あと半年はある。
「また、そんな高価なものを――」
たしなめようとした彼女の台詞を遮って、一智が口を開く。
「お前を、愛してる。結婚してくれ」
「は……はぁっ！？」
「俺は待った。『誠意』も見せた。『はい』以外の返事は聞かない」
百合に我に返る隙を与えないかのように、一智が立て続けに主張する。
「『はい』だったら、今日、これからすぐに帰ろう。『いいえ』だったら、勝手に連れ帰る」
――それって、結局どちらも同じじゃないの？
百合の中で妙に冷静な自分がそんなふうに考えたが、言葉は出て来ない。はくはくと口を開閉する百合の左手を取ると、一智は勝手に薬指に指輪をはめてしまう。そのサイズは、憎たらしいほどぴったりだった。そのまま、愛おしそうに、指の一本一本に口付けていく。
三本目までいったところで、ようやく状況を理解した百合が手を取り戻す。慌てて指輪を抜き去ろうとしたが、立ち上がった一智に両手を握られてしまった。
「言っただろう？　お前の返事はどうあれ、連れ帰る。もう、お前がいない生活にはうんざりだ。お前がまだ納得していないというなら、あとは家で続けるぞ。二年間、お前のやり方を尊重した。それでダメなんだから、今度は俺のやり方でやる」
「ちょっと、待って！」
「待たない」
百合の抗議はざっくり切り捨てられ、有無を言わさず一智の腕の

中に抱え上げられてしまう。
「でも、あの、急に辞めるなんて、女将さんに悪いから！」
「大丈夫。今日お前を連れて帰ることは、二ヶ月前に言ってある」
「はあ！？」
百合が思わず厨房の方へ視線を走らせると、ニコニコと笑いながら女将が手を振っていた。全て心得ている、と言わんばかりに、力強く頷いていた。
「百合ちゃん、ありがとね。この二年間、助かったわぁ。お幸せにね！」
いったい、どんな伝え方をしたというのか。明らかに拉致られているのに、女将はまるで幸ある門出に娘を送り出す母親のような笑顔だった。
キッと腕の中から睨み上げると、一智はしたり顔で笑みを返す。
「な、俺にも常識ってモンがついてきただろ？」
こんなことをしでかして、どの面下げてそんなことを言うのか。
「完っ全に、非常識です！！」
車に押し込められる百合のその叫びを聞く者は、ドアが締まると同時に、一智以外にはいなくなった。

エピローグ

麗らかな春の昼下がり。
新藤家では、いつもと同じ攻防が繰り返されていた。
「ちょっと、一智様……放していただけません？」
背後から回された腕に、一智の自室の片付けをしていた百合が冷ややかに告げる。
だが、被さってきた身体はがっちりと彼女を捕らえ、多少もがいたくらいではわずかばかりも緩まない。
「いやだ」
「片付けの邪魔です。――ちょっと、どこ触っているんですか！」
「充分、片付いているじゃないか。それに、今日は日曜だろ？」
「でも――ひゃぅッ！」
首筋に触れた温かいものがもたらした刺激に、思わず、百合が悲鳴を上げる。
「ちょッ、今、今、何をしました！？」
「あ、悪い。『痕』ついた」
その瞬間、百合の全身が真っ赤になっていく。一智の腕を振り払って向き直ると、眉を吊り上げる。
「『悪い』じゃありません！　そういうことは、したらダメです！」
一智が吸った場所をゴシゴシとこする百合の手を、彼はまるで宝物に触れるかのような手付きで取った。多分、女性の十人中九人は虜になるだろう甘やかな眼差しが、真っ直ぐに彼女に注がれる。
「お前が『平凡だ』というその目も、鼻も、口も、髪も、最高の抱き心地のその身体も、全部愛してる」
「！！」
両手を握られて、逃げることも耳を塞ぐこともできない百合は、卒倒寸前だ。
その言葉――『愛してる』を知ってから、一智は朝も昼も夜も、

無造作にそれを乱発するようになった。
――本当に、その言葉の意味が解って使っているの！？
そう、百合が思いたくなるほどの使用頻度だ。
「一智様の、非常識！」
今日も、屋敷には百合の悲鳴が響き渡る。

＊

そしておよそ一年後の六月。
百合は純白のドレスに身を包むことになるのである。
その当日も、新藤一族きっての切れ者と言われるようになった主人を叱りとばす彼女の声が屋敷に響いていたとか、いなかったとか。

エピローグ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。
お気に入り登録、評価をしてくださった方には、特大の感謝を！
携帯で読む方には長いと読みにくいかな、と思って、前2作と比べて、一話一話を短めにしてみたのですが、実際のところ、どちらの方がいいのでしょうねぇ？
感想、批評、お待ちしています。
次にこのシリーズを書くとしたら、また弥生と一輝に戻りますが……すみません、全然未定ですので、一度完結扱いにさせていただきます。

1（前書き）

一輝と弥生が心を通じ合わせてから、半年後くらいが経ちました。
ちょっと雰囲気を変えて、ラブコメ風味で。

1

その日、突然、弥生は一智に呼ばれた。
大学帰りのことである。校門を出た彼女にスッと寄ってきた車から、生真面目そうな初老の男性が降りてきたのだ。その人はきれいに四十五度腰を曲げ、そのまま弥生の名前を呼んだ。
「大石弥生様ですね？　私は新藤一智の秘書、水谷と申します。先日の件に関しまして、主人が是非とも貴女にお会いして謝罪させていただきたいと申しております。申し訳ありませんが、ご足労いただけませんでしょうか」
自分の祖父ほどの年の者に頭を下げられて、断ることができる弥生ではない。
丁寧な態度で押し切られたようなものだが、とにもかくにも、彼女はその車に乗った。移動中の車の中で、水谷と名乗った男は一言も発せず、乗って五分ほどで弥生は不安になってくる。
――この車に乗っちゃっても、よかったのかな……。
このことが一輝に知られたら、無防備に知らない人の車に乗るなんて、と叱られるかもしれない。
走っている車から飛び降りるわけにもいかず、弥生はそわそわしながら早く目的地に着いて車が停まってくれることを祈った。
やがて、車は以前に見た事のある塀沿いに走り始め、目的地が近いことを知った弥生は小さく息をついた。
「……別に、取って食われたりは、しませんよ？」
その言葉は隣に座る水谷からのものだったが、口元を緩めることすらなく発せられたので、冗談なのか、真面目なのか、弥生には判断できなった。
「え……あ、はい……」
何となく、曖昧な返事をして、弥生は手元に視線を落とす。
車が門に入り、弥生は玄関で降ろされた。水谷について、純和風

の屋敷の長い廊下を歩く。通されたのは、前と同じ、広い和室であった。
「では、主人が参るまで、少々お待ちください」
水谷はそう残して部屋を出て行った。
ポツンと独り残され、弥生は一智のことを思い出していた。容姿は一輝によく似ていた。けれども、その時に彼から言われた内容の所為もあるのだろうが、怖い人だった、という記憶しかない。その印象が強すぎて、つい、ビクビクしてしまう。
――帰りたい……。
弥生がそう思ったときだった。
襖がスッと開かれ、和服を着た長身の男性が入ってくる。弥生の記憶が正しければ、彼が一智だった。
一智の視線が、弥生に向けられる。一瞬にして、蛇に睨まれた蛙のように、彼女の全身がピシリと固まった。
「あ……の、……こんにちは」
弥生は、何とかそれだけ口にする。
だが、そんな彼女に、正座になった一智が深々と頭を下げたのだ。
「え……？」
呆気に取られる弥生の前で、一智が身体は伏せたまま、顔だけを上げて彼女を真っ直ぐに見る。
「すまなかった」
「え、え……？」
何のことだか、弥生にはさっぱり解らない。
「この間は、きついことを言ってしまった。きっと、辛い思いをしたのだろう？　しかし、それも全て、孫可愛さのため。この愚かなじじいを許してもらえないだろうか？」
「やめてください、そんな……だって、おじい様は一輝君のおじい様なんですから、ああおっしゃったのも当然です。わたし、もう気にしてませんから」
腰を浮かせて言い募る弥生に、一智がにじり寄った。

「そうか！　おお、何と優しい……。一輝には過ぎた嫁だな。弥生さんに出会えたあの子は、幸せ者だよ！」
一部とんでもない単語が入っていたが、半ばパニックになっている弥生は気付かない。
「いえ、わたしの方こそ、一輝君に出会えて、とっても良かったです」
「そうか、そうか！　これからも、愚孫をよろしく頼むぞ？」
「はい、こちらこそ」
はっきり言って、半分くらいは流れで受け答えしている弥生である。そんな彼女が冷静に考える余裕を取り戻す前に、一智が更に畳み掛けた。
「それでだな、今日、ここに来てもらったのは、あなたに謝る他に、一つ頼みごとをしたかったからなんだ」
「頼みごと、ですか……？」
一智にできなくて自分にできることがあるとは思えず、弥生が首をかしげる。一智は姿勢を正して座り直すと、おもむろに切り出した。
「うちの孫――一輝は、まだ小さかった頃から働き詰めなことは知っているだろう？」
「あ……はい」
一智の言葉通り、一輝は本来ならまだ高校生で楽しく遊び暮らしているような年頃だというのに、殆ど休む間も無く総帥の職務をこなしているのだ。本人はさして苦もなくその生活に馴染んでいるようだが、弥生としては、もっと休ませてあげたいな、というのが本音だ。
「孫はな、休みをやろうとしても、いらんと言うのだ」
「そうですか……」
祖父である一智が言っても聞かないなら、弥生などが何を言ってもダメだろう。肩を落とす弥生をよそに、一智が続ける。
「それでだな、弥生さん、あいつと一緒に旅行にでも行ってきてく

れないか？」
「は……ええ？」
「あいつには、俺から休みをやるから、弥生さんから誘ってやってくれ」
「無理です、絶対、頷いてなんてくれません」
両手と首を振って拒否する弥生に、一智が力強く頷いてみせる。
「いいや、あなたから誘えば、絶対に堕ちる！　ちょっと、こう、下から見上げるようにして『お願い』とでも言えば、一発だ。俺が保証する」
そんなことで一輝が首を縦に振るとは、到底思えない。承諾しかねている彼女に、一智は更に詰め寄った。
「あいつを休ませてやりたいと、思うだろう？　まだ子どもなのに、中年のおっさんみたいな生活は憐れだと、思わないか？」
――あれ？
弥生は、何となく違和感を覚える。一智の印象が、何だか……。
だが、その疑問はチラリとよぎっただけで一瞬にして消えていき、更に深める余裕は、その時の彼女にはなかった。
「う……思い、ます……」
「だったら、頼む。試してみるだけでもいい。あなたから言っても聞かなかったら、俺も諦める」
キラリと切れ長の眦に光ったのは、涙だろうか？
弥生はこれほど必死に孫のことを想っている一智に、ほだされる。
「わかり、ました。一輝君がウンと言ってくれるかどうかわかりませんけど、やってみます」
「そうか！　やってくれるか！　よし、さっき言ったように、ジッと見つめて『お願い』だぞ？　それなら、絶対、イケる」
「は……はい……」
目をらんらんと光らせて迫る一智に気圧されて、弥生は頷く。
と、廊下を荒い足音が近付いてきた。
「おお、着いたようだ。弥生さん、先ほどの件、頼んだぞ？」

そう言って、一智は弥生にウィンクを投げてよこす。
――……ウィンク？
思わず弥生は、大きく瞬きをした。
だが、戸惑う弥生が気持ちを整理するより先に、足音は部屋の前に到着し、襖がスパンと開かれる。そこに立っていたのは、話題の人物、一輝である。彼はニッコリと弥生に笑いかけ、次いで全く異なる笑顔を祖父に向けた。
「おじい様、何をなさっておいでで？」
――一輝君、怒ってる……？
同じ笑顔の筈なのに、祖父に向けたものは、明らかに怖い。
だが、一智も一智で、慣れているのか、そんな一輝の眼差しにもニコニコと応えている。
「いや、何。この間は悪いことをしたからな、謝っていたんだよ」
一輝は好々爺の笑みを浮かべている一智を冷たく一瞥すると、微笑みながら弥生に手を差し出した。
「さあ、帰りましょう、弥生さん。お送りしますから」
殆ど反射的にその手を取ると、グイと引き上げられた。そのまま、スタスタと歩き出した一輝に、小走りでついていく。一智には、「さようなら」と一言残すのがやっとだった。
玄関前には一輝の車が停められており、弥生は問答無用で押し込められた。

2

少し時を遡った新藤商事本社ビル執務室で。
一輝は橘（たちばな）からの報告を受けていた。
「どうやら、弥生様がまた一智様に拉致されたようですよ？」
それは、一智の使用人である水谷からの情報だった。わざわざ知らせて寄越したのは、何か裏があるからなのだろうが。
「あの、クソじじい。今度はどんないらぬ世話を焼くつもりなんだ？」
そう言いつつも、一輝は椅子から立ち上がる。
丁度仕事も終わる時間であることも、一智の計画の範囲内なのだろう。一輝が迎えに行くことが前提なのだ。
一智のイタズラに乗るのも業腹ではあるが、かといって、弥生を放っておくわけにもいかない。
「帰るぞ」
「は、車の用意はできています」
流石に、橘の仕事は速い。水谷からの連絡があった時点で、手配は済んでいたのだ。
屋敷に向かう車の中で、一輝はイライラと足を踏む。
以前、一智は弥生を泣かせた。今度同じことをしたら、祖父だとて許しはしない。
本当に、まだ十六歳のわが身がもどかしい。正式なプロポーズはまだしていないが、想いは通じ合っている筈だ。十八になったらその日のうちに籍を入れて、彼女を『自分のもの』にするつもりだった。そうしたら、少しは安心できるような気がする。
屋敷に着くと、一輝は出迎えの者にも応えることなく、一散に、一智が普段来客との面談に用いている和室へ向かった。勢いよく襖を開けると、驚いたような弥生と何やら楽しげな一智が振り向いた。
弥生に、涙はない。

そのことに少しホッとし、一輝は澄ました顔をしている祖父を睨んだ。この男は、孫が何を言っても『暖簾に腕押し、ぬかに釘』なのだ。
「弥生さん、帰りましょう」
そう言って、彼女の手を取る。
和室を出る間際に、弥生が一智に頭を下げ、別れの挨拶をするのが聞こえた。前回、あれほど苛められたというのに。
――この人は、まったく……。
『根に持つ』『恨む』という言葉を知らない弥生に、一輝は半ば呆れ、半ば感心する。
弥生を車に押し込め、ようやく人心地がついた。
そこで、ようやく彼女に問いかける余裕ができる。
「で、おじい様はどんな用件だったのですか？」
単刀直入に切り出すと、弥生は一瞬キョトンとし、次いでホンワリと微笑んだ。
「この間のことを謝ってくださっただけだよ？」
「それだけですか？」
あの一智に限って、そんな筈はないだろう。もっと、何かを企んでいるに違いない。
一輝の念押しに、何故か弥生がモジモジと口ごもる。
「何か、言われたんですね？」
「え、あ……うん」
何故か、彼女の頬が赤い。
「何ですか？　何を言われたのですか？」
重ねて問いかけても、まだ弥生は迷い、やがて覚悟を決めたように顔を上げた。
「えっと、ね……おじい様が、一輝君にお休みをくれるって」
「？」
それが、そんなに照れる話題なのだろうか。だが、続いた弥生の台詞で、一智の意図が何となく読めてくる。

「それで、ね。一輝君、一緒に温泉とか……どうかなぁ？　一泊ぐらいで。ほら、いつもお仕事、頑張ってるでしょう？　なんか、ゆっくりできることがないかなぁって……」
そして彼女は俯き、赤かった頬を更に赤くすると再び顔を上げ、ジッと一輝を見つめてきた。
「わたし、一輝君と一緒に温泉行きたいなぁ。……『お願い』」
これは絶対に一智の罠だ。何かを企んでいるに違いない。それは判っている――判っているのに……。
「……わかりました。行きましょう」
一輝は――堕ちた。
「え？　いいの？　お仕事、お休みしてくれるの？」
パッと、彼女の顔が嬉しそうに輝く。
――ああ、まったく……。
この狭い空間でその表情は反則だと思いながら、一輝は何とか穏やかな笑みを作った。
「まあ、確かに、休息も必要ですから。いつにしましょうか？」
「あ、わたしは来週から冬休みだから、もういつでもいいよ？　葉月と睦月も喜ぶだろうな」
「やっぱり」
「え？」
ポツリと呟いた一輝の声に、弥生が首をかしげる。
「いいえ、何でも。……楽しみですね」
「うん！」
本当に嬉しそうだが、彼女はまだ『幼い』。
世間一般の恋人同士は、旅行に家族は連れていかないだろう。だが、これが『弥生』だった。
早く自分の気持ちに追いついてくれればいいのに、と一輝は願う。
「一輝君？」
視線を落とした一輝を弥生が覗き込む。
「何でもないですよ」

微笑を浮かべてそう答え。

一輝は弥生の頬に手を添えると、彼女の柔らかな唇に、触れるだけの口付けを落とした。

3

移動は、橘が手配した車で行なった。
運転手を除いて、車内にいるのは、一輝、弥生、橘、それに弥生の二人の弟、睦月に葉月だ。
一輝と弥生は最後尾に並んで乗車――ならばいいのだが、そこで弥生の隣に座っているのは、葉月であった。八歳になって反抗期を迎えていてもいい筈のその少年は、未だに弥生べったりの甘えん坊である。最近では、一輝が大石宅を訪問すると、妙に彼からの眼差しが突き刺さるような気がしてならない。
「すげぇな。アウディの七人乗りなんかあるんだな」
しきりに感嘆の声をあげているのは睦月で、彼は助手席に陣取っている。
「残念でしたねぇ、一輝様」
頬杖をついて窓の外を眺めている一輝に、橘が温い微笑を浮かべながらそう言った。
「何がだ？」
訊かなくても判る。判るが――訊いてしまう。
「いえ、別に」
その答えも予想の範囲内だったが、それでも一輝はイラッとした。
一輝とて、弥生と二人きりで泊りがけの旅行ができるなど思ってはいなかった。むしろ、そうなる方が驚きだ。
滞在先の温泉は、有名ではないが、知る人ぞ知る名湯である。橘が予約したのは、二、三家族が泊まれば満室になってしまうような、小さな宿だった。
「そろそろ着きますからね」
橘が、皆に向かってそう声をかける。
その宣言どおり、程なくして閑静な佇まいの旅館が木々の間に見えてきた。

宿に着いた一行は、一輝、大石家三人、橘と運転手の三手に別れて部屋に向かう。
部屋に落ち着いた一輝の部屋に、じきに橘が訪れた。
「何かお困りのことはございませんか？」
「大丈夫だ。弥生さんたちはどうだ？」
「この後、伺おうかと」
「そうか」
一輝は部屋を見回し、特にすることもないことを確認する。
「僕も行こう」
そう言って、先に立って歩き出した。
大石家が泊まる部屋の前まで来ると、中から楽しそうな声が聞こえてくる。
「わあ、スゴォイ。お姉ちゃん、見て見て！　このお部屋、お風呂付いてる！」
「葉月、ほら、早く片付けて。お散歩行けなくなっちゃうよ」
大石家はあまりこういった旅行に出かけることがないらしく、末っ子の葉月は大はしゃぎのようだ。普段の弥生の生活を彷彿させる。
ポスポスと襖をノックし、一輝は一声かけた。
「弥生さん？　片付きますか？」
「あ、一輝君」
振り返った弥生が、彼を認めてパッと微笑んだ。それを向けられる度、一輝の胸の中に何かが降り積もっていくような気がする。
部屋の中に散らばっているのは、葉月の荷物だけのようだ。鞄や上着が転々としている。
「片付きそうなら、少し外を散策しませんか？　少し寒いですが、夕食前にいかがでしょう」
はなから、弥生と二人きりで、などとは期待していない。だが、一輝が来た途端に、部屋の中を探検していた葉月が弥生の腰にしがみつくのには、複雑な思いが胸に沸き上がる。
「お姉ちゃん、僕、行きたいなぁ」

弥生の弟二人はそれぞれ対照的で、上の睦月がどっしりとした大型犬だとすれば、下の葉月は甘えん坊の猫だ。特に一輝の前になると、彼に見せ付けるように姉にくっついているように感じられるのは、決して気のせいではないだろう。今も、甘えた声を出しながら、少年の眼差しは牽制するように一輝にジッと注がれている。

「まずは、片付けてからね」

弟と一輝の間に微かに散る火花に全く気付かず、弥生は柔らかく笑いかけながら弟を諭す。長年親代わりをしてきた姉が、躾に関しては決して引くことはないのが判っているのか、葉月は大人しく彼女から離れると放り出したものを拾い集め始める。

「いいお宿だね」

葉月が素直に片付けるのを見守りながら、弥生が一輝に笑いかけた。

「橘が手配してくれたんですよ。お気に召していただけたなら、よかったです」

そうやって、二人で顔を合わせて微笑みあう。

「ちょっと、お二人さん。ここ、他のモンもいるってのを忘れないでくれよな」

と、それまで黙って座椅子に寄りかかっていた睦月が、初めて声を出した。

冷やかす弟に、心持ち顔を赤らめながら弥生は目を逸らしてしまう。このもう一人の弟は、葉月のように露骨な妨害はしてこないのだが、一輝と弥生の雰囲気を見透かして、いいタイミングで水を差してくる。

せっかくの旅行ではあるが、家族連れでは仕方がない。胸中で舌打ちしつつも、一輝は睦月に笑いかけた。

「悪いな、つい二人きりのつもりになってしまって」

そう、暗に二人だけの時の状態を示唆する一輝に、弥生の頬は更に染まる。当てられた睦月は肩を竦めて横を向いた。

上の弟とのけりをつけたかと思えば、もう一方が勢力を増すのだ。

「お姉ちゃん、片付けたよ！」
褒めて褒めてとばかりに声を上げ、再び葉月が弥生にしがみつく。
「はい、よくできました」
頭を撫でられて、まるで喉を鳴らす猫のように葉月は目を細めていた。弥生も、年の離れた弟が可愛くて仕方がないようだ。
もう、意識の全ては葉月に向けられている。
「じゃあ、お散歩に行こうか」
そう言って、弥生は葉月に上着を着せ掛けた。

＊

旅館の周囲はちょっとした小道になっていて、宿の規模に比して広めな庭が綺麗に整えられていた。薄積りの雪が、そこに風情のある彩を与えている。
弥生は左腕に葉月を、右側に睦月を連れて、一輝の前を歩いていた。
「いいんですか？」
「何がだ」
「何がって、一輝様……」
平然と返す一輝に、橘が口ごもった。
「別に、彼女は楽しそうなんだから、いいじゃないか。普段家のことばかりで、のんびりする暇がない人なんだ」
負け惜しみではなく、楽しそうに寛いでいる弥生を見ているだけで、一輝は、六割方は満足だ。確かに、残りの四割は独り占めしたいという気持ちであることは、否定できないが。
「そうですか？　……せっかくの温泉なのに……」
もったいない、と言わんばかりの橘だ。だが、一輝は、秘書には取り合わずに三人の後をゆっくりと歩く。
不意に、クルリと弥生が振り返った。
影も屈託も裏もない、綺麗な笑顔がそこにある。

普段、おもねる笑い顔ばかりに囲まれている一輝にとって、彼女が見せるものこそが『笑顔』だ。弥生だけが彼に与えられるものの、何と多いことか。

「綺麗だね、一輝君。雪なんてめったに見ないから、嬉しい。連れてきてくれて、ありがとうね」

「いいえ。僕も楽しいですよ」

むしろ、二人きりの旅行でなくて良かったのかもしれない。こんな弥生を見せられ続けていたら、一輝も自分の行動に自信が持てなかった。二人の弟は、いいストッパーになる。

この時期の日が沈むのは早く、空が赤くなったと思ったら、じきに暗くなり始めた。

のんびり庭を散策して冷えた身体を、一行は温泉で温めることにする。

葉月は弥生と入りたがったが、睦月が問答無用で引っ張っていった。

「では、また、夕飯の時に」

「うん、また後でね」

一輝は、ごくわずかな時間とは言え、本日初の二人きりをしみじみと味わう。もったいなくて、しばらくジッと見下ろしていると、弥生は少し身じろぎして目を逸らし、その頬をほんのりと染めた。触れてしまいたいのはやまやまだが、堪えられなくなりそうなので止めておく。

「では」

短くそう残して、一輝は立ち去ろうとする。が。

「あ……」

小さな弥生の声が、彼を引き止めた。

「何か？」

振り返って、首をかしげる。

――部屋に何か不備でもあったのだろうか。

だが、当の弥生は、口を『あ』のカタチのままにして、目を丸く

している。まるで、彼女自身、何故声をあげたのかが判っていないかのようだった。
「弥生さん？」
名前を呼ぶと、彼女は目をパチリと瞬かせる。そして、『ほんのり』赤かった頬を、更に染めていく。
――ああ、もう、反則だろう、これは。
そんな一輝の心中も知らず。
「な、何でもないよ。じゃあね」
弥生は、慌てたように身を翻して立ち去ろうとする。そんな彼女の腕を捕らえ、一輝は引き寄せた。
「何を、言おうとしたんですか？」
心持ち身を屈めて、彼女の耳元にそう囁く。その耳朶は真っ赤だ。
「何でもないよ、ホントに」
もう一度繰り返す彼女の鼓動は、まるで仔猫のように早い。
「まったく……せっかく、人が我慢していると言うのに……」
そう呟きながら、弥生の頬に手を添え、顔を上げさせる。
「一輝、くん……」
「目を、閉じてください」
一輝の言葉に彼女は目を見開き、数回瞬きをし、そして、目蓋を下ろした。
無防備な弥生の顔を少し見つめた後、彼はゆっくりと頭を下げる。
小さく柔らかな彼女の唇に、一輝のそれが触れ――ようとした、その時。
ドン、と軽い衝撃が二人を襲う。
「キャッ！？」
小さな声をあげて弥生が自分の背後を見下ろし、一輝の視線もそれを追った。
そこにあったのは――。
「葉月！？」
可愛らしい弥生の弟が、彼女の腰に抱きついて、無邪気な顔で見

上げていた。
「お姉ちゃん、僕……やっぱり、お姉ちゃんと一緒がいいなぁ」
甘えた声をあげる弟に弥生が呆れたように微笑んで、その頭を撫でた。当然、もう、一輝の腕の中にはいない。彼女は弟に視線を合わせて、言い含めている。
「葉月ももう八歳なんだから、一人でお風呂に入れなきゃ。それに、今日はお家のお風呂じゃないんだからね」
「はぁい」
イヤに素直な葉月だった。きっと、戻ってきたのは他の理由からなのだろう。案の定、弥生の頭の中は、すっかり『母親モード』に切り替わっているようだった。
「あ、じゃあね、一輝君」
ニッコリ笑って葉月と去っていく弥生を見送って。
一輝は小さくため息をついた。

4

夕食はとても豪勢で美味しかった。
弥生と葉月は食べきれなかったが、残した分は睦月がキレイに平らげた。
現在は夜の十時。
普段、きっかり九時には寝かしつけられている葉月は、散々渋っていたが、叩き込まれた生活リズムには勝てず、三十分前に眠りに落ちた。
弥生は、末っ子の母親譲りのその柔らかな寝顔をしばらく見つめてから、睦月に声を掛けた。
「私、露天風呂に行ってくるね」
普段はゆっくりしたくても、なかなかできない。せっかくの機会なので、上気せるほどの長風呂をしてみたかった。
「ああ。先に寝てるかもよ？」
「うん、わたしのお布団、一番廊下側にしておいて？」
「わかった。ごゆっくり」
そう言って、睦月は寝転んだまま、ヒラヒラと手を振って寄越した。
他の宿泊客もなく、廊下は静まり返っている。しばらく歩くと、離れになった形の露天風呂が見えてきた。
女湯の暖簾をくぐって、脱衣所に入る。脱いだ浴衣をキレイに畳み、その間に以前一輝からもらったネックレスを挟む。弥生は、タオル一枚を手にして浴場に向かった。
浴場は広くはないが風情のある岩風呂だ。
湯船に身体を沈めると、少し熱めのにごり湯が気持ちいい。
――こんなにゆっくりお風呂に入るのって、いつ振りだろう……。
うっとりと目を閉じる。
ふと、一輝のことを思い浮かべた。

彼も、寛いでいるのだろうか。
普段とあまり変わらない表情だから、判定が難しい。
その上、いつも甘えたな葉月が今日は一段とくっついてくるので、主役の筈の一輝のことを、あまりよく見られていなかった。
――ちょっとくらい、お話したいな。
そう思った弥生の頭に、ふと、夕食前の一幕のことが思い浮かんだ。
あっさりと行ってしまいそうになった一輝に思わず声が出てしまったけれど……。
その後のことを思い出し、弥生の頬は温泉の為だけでなく、熱くなる。
『あれ』以来、キスは何度もしているけれど、未だに弥生はその雰囲気に慣れない――いつか、慣れる日がくるのだろうか。
遥かに年下の筈の一輝はいつも落ち着いていて、『そういう』場面になった時でも、常にスマートだ。弥生も、早く彼に追いつかなければ、と思ってはいるのだけれど。
現実は、なかなかに難しい。
そうやってモヤモヤと考え込んでいた彼女は、背後での物音に気が付かなかった。

5（前書き）

今回、ちょっと長めです。すみません。

5

夕食を終えて部屋に引き取った一輝は、ぼんやりと身体を座椅子に持たせ掛けていた。彼が『物思いに耽る』という状態になることは、非常に珍しい。

以前、一輝は大石家に数か月間滞在した事がある。もう、四年も前のことだ。

それからも、短時間ではあったが、弥生とはしばしば食事をするなどして時を過ごす事があった。しかし、『大石家』に触れるのは、久しぶりのことである。二人きりの時とは違う彼女から、食事の間中、彼は目が離せなかった。

二人だけで過ごしている時の、どぎまぎしている弥生は、可愛らしい。

だが、ああやって、弟たちの世話を焼く彼女は、何故かそれ以上に一輝の胸を締め付ける。鳩尾の辺りをギュッと握られたような心持ちになるのだ。

一輝は、深々と息を吐く。

そろそろ橘が社からの報告を伝えに来る時間だが、先に少し気分を入れ替えておきたかった。

一輝は部屋を出て、隣の、橘たちのいる部屋をノックした。すぐに彼が顔を覗かせる。

「どうかされましたか？　予定を早めますか？」

「いや、先に、一風呂浴びてくる」

「そうですか。わかりました。では、いつ頃伺いましょう？」

橘の問いに、一輝はしばし考える。

「……一時間くらいもらおうか」

「わかりました。では、二十三時頃でよろしいでしょうか」

五十分ほどあれば、充分だ。

「それでいい。行ってくる……運転手は？」

「ああ、彼ならタバコをやりに行きました」
「そうか。じゃあ、また後で」
あの男からタバコの臭いはしただろうかと思ったが、彼のことはすぐに頭の中から消え去った。そして、露天風呂を目指す。
『男湯』と書いてある暖簾をくぐると、先客が一人いるようだった。衣類を入れる籠が、一つ埋まっている。彼ら一行しか泊まっていないから、睦月だろうか。キレイに畳まれた浴衣に違和感を覚えたが、躾に厳しい弥生のことだ。そのあたりもきっちり言い含めているのだろう。
特に気にせず、一輝は浴衣を脱ぎ、腰にタオルを巻いただけで浴場に入った。
立ち込める湯気の向こうに、湯に浸かった人影が見える。ふと、彼は疑問を覚えた。
――睦月にしては、小さすぎはしないだろうか。
足が止まる。いや、本当は、一目で、それが誰なのか一輝には判っていた。だが、それが現実であることを、脳が否定していたのだ。
人の気配を感じ取ったのか、その人物が振り返る。相手も、ピシリと固まった。
それは、決してこの場にいてはならない人物。
そう。
どう見ても、弥生に他ならなかった。
――自分が男湯と女湯を間違えたのか？
一瞬、そんな考えが頭をよぎったが、そんなバカな間違いをする筈がない。
何が起きているのか、さっぱり判らなかった。
ありえないほどに思考能力が低下した一輝に、先に我を取り戻したらしい弥生がおずおずと声を掛ける。
「一輝、君……？」
その声で、呪縛が解けた一輝は、クルリと踵を返す。
「失礼いたしました」

硬い声でそれだけ残し、一輝は脱衣場に舞い戻った。手早く浴衣を身に付けると、さっさとその場を立ち去ろうとする。
だが、しかし。
開けようとして手を掛けた引き戸は、びくともしない。
――何なんだ！？
浴場を間違えた上に、何故、この戸は開かない？
――いったい、何が起きているんだ？
何かが仕組まれているとしか、思えない。
そこで一輝の頭の中に浮かんだのは、一智の顔だった。
一智が、手を回したのだ。橘が祖父に手を貸すとも思えない、となると、実行犯は運転手か。しかし、彼は長く一輝に仕えている、忠実な男である。悪意からこんなことをしたわけではないだろう。恐らく、口のうまい一智に、いいように言い包められたのに違いなかった。
――あんの、クソじじい！
心の中で罵りながら何とか戸を開けようと試みるが、さすが高級旅館なだけあって、びくともしない。こうなったら、三十分強の間、橘が捜しにくるのを待つしかないのだろう。
あの祖父は、いったい一輝に何をさせたいのか。その答えは本人に聞かずとも、知れた。
――人の理性を、いったいなんだと思っているんだ！？
一輝とて、健康な十六歳男児である。決して、淡白なわけではなく、常に己を律してコントロールしているだけなのだ。自分の望むようにことを進めていくのは容易だったが、彼女の気持ちを置き去りにはしたくない。ちゃんと大切に彼女の気持ちを育てていきたかった。
それなのに。
「くそ、じじい」
今度は、声に出して罵る。
壁に掛けられた時計を見上げると、二十二時三十分を少し過ぎた

くらいだ。約束の時間になっても戻っていなければ、橘が捜しにくるだろう。あと三十分、耐え抜ければいいのだが――それは一輝にとって、永遠にも近い三十分になるだろう。
ギリギリと歯軋りをする一輝に、曇りガラス越しに声が掛けられる。
「一輝、くん？」
おずおずと、まだそこにいるかを確かめるように。
一輝は二、三回深呼吸をして、己を立て直す。何とか、いつもの声を取り戻した。
「弥生さん、すみません。ここの戸、鍵を掛けられてしまったようで……。しばらくしたら橘が僕を捜しに来るでしょうから、それを待ちましょう。こちらは寒いので、湯に浸かっていてください」
努めて穏やかに、そう伝える。
「え、でも、一輝君も寒いでしょう？　わたしはもう充分浸かったから、一輝君も温まって？」
「いえ、大丈夫です。ちゃんと上に羽織ってきましたから。弥生さんの方こそ、湯冷めしますよ」
言いながら振り返り、曇りガラス越しの彼女が視界に入って、また元に戻る。
「いいから、湯に浸かっていてください」
――むしろ、お願いしますから。
心の中で、一輝はそう付け足した。そして、このやり取りをしているそばから、小さなくしゃみが響く。
「ほら、早く湯の中に戻ってください」
「ん……ありがとう」
その声と共に、ガラスの向こうの姿は消えていった。
一輝は、ガラスに背を持たせ掛けて座り込む。
しばらくの沈黙。
「……すみません」
「え？」

唐突な一輝の謝罪に、浴場でパシャンと小さな水音が響いた。
「多分、これ、祖父の悪巧みなんです。まったく、何を考えているんだか……」
舌打ちせんばかりの一輝の声音に、微かな笑い声が返る。
「弥生さん？」
「ううん。あのね、ちょっとおじいさんに感謝しちゃった」
「感謝、ですか？　この状況で？」
「うん。だって、こんなことがなければ、二人っきりになれなかったもの。ほら、ずっと葉月がくっついているでしょう？　ゴメンね、ホントは一輝君が楽しむための旅行だったのに。お散歩の時もね、二人だけで歩けたらなぁって、ちょっと思っちゃった」
一輝は咄嗟に言葉を返すことができなかった。何度か唾を呑み込み、ようやく返事をする。
「……でも、こんな……風呂場に男と閉じ込められるなんて……不安じゃないんですか？」
――もしかして、未だに『男』認定されていない……？
キス止まりとは言え、『それなり』の関係ではないのだろうか。あるいは、そう思っていたのは自分だけだったのかと、一輝の中に不安がこみ上げてくる。
そんな一輝の心中を知らずに、軽やかな声は続いた。
「不安になんて、ならないよ。だって、一輝君だもん」
やはり、そうなのかと、一輝が落ち込んでいくそばで、弥生は更につづっていく。
「一輝君は、わたしを困らせる――コトはするかもしれないけど、イヤなことや怖いことは、絶対しないもの。……あのね、わたし……一輝君が――傍にいると、ドキドキはしちゃうけど、イヤじゃないんだよ」
「弥生さん……」
「もうちょっと、もうちょっとだけ、待ってね。わたし、ちゃんと、一輝君のこと――」

そこで、彼女の声が途切れる。やや不自然な終わり方を怪訝に思いながらも、一輝はしばらく待ってみる。だが、それっきりだった。
「弥生さん？」
浴場へ向けて声を掛けたが、返事はない。
「弥生さん、大丈夫ですか？」
もう少し声を大きくしてみた――が、やはり返事はない。
時計を見上げれば、二十三時まで、あと数分だ。もう少し待てば、橘がやってくるだろう。
だが、しかし。
「開けますよ、いいですか？」
はっきりしない状況に業を煮やし、一輝はそのガラスの引き戸をそろりと開ける。
直後、目に入ってきた光景に、入り口に重ねておいてあるバスタオルを数枚引っつかんで浴場へ駆け込んだ。彼女は湯船の縁に伏せて、ピクリともしない。
「弥生さん！」
自分が濡れるのには構わず、彼女を湯から引き上げた。視線を逸らしつつ、取り敢えずバスタオルを手当たり次第に巻き付けて、抱き上げる。
脱衣場に戻って、きちんと畳まれた弥生の浴衣を籠から取る。と、そのひょうしに、何かがシャリンと音を立てた。見下ろした先には、可愛らしい花をモチーフとしたネックレスが落ちていた。
それを目にした一輝の胸が、詰まる。そのネックレスは以前に彼がプレゼントしたものだが、実は発信機が仕込まれている代物だった。すでにその事は弥生にばれているので、てっきり、もう着けてくれてはいないと思っていたのだ。いくらそのお陰で危機を逃れたことがあるといっても、流石に気持ちが悪かろうと思っていたのに。
一輝はネックレスを拾い上げると、ポケットにしまった。
そして、弥生に浴衣を着せる――タオルを剥ぎ取る勇気はなく、二、三枚巻き付けたタオルの上からだ。

脱衣場には椅子などはない。かといって、弥生を床に寝かせるわけにもいかなかった。
やむなく、一輝は彼女を抱えたまま、膝の上にのせる。
つくづく、タオルを巻いたまま浴衣を着せておいて良かったと実感した。
――早く来てくれ、橘。
もう、それは祈りに近い。
今、こうしている間も、密着した柔らかく温かな身体はその存在を目一杯主張している。
「ん……」
一輝が弥生から意識を逸らそうと懸命になっている、その時。腕の中から小さな声が上がる。
目が覚めたのだろうかと見下ろすと、ぼんやりと彼女が目を開いていた。その眼差しからは、半分以上は夢の世界にいることが手に取るようにわかる。
「……かずき、くん……？」
舌足らずな、甘い声。
「はい……？」
相手は正気ではないのだと己に言い聞かせ、一輝は返事をする。
が。
「……だいすき……」
弥生は、それだけ呟き、また目を閉じた。それはもう、うっとりとした笑みを浮かべて。
つい先ほどの弥生の台詞がなければ、一輝はもう己の行動を制御することなどできなかっただろう。
『信頼』というものが、この上なく強力な抑止力となり得ることを、つくづく思い知らされた一輝である。
――頼む、橘。頼むから……助けてくれ。
一輝がこれほど切実に片腕の名前を呼んだことは、今までなかった。

しかし、この生殺しの状態が解消されるまで、まだしばらくの時を要するのである。

6

目を開けると、すぐ傍にあったのは一輝の顔だった。
――え？　あれ、何で？
確か、温泉に行った筈だったのに。
しばらく考えて、やがてもやもやと記憶が戻ってきた。
思わず、布団の中を覗いてしまう。そこにある彼女の身体には、きっちり浴衣が着付けられていた。
自分で浴衣を着た記憶は、皆無だ。
言葉もなく、弥生は視線を一輝に戻す。
彼の顔は、ひどく生真面目で。
「申し訳ありません」
その顔のまま、唐突に、謝罪の言葉を口にする。
「……え？」
「自分を抑えられませんでした」
「……え？」
「責任は、取ります。取らせてください」
「何の、こと？」
キョトンと、本当にキョトンと、弥生は訊き直してしまう。だが、一輝は真剣な顔のままで、とんでもないことを言い出した。
「すみません。耐えなければいけないと、思ったんです。でも、つい……我慢できなくて……」
一輝の真面目な顔が、あまりに面白くて。
思わず、弥生はクスリと小さな笑いをこぼしてしまう。それが引き金で、クスクスと、止められなくなる。身体を起こしながら、笑い続けた。
「弥生、さん？」
呆気に取られている一輝が、更に笑みを誘う。
「一輝君が、そんなことするわけないよ」

「え？」
今度は、彼が疑問符を浮かべる番になる。
「わたしの知らないうちに何かするなんて、一輝君は絶対にしない」
「……」
絶句する一輝に構わず、弥生は続けた。
「それにね、『責任』っていう言葉は、イヤだな。一輝君は、わたしのことで何かを負う必要なんて、ないんだから。一輝君が要らないって言うまで、わたしの方から追いかけてくよ。一輝君は、どんどん歩いて行ってね。時々はちょっと離れちゃうかもしれないけど、絶対、追い付くから」
そう言って、ニッコリと彼に笑いかけた。それを向けられた当の本人は、泣きかけているような、笑っているような、何とも複雑な顔をしている。
「まったく、あなたという人は……」
その言葉とともに。
弥生の身体は、優しく、けれどもきつく、一輝の腕の中に捕らわれる。
「……どれだけ、僕を甘やかせば気が済むんですか」
溜息とともに、耳元でそんなふうに囁かれた。そんな彼に、弥生は心の中でそっと返す。
――甘やかしてくれているのは、一輝君の方だよ。
そうして、両腕を伸ばして、大きな彼の背中を抱き締めた。それが今の彼女にできる、精一杯。けれども、返してくれる一輝の腕の強さが、自分はこれでいいのだと教えてくれる。その腕は、焦らなくてもいい、ちゃんと待っているから、と、弥生に伝えてくれていた。

＊

数日後、新藤の屋敷で落胆に肩を落とす者がいたことは、言うま

でもない。

6（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。
ちょっと狼狽える一輝を書きたいな、と思いまして。
一輝がホントに『何か』したのかどうかは、皆さんのご想像のままに。
また、ひとまず完結です。全くの未定なのですが、結婚式まで持っていきたいなぁ……。でも、本当に未定です。

1（前書き）

一輝と弥生のサイドストーリー第二弾です。

1

俺は常に注目の的だった。
系譜を辿れば三十代以上を遡れる由緒正しい血筋。
湯水のように使っても尽きない財力。
加えて、このルックス。
何も言わずとも人は俺の周りに群がり、俺の視線の動き一つでマスコミは右往左往する。
――筈だったのに。
最近、それが狂い始めた。
そう、アイツのせいで……。

＊

弥生（やよい）は、困っていた。
ここ数日、毎日目にしている姿に気付き、どうしようかと足を止める。
「あれ、あの人またいるんだ」
弥生の心の声を代弁してくれたのは、友人の加山美香（かやま みか）で、彼女が『また』と称したのは、伊集院隼人（いじゅういん はやと）と名乗る青年だった。彼は、年の頃は二〇代半ばだろうか。高級そうなツーシートのスポーツカーに、カジュアルだけれども仕立ての良さそうなブランド物の装い。彼は、弥生が帰る頃に合わせて、大学の正門で待ち構えているのだ――毎日。
最初に声を掛けられたのは、二週間ほど前――ゴールデンウィーク中に行なわれた学祭の時である。
弥生と美香が所属しているゼミではメイド喫茶を開いたのだが、伊集院と出会ったのはその時で、普通に、客とウェイトレスとしての出会いの筈だった。

メイドのコスチュームは二種類――クラシックな膝丈の正統派のものと、明らかに某電気街にいそうなものとが用意された。美香はシックな古典的メイドに変身したが、選択肢もなく弥生にあてがわれたのは、後者の方であった。二人を指名してくる客層ははっきりと分かれていたのだが、そんな中で弥生を指名してきた伊集院は、異彩を放っていた。

その時、彼は、テーブルに肘をつき、爽やかに微笑んで言ったのだった。

「君、可愛いね」

と。

ソレはやっぱり、小学生を可愛いと思うレベルなのだろうかと複雑な心中を隠しつつ、その時は笑顔を返してお終いになったのだが。翌日から、何故かああやって、毎日弥生を待ち構えている。

「いい年して、そんなに暇なのかな」

美香の声に呆れたような響きが入るのも無理はない。大学生というにはトウが立っており、普通は何がしかの職に就いている年頃の筈だ。大学院生などの可能性もあるが、その割には豪勢な格好をしている。どこかのボンボンなのか……。

――一輝(かずき)君はあんなに働いているのにな。

ふと頭に浮かんだ大事なひとを想い、弥生は胸の中でポツリと呟く。

弥生の――恋人である一輝は、いわゆる御曹司なのだが、まだ十六歳だというのに、ずっと働き詰めだ。三月で二十歳になった彼女よりも、よほど社会慣れした少年だった。彼の方が何とかやりくりしてしばしば食事に連れて行ったりしてくれているけれど、一回一回の時間は短く、二時間取れたら上出来である。寂しいな、とは思いつつも、仕事なのだから仕方がなく、それ以上は要求できない。

そんな一輝に比べると、この伊集院という男性は一体何をしている人なのだろうかと不思議になる。

「で、アレ、どうするの？」

美香が弥生を見ながら訊いてくる。そこに微妙に呆れの色が混じっているのは、気のせいではないだろう。
「どうもしないよ。それに、今日は一輝君と約束してるし」
「あ、そうなんだ。結構久し振りじゃない？」
「うん」
多分、今、自分はものすごく幸せそうな顔をしているのだろうな、と自覚しつつ、弥生は頷いた。
「一輝君、ここのところずっと忙しかったから。学祭にも来られなかったし」
「ああ……橘さんだっけ？　あの人がずいぶん写真を撮っていったよね」
美香がサラリと言ったその台詞に、弥生の反応は一拍遅れた。二、三歩進んでから足が止まり、そして、澄ました顔で隣を歩いている親友を見上げる。
「え、ウソ！？」
寝耳に水だった。帰り際、彼が妙に満足そうだったのは、その為か。あんな恥ずかしい姿を記録に残されてしまっていることを知らされ、弥生の頬が熱くなる。当然、一輝も見たに違いない。学祭を一緒に回れなかったのは残念だったが、あのメイド姿を見られずに済んだことは、ちょっとホッとしていたというのに。
「大丈夫、可愛かったよぉ？　ミニスカメイド姿、彼も喜んでるんじゃない？　サービス、サービス」
ニヤニヤと、ちょっと意地悪な笑い方で美香が言う。そう言われると、余計に顔に血が上ってしまう。
「もう！　もっと早く教えてくれたら良かったのに！」
よりにもよって、これから会うぞ、という時に教えなくてもいいではないか。一輝の姿をまともに見られなくなってしまう。
「ゴメンねぇ、知ってるかと思ってた」
全然、申し訳なさそうな風情なく、美香が笑った。
――絶対、楽しんでる……。

それは間違いない。
恨みがましそうに見る弥生に、彼女が耳打ちする。
「ほら、アレ、こっち見てる。気付いたみたいだよ」
つられて視線を向けると、爽やかに笑いながら片手を上げる姿が目に入ってきた。そして彼は、そのまま真っ直ぐ弥生に向けて歩いてくる。
「弥生ちゃん、この後は暇？」
真っ白でキレイに整った歯並びを見せながら、伊集院がそう問いかけてくる。承諾してもらえると信じきっていそうな笑顔だが、その自信はどこから来るものなのか――弥生は、これまでの伊集院の誘いを全て断っているというのに。
「今日も、ちょっと……」
「そっかぁ。じゃ、明日は？」
「明日も、ちょっと……」
「なら、明後日」
「明後日も……」
「じゃあ、いつならいい？」
「えぇっと……」
いったい、いつまで続けるのかと思ってこっそり溜息をついた弥生の視界に、見慣れた車が滑り込む。そこから出てきた姿に、ホッとした。
「あの、今日会う約束してた人が来ちゃったので……失礼します。じゃあね、美香ちゃん、また明日」
伊集院にはペコリと頭を下げ、美香には小さく手を振って、弥生は先ほど車から降り立った人の方へと駆け出した。
「橘（たちばな）さん！」
名前を呼ぶと、橘は軽く手を上げて応えてくれる。けれど、そのどこか鋭い視線は、弥生ではなく、彼女の背後に注がれているように見えた。
「橘さん？」

彼のもとに辿り着いて、弥生は小さく首を傾げる。橘はそんな彼女に気付いて、いつもの穏やかな笑みを浮かべた。
「ああ、失礼しました。一輝様は会議が長引いてしまって……もう少し時間がかかりますので、先にお迎えにあがりました」
車の中を覗いた弥生の眼差しにがっかりした色が浮かんでしまったのか、橘が申し訳なさそうにそう付け加えた。弥生は慌てて首を振る。
「あ、いいえ、お仕事ですもの。しょうがないです」
無理をしてではなく、心の底からそう思っている弥生に、橘は目を細くする。
「では、車へどうぞ。うまくすれば、私たちがお店に着く頃には、一輝様もいらっしゃっているかもしれません」
促されて、弥生は車に乗り込んだ。
走り出してしばらくすると、何か考え込んでいたような橘が口を開いた。
「先ほど、弥生さんとお話されていた方は……？　森口様とは違ったようですが」
森口、とは、弥生の男友達である。彼と間違えるような人がいたかしら、と頭を巡らせ、そして、思い当たって「ああ」と声をあげる。
「あの人は……伊集院さんとおっしゃってました。学祭の時に、お客様でいらっしゃったんですけど……」
伊集院の真意が解らない弥生は、そこで言葉を濁す。
「よく、お会いになられるのですか？」
「ええと、会うっていうか……」
「ああ、ちょっと語弊がありますね。弥生さんに会いに来られるのですか？」
「……よく、声を掛けられます」
「そうですか」
橘はそう呟くと、黙り込む。

「橘さん？」
「ああ、いえ。わずらわしくはないですか？　一輝様にご相談されては？」
「大丈夫です。一輝君は忙しいのに、こんなこと相談して時間潰したくないです」
ニコッと笑って、弥生はそう受け流した。実際、『こんなこと』よりも話したいことはたくさんある。橘は彼女の返事にフッと頬を緩ませると、頷いた。
「そうですか……でも、お困りだったらおっしゃってくださいよ？　私でもいいですから」
「ふふ、一輝君に内緒で橘さんだけに相談したら、一輝君が拗ねちゃいますよ」
弥生の言葉に、橘は口ごもる。確かに、その通りに違いなかったから。
二人は顔を見合わせて、小さく笑みを交わした。

2

「じゃあ、あたしも失礼します」
「あ、ちょっと待って――美香さん、だったよね」
車に乗り込み走り去った弥生を見送って、頭を一つ下げて立ち去ろうとした美香を、伊集院は引き止めた。彼女が「何か？」と言いたげな眼差しで振り返る。
これまで――特に女性には――ちやほやされてきた伊集院にしてみたら、弥生にしろ美香にしろ、これほど無感動な目を向けられるのが納得いかない。一瞬鼻白んだが、気を取り直して笑みを浮かべた。
「あのさ、さっきの人、弥生ちゃんの彼氏？　それにしちゃ、随分年食ってるようだったけど……」
問われて、美香が少し考え込む。
「ああ……彼、ね。まあ、そんなようなものですよ」
それだけ言って、再び彼女は行こうとするが、何か思い直したように振り返り、どこか人の悪い笑顔を伊集院に向けた。
「あの子に手を出そうとしても、無駄ですよ。彼氏、あの子にベタ惚れですから。絶対、手放しません。下手にちょっかい出したら、痛い目見ると思いますよ。あの子も、何気に彼氏のことしか見てませんしね」
それだけ言って、彼女は今度こそスタスタと歩き去ってしまう。
取り残された伊集院の胸のうちには、確かに微かな不安が芽生えていた。
――全然、相手にされてない……？
そんな呟きが胸中をよぎっていく。
だが、次の瞬間、彼はイヤイヤと首を振った。断じて、そんなことはない筈だ。これまで、自分が声を掛けた女性は誰も皆、うっとりと目を輝かせていたではないか。

――きっと、押しが足りないに違いない。
伊集院は作戦を練り直すことにする。
先ほど弥生を迎えに来たのは、間違いなく、新藤一輝の秘書だった。常に主の傍から離れない男が直々に足を運ぶくらいだから、弥生が新藤一輝の想い人だということは確かなのだろう。
これまで、新藤一輝の身辺には、浮ついた噂は殆どなかった。時たまワイドショーで取り沙汰される事があったが、どれも間を置かずして、それを報じた報道機関から訂正と謝罪が発表された。
十五歳で新藤一輝が新藤商事の総帥の座におさまったとき、伊集院も含め、殆どの者が『お飾り』に過ぎないだろうと侮った。しかし、周囲の予想をよそに、あの少年は恐ろしいまでのキレ者ぶりを世間に見せ付けたのだ。しかも、賞賛に溺れることなく、妬みに怯むことなく、淡々と。それは、十五歳とは思えない落ち着きぶりだった。
あれからもう二年近くになるが、彼に対する評価は上がりこそすれ、下ることはない。どうせ、その若さが物珍しいだけさ、と嘲笑っていた者の顔も、徐々に引きつってくる。
伊集院も、そのうちの一人だった。
優れた経営手腕にもムカつくが、何よりもその澄ました顔が気に食わない。
何かで顔を合わせる度につついてみたが、新藤一輝にはことごとく笑顔で受け流された。
せめて、イヤな顔の一つでも見せれば、伊集院もそこまでムキにはならなかったのに。
何か、弱みがないものかと思っていたところに漂い始めたのが、彼の『想い人』の噂である。今回のこの『噂』は流布し始めてしばらく経つのだが、報道にはのらない代わりに、消えもしない。そこが妙に信憑性を持たせているのだ。
新藤商事の下請け工場の娘だということやら、年齢やらを辿っていって、到達したのが彼女――大石弥生である。

あの鉄面皮がどんな女を選んだのかと思ったら、アレだった。
正直言って、ガキ臭い。本当に二十歳なのかと、心底から疑った。
だが、どうやら噂はホンモノらしく、新藤一輝は多忙な時間を調整して、今日のようにしばしば逢瀬を重ねているようなのだ。
それほどまでに想っている相手を盗ってやったら、ヤツはどんな反応を見せるのだろうか。
その光景を思い浮かべて、伊集院は久しぶりに胸がすく様な感覚を覚えた。
彼が声を掛ければ自然と手の中に落ちてくるのが、女というものだ。
よし、やってやるぞと気合を入れて臨んだのだが。
――反応が、ない。
毎日通い詰めては秋波を送っているのに、弥生は全くノってこない。
――いや、そもそも、『そういう意味で』誘いをかけていることに気付いているのだろうか？
「まさか、な」
あれほどアプローチされていて、その意図に気付かないわけがない。普通は、気付く筈だ。新藤一輝だけでなく、その恋人にまで相手にされないという事態など、有り得る筈がない――彼的に。
「まさか、だよな」
伊集院は、もう一度、声に出して確かめる。その二度目の呟きに強さがないことには、気付かなかったことにした。

3

短い逢瀬を終え、弥生を家まで送り届けた帰りの車の中。一輝は彼女のことをゆっくりと思い返していた。

しばらく色々な話をした後、弥生が、おずおずと『写真』について問い掛けてきたのだ。一輝は、考えなくても何のことを言っているのか察しがついた。一瞬、すぐに答えようかどうしようか迷ったが、モジモジしている彼女を見ていたら、ついイジメてみたくなってしまったのだ。

何のことを言っているのか判らない、という態度を貫き通す一輝に、弥生は更に頬を染めながら、小さな声で「メイドの……」とだけ口にした。そら惚けて「あれですか」と答えると、彼女は口ごもりつつ、データの消去を希望してきたのだ。

だが、弥生のコスプレ姿という貴重なものを、手放すつもりはさらさらない。そもそも、彼女の写真を消去するなど、有り得ない話だ。

一輝がニッコリ笑って「イヤです」と断言した時の彼女の様は、抱き潰してやりたくなるほどだった。思わず口元が緩んだが、隣から掛けられた声で真顔に戻る。

「一輝様」

視線をそちらに投げると、橘が何やら神妙な顔をしていた。

「何だ？」

「それが、ですね。弥生様はお伝えしなくていいと仰っていたのですが……」

そこで橘は口ごもる。しかし、弥生の名前を出しておいて途中で止められても気分が悪い。一輝は目だけで先を促した。

「今日、弥生様をお迎えに上がった時、伊集院隼人様をお見かけしました」

「伊集院……？　伊集院グループの？」

「はい」
伊集院グループは、新藤商事とは比較にならない由緒と財力を持つ、日本のトップ企業だ。加えて、跡取り息子である隼人は容姿も優れており、その周囲には常に女性の噂がまとわり着いている人物である。そんな彼が、普通であれば、弥生と接点を持つ筈がない。となると、原因は自分だろうと、一輝は容易に思い至った。
振り返ってみれば、何かとちょっかいをかけてくる男だ。企業レベルとしたら獅子と鼠のようなものなのだから、放っておいてくれればいいと思うのだが、遥かに年下の者が色々と話題になるのが、余程楽しくないと見える。彼が跡継ぎと思うと伊集院グループの先行きが不安になるが、あれほどの企業になると参謀役が固められているから、トップに多少難があっても許されるのかもしれない。
「いかがいたしましょうか？」
呆れたような小さな溜息をついた一輝に、橘が伺いを立てる。だが、一輝はそれに肩を竦めただけだった。
「別に、放っておけ」
「よろしいので？」
「何が心配なんだ？」
平然とした顔の主に逆に問い返されて、橘は面食らう。弥生に対する一輝の独占欲の強さは、半端ではなかった筈だ。
「伊集院様が弥生様に言い寄っても、構わないのですか？」
恐る恐るそう尋ねた橘に、一輝は小さく笑みを漏らした。
「……一輝様？」
「いや――弥生さんは、あの森口さんの気持ちにも気付いていなかった人だぞ？　伊集院の上っ面の言葉に騙される筈がない。万一口説かれていると認識できたとしても、彼女がフラフラすることはないさ。あのお坊ちゃんは育ちがいいからな、弥生さんに対して無体な手を使うこともないだろうし」
伊集院が耳にしたら激怒しそうな台詞だが、幸いなことに当人はこの場にいない。

一輝にとって不満なのは、あのボンボンが弥生に手を出そうとしていることよりも、何故その経緯に至ったかの方だ。弥生のことはまだ公にしたくはないので、彼女のことが漏れないように細心の注意を払ってきたつもりだった。

妙に意図的な噂の流れ方からして、誰かが裏で糸を引いているのに間違いはない。となると、思い浮かぶのは、『あの人』だけだ。どうせ、弥生に男を近づけさせて一輝を焦らせようとでもいう腹積もりなのだろうが、今回は完全な計画倒れだ。あんな男相手では、妬く気も起きない。

――一応、弥生さんの身の安全の為に、何か手は打っておくか。

ヤレヤレと溜息をつき、一輝はシートに身を沈めた。

4

――いったい、彼は、何をしたいのだろう。

家中の花瓶を使っても活けきれない薔薇の大群を前にして、弥生は首をひねっていた。

『彼』とは当然、伊集院隼人のことである。

花は確かに好きだが、黒に近い深紅の大輪の薔薇は、正直に言って、自分にはあまり似合っていない。もっと、華やかな人向けのものではなかろうかと、弥生は思う。

そう言えば、以前に一輝が贈ってきたピンクの薔薇はきれいだったな、と振り返った。普通のものよりも丸い形と柔らかな淡いピンクが何となく弥生に似ているのだと、一輝は言っていた。彼には自分がそんなふうに見えるのかと、くすぐったく感じたのを覚えている。一輝のくれる花束は決して大きくはないのだけれども、『弥生のために選んだ』という気持ちがひしひしと伝わってくるのだ。

それに比べると、伊集院がくれたこの薔薇の大群は、きれいであることは認めるが、何故か心には響いてこない。

「ポプリにでもしちゃおっかな……」

始末に困って、そう呟いた時だった。

弥生の携帯電話が、鳴る。

表示を見ると、知らない番号だった。怪訝に思いながらも出てみると、爽やかかつ華やかな声が耳に響く。

「やあ、弥生ちゃん。薔薇は届いた？」

「伊集院さん……」

予想外の人物に、名前を呼んだきり、後を続けられない。

彼には携帯電話の番号を問われたことがあったが、教えはしなかった。

「この番号、どこで――？」

思わず弥生は訊いてしまったが、伊集院は悪びれる様子もなく答

える。
「ああ、お友達に訊いたら教えてくれたんだ。で、薔薇は届いた？　綺麗でしょう？」
美香ではないだろう。彼女だったら、弥生に黙って教えてしまうということはない。ゼミの誰かか。
困ったなぁ、と思いつつ、薔薇は確かにきれいなので、口ごもりつつも答える。
「ええ、はい……」
「じゃあさ、今晩、ディナーをどう？　夜景が綺麗なホテルがあるんだよ」
「あ……いえ……」
断られるとは微塵も思っていなさそうな口調の伊集院である。いつものように断ろうとして、弥生はハタと思い当たった。
――もしかして、いつも断るから、ムキになってるのかな。
見るからにモテそうな伊集院は、誘いを断られるという経験が滅多にないに違いない。だから、弥生が誘いを受けるまで引っ込みがつかないのだ。
そう考えると辻褄が合う気がする。
合点がいった弥生は、それならば、と頷いた。
「判りました」
電話の向こうは、一瞬の沈黙。承諾されると思っていなかったのだろう。
「本当に？」
「はい。何時頃ですか？」
「そうだな、六時はどう？　迎えに行くよ」
「あ、いえ、場所を教えていただければ、行けますから」
また、少しの間。
「……そう？　じゃあ、『帝王ホテル』に来てくれる？」
「『帝王ホテル』、ですか……」
「あれ、イヤ？」

あのホテルには、イヤな思い出と良い思い出の両方がある。弥生は少し迷って、返事をした。
「いえ……六時に帝王ホテルに行きます」
「待ってるよ」
「はい」
電話を切って、弥生は時計を見る。時間はまだまだあった。
一輝に言っておいたほうがいいのだろうか。そんな考えが頭の中をチラリとよぎったが、やはり、こんなことで彼を煩わせるのも気が引ける。どうせ今回だけのことなのだし、と自分を納得させた。次に会った時に言えばいい。
弥生は小さく溜息をついて、夕飯時に家を留守にする準備に取り掛かった。

5

電話を切った伊集院は、ようやく次の段階に進めることに、心ならずも安堵した。

やはり、女を落とすには深紅の薔薇に限る。五軒の花屋で買い占めた甲斐があったというものだ。

早速、帝王ホテルの最上階にあるレストランを借り切るように手配をさせる。

六時から始めれば、食べ終わる頃には見事な夜景が見られるだろう。雰囲気を作って口説けば、あんな何も知らなそうな女など、イチコロだ。

――そう、これまでうまくいかなかったのは、『環境』が悪かっただけなのだ。その証拠に、薔薇を山ほど贈ったらすぐに折れてきたではないか。

電話での弥生の応対はややぎこちないように感じられたが、きっと、はにかんでいたのだろう。

伊集院は、俄然自信を取り戻す。

今晩で、一気に攻め落とすつもりだった。

そうしたら、彼女をパーティーに連れて行こう。惚れた女の肩を他の男が抱いている様を見る『アイツ』の悔しがる顔を想像すると、今から爽快な気分になる。

どうにも気が逸り、伊集院はいそいそと身支度を整えると、まだ約束の時間には早いがホテルへと向かった。

客が一人もいない、ガランとしたレストランの中を、伊集院はグルリと見渡す。当然のことながら、今日もここは予約で満席の筈だった。それらを全てキャンセルさせ、貸切にさせることができたのは、伊集院という家の持つ力だ。『アイツ』の家など、その足元にも及ばない。

浮かれる伊集院の中では、二時間三十分という決して短くない時

間があっという間に過ぎていく。
六時五分前に、弥生がレストランの入り口に姿を現した。
これもやはり、弥生が伊集院に気がある証拠だ。今まで付き合った女性は、皆、約束の時間に来たためしがなかった。弥生は、よほど早く彼に会いたかったのに違いない。
彼女は淡いピンクのワンピースを身に着けていた。こう見ると、確かに『美人』ではないが、そこそこ『可愛らしい』。
「やあ、こんばんは。待っていたよ。さあ、掛けて」
彼女の背中に手を添え、一番見晴らしのいい窓際の席へと案内する――手が触れた途端に少し身を引かれたのは、気のせいだろう。
「あ……ありがとうございます」
伊集院が椅子を引いてやると、彼女は意外に慣れた様子で腰を下ろした。
「さあ、メニューは俺が決めてもいいかな？」
「はい、お願いします」
この時、弥生が「メニューなど何でも構わない」と思っていたことなど、伊集院は知らない。彼は全てを自分の都合の良いように解釈していた。
あまり会話なく食事は進んでいく。伊集院の甘い言葉にも、彼女は「そうですか」「ありがとうございます」など、簡潔な返事をするだけだ。
――どうにも勝手が違う。
普段は、相手の方がうるさいほどに喋るから、伊集院は適当に相槌を打つだけでいい。その立場が逆転していた。ということは、今、弥生は彼のことを「うっとうしい」と思っているのだろうか。
イヤイヤそんなことはない筈だ、と己を鼓舞して、伊集院はいっそう艶やかな微笑を弥生に投げかける。だが、彼女は期待したような反応を示しはしなかった。
そこはかとなくイヤな予感を覚えながらも、どうにか食事を終える。

「これ、何ですか？」
食後に運ばれてきたキレイなピンクの飲み物に、弥生が首を傾げた。
「ジュースみたいなものだよ。美味しいから、飲んでみて」
実際はそこそこの度数のカクテルだ。ほろ酔い気分にさせれば、緊張も軽くなって口説きやすくなるだろうという算段だった。
彼女は恐る恐る、舐めるように口にすると、フワッと口元をほころばせた。
「おいしい」
初めて見せたその笑顔に、伊集院の胸が一瞬どきりと高鳴った。
――笑顔はイイよな、この子……。
それは確かに実感した。その笑顔のためなら労力を惜しまない、という男は意外に多いかもしれないと、伊集院は思った――『アイツ』もそうなのだろうか。
窓の外は綺麗な群青色に染まり始めている。
伊集院はテーブルをぐるりと回ると、弥生の手を取り、そっと立ち上がらせた。
その手を彼女はキョトンと見つめ、そのままマジマジと伊集院の顔を見つめる。
――ここは、うっとりと見るところだろう？
やはり、何かがおかしい……おかしいが、このまま勢いで乗り切るしかない。
伊集院は覚悟を決めて、手に力を込める。
「俺の気持ちは解っているんだろう？」
「……きもち？」
ぼんやりと、彼女が問い返す。その頬はほんのりと桃色に染まっている。
「そう。君のコトが好きなんだ。俺と付き合って欲しい」
「……すき？」
「ああ」

伊集院の言葉に、弥生の顔は喜びに輝――かなかった。代わりに、怪訝そうに眉根を寄せている。
「弥生ちゃん？」
「いじゅういんさん、それは、なにかのまちがいか、かんちがい、れす」
何やら彼女の舌使いが怪しくなっている。グラスのカクテルは半分程度残っているのだが。
フラフラし始めた弥生の肩を、伊集院は慌てて支えた。
「そんなことはない。俺は本気だよ？」
「いいえ。いじゅういんさんのめは、かずきくんとちがいます」
「『アイツ』――新藤一輝と？　どう違うって言うんだ？」
「かずきくんは、わたしのことを、すっごくやさしいめで、みてくれるんれすぅ」
そう言うと、彼女はこの上なく幸せそうに、笑う。
あの、いつも冷ややかな眼差しで周囲を睥睨している新藤一輝の『優しい目』など、想像もつかない。やはり、それほど大事にしている女なのか。
「俺も、あなたのことを愛してるよ。アイツよりも……」
「かずきくんより、なんて、そんなの、むりれすよぉ」
即刻却下、だった。
こうなれば、言葉より行動だ。
伊集院はガバと弥生を抱き締めると、その瞳を覗き込みつつ、ゆっくりと顔を寄せる。
が。
グイ、グイグイ、と、伊集院の顔が押しやられる。彼の顎にある弥生の手は、酔っ払いとは思えない力がこもっていた。
「だめれすよぉ。わたしにキスするのは、かずきくんだけれすぅ」
いかにも押しに弱そうな彼女からの意外な抵抗に、伊集院の頭にはカッと血が上る。
「なんで、そんなにアイツがいいんだ？　あんなの、ガキがやって

るのが珍しいだけだろ？　たいして実力もないくせに、どいつもこいつも、ちやほやしやがって。ただの客寄せパンダなんだよ――ッ！」

ペチン、という間の抜けた音が、人気の少ないフロアに響き渡る。

初め、伊集院は何が起きたのか理解できなかった。痛みなど、殆どない。しかし、女に、というより、誰かに頬を張られたことなど今まで経験したことがない彼には、その行為自体が衝撃だった。

言葉もなく呆然としている伊集院の腕を振り払いながら、弥生がキッと彼を見上げる。

「かずきくんは、がんばったんだから！　いじゅういんさんのはんぶんくらいのとしのときから、ずっと、がんばってきたんだから！　いまも、がんばってるんだからね！」

フラフラと千鳥足もいいところの弥生に思わず伸ばした手は、にべもなく振り払われた。

「だれもあまやかしてあげないから、わたしがあまやかしてあげるの！」

舌足らずな口調なのに、妙に迫力がある。

小柄な弥生から睨め上げられて何も言い返せずにいる伊集院の耳に、低い忍び笑いが響いてきた。

この場にいるのは、伊集院と弥生の二人だけの筈である。いったい誰が――と見回した彼の視界に、一番見たくない人物が飛び込んできた。

「新藤、一輝……何故、ここに？」

呻くようにその名を呟く。彼は、レストランの入り口に身を持たせかけ、口元を押さえて笑いを堪えていた。

「ああ、あなたが何やら動いていると聞きましたのでね、少し見張りを付けさせていただきました。ここには少し前に着きまして。失礼しました。我慢しなければ、と思ったのですが……」

そう言いながらも、クックとその喉の奥から漏れてくるものが、いやでも伊集院の耳に届いてくる。バカにしているのかと一輝を睨

み付けたが、彼の目は笑いとは正反対の色を浮かべていた。いつもの、穏やかかつ冷淡なものとも違っている。ソレを向けられた伊集院の背を、ブルリと悪寒が駆け上がっていった。
「あ、かずきくんだぁ！」
そんな伊集院の胸中をよそに、能天気な声が響く。弥生は子どものように両手を前に突き出して、ふらつきながら彼のもとに走って行く。
人を射殺すことができるのではないかと思われた一輝の眼差しが、弥生に向いた途端に一変する。
――これが、新藤一輝か？
伊集院には、先ほどの冷笑を浮かべていた男と、今恋人を見つめて微笑んでいる男が同一人物だとは信じられなかった。
「弥生さん」
一輝は、伊集院が今まで聞いたことのない甘やかな声で彼女の名前を呼び、つまづきかけたところを受け止め、そのまま抱き上げる。
「お酒を飲まれましたね？　大丈夫ですか？」
「だぁいじょうぶ。なんだかフワフワして、きもちいいよぉ」
「それは、酔っているんです」
「うふふ、かずきくん、だぁいすきぃ」
首にしがみつく支離滅裂な弥生に、一輝はこの上なく満足そうだ。まるでかけがえのない宝物でもあるかのように、彼女を抱き締めている。
――結局、自分のしたことはなんだったのか。むしろ、ヤツを喜ばせただけだったのか？
まるっきり蚊帳の外に置かれた伊集院には、そんな気がしてならない。そうなると、腹立たしさだけが湧き上がってくる。
「なんなんだよ、お前たちは。ガキにはガキがお似合いだよな。ああ、ガキのお前には、色気のないその女で充分だ」
伊集院が嘲るようにそう言った、その時だった。
一輝に抱きついていた弥生がパッと振り向くと、噛み付くように

言い放つ。
「かずきくんはガキなんかじゃないんだから！　あなたなんかより、ずっとえらいのよ！　とってもおとこらしいんだから！」
そう言うと。
一輝の顔を両手で挟み、自分の唇を彼のそれに押し付けた。
色気など微塵も感じさせない、キス。
実は弥生から一輝への初めてのキスなのだが、伊集院はそれを知る由もない。ただその迫力に、呆気に取られるばかりだった。
どれほどそうしていただろう。
プハッと音がせんばかりに顔を離すと、再び弥生が伊集院に振り返り、ビシッと人差指を向ける。
「いい？　わたしがキスするのは、かずきくんだけなんだからね！　かずきくんはせかいでいちばん、かっこいいのよ！」
惚気るだけ惚気ると、彼女はくたりと一輝の肩にしなだれかかった。伊集院に、何か応えさせる暇もなく。
一輝が弥生の身体を抱え直し、一瞬優しい眼差しを落とした後、いつもの視線を伊集院に向ける――いや、いつも以上の鋭さだ。
「さあ、今回は僕もいい思いをさせていただきましたので、これでお開きにしましょうか。でも……今度彼女に不快な思いをさせたら、僕も手を打ちます。格下の企業だから、と油断しない方がいいですよ？」
そう言って、彼がニッコリと微笑む。伊集院は、人の笑顔をこれほど恐ろしいと感じたことは今までなかった。その鬼気迫る笑みに向けて、コクコクと頷く。
「よろしい。では、また、どこかでお会いしましょう」
そうして、新藤一輝は弥生と共に去って行く。
残された伊集院は、この二人には二度と関わるものかと、心の中で誓った。

6

ふと目を開けると、弥生はキングサイズのフカフカなベッドに寝かされていた。

頭の中は妙にすっきりしているのだが、いったい、何故、こんなところにいるのだろうか。脳を振り絞って記憶を辿っていってみると、伊集院と食事を終えたところまでは到達する。

――その後は……？

さっぱり、記憶がない。

焦る彼女の耳に、控えめなノックの音が届いた。次いで、ゆっくりと大きな扉が開き、様子を伺いながら誰かが顔を覗かせる。

「あれ、なんで？　一輝君？」

本当に、何故、彼がいるのか。

弥生の頭の中には疑問符がいっぱいだったが、一輝はいつもどおりに微笑みながら近付いてくる。

「気分は？　頭が痛かったり、ムカムカしたりしていないですか？」

どうしてそんなことを訊いてくるのか。

いや、それよりも、この流れからいくと、もしかしてこのベッドは一輝の物なのだろうか。

一輝は混乱している弥生がいるベッドまでやってくると、そこに腰を下ろした。

「弥生さん、伊集院さんとのお食事に出かけたでしょう？　そこでお酒を飲まれて、酔ってしまわれたんですよ。で、彼が僕に連絡してきまして」

「わあ、わたし、あの人に迷惑かけちゃったのかなぁ。あ、でも、やっぱり一輝君のお友達だったんだ。だから、あんなにわたしとお話したがったんだね」

「まあ、友達というか、仕事上の知り合いですよ。単なる」

「あれ、そうなの？」

だが、彼の方は、一輝について色々言っていたような気がするのだが。
首を傾げる弥生の髪を、一輝がそっと一房掬い取る。そのくすぐったさに、心臓が一つ大きく打った。
「一輝君……？」
彼がそれに口付けるのを目の当たりにして、どぎまぎしながらも視線を逸らせることができない。一輝が、上目遣いに見つめてくる。
「弥生さん？」
「なに？」
「お酒は、僕が一緒の時だけにしておいてくださいね？」
「え？」
「酔ったあなたはとても可愛かった。アレを他の男に見られるなんて、僕には耐えられません」
彼のその台詞に、火照った頬から一瞬にして熱が引いていく。
「わたし……ナニかした？」
恐る恐る尋ねる弥生に、彼はもったいぶった笑みを向ける。
「ナニか？　……ええ、そうですね。したと言えば、しましたねぇ」
「何？　何なの？」
「知りたいんですか？」
言外に、本当にソレを知ってしまってもいいのかと問われ、弥生は混乱の極致に至る。
「え、や、やっぱり言わなくていい！」
「じゃあ、僕だけのヒミツにしておきます」
「え……え――」
やはり、知っておいた方がいいのだろうか。
だが――。
青くなったり赤くなったりを繰り返す弥生に、一輝が、意地悪で優しい眼差しを注ぐ。
――結局、弥生は真相を知らされたのか、どうなのか。
その結果は、この二人にしかわからないことなのである。

6（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。感想や評価をいただければ、励みになります。
このお話、ちょっと次回への伏線のようなものになっています。
シリーズは、次が実質的な最終話で、その後長めのエピローグ的なサイドストーリーを入れて、『おしまい』にする予定です。ある程度の流れはできているのですが。
またしばらく期間があくと思うので、ひとまず完結で……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8123w/

大事なあなた

2011年11月27日13時47分発行